

川柳塔



昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十七年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九四三

日川協加盟

No. 943

十二月号

寒中見舞募集

○本誌平成18年2月号掲載

○締切 12月23日

川柳塔社事務所宛

平成18年大会予告

日川協岩手大会

平成18年6月11日(日)

花巻温泉ホテル千秋閣

『川柳塔』九五〇号記念誌上川柳大会

平成18年7月号発表

第12回川柳塔まつり

平成18年10月8日(日)

アウイーナ大阪

国民文化祭山口大会

平成18年11月4日(土)

萩市民館

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

ジュニア川柳

ことしも鹿野町！

河内 天 笑

第20回国民文化祭・ふくい2005は十月二十九日、福井県坂井町・坂井中学校の体育館で盛大に開催された。これに先立って九月十三日、事前投句の二次選のために坂井町役場を訪れジュニア部門、一般部門に分けて選考が行われた。町長さんをはじめ実行委員会事務局の皆さん約十名の自己紹介にはじまり、今川乱魚日川協会長、大野風柳氏、西米みわ氏、森中恵美子氏、そして私と順に自己紹介を終え、やや緊張した雰囲気の中で選考が行われた。昨年までと大きく異なる点はジュニア部門を小、中学校のみとし、高校を一般の部に移した事である。

ジュニア部門の各題特選三句ずつ合計九句が記されたプリントが五人の選者に配られ各自が三点、二点、一点の配分で記入し、その後意見を出し合つて調整しつつ、最高点から順に一位から九位までが決まる。そして各題二句ずつの佳作が配られ、その中の高点句が第十位となる仕組みである。勿論この段階で作者名はわからない。

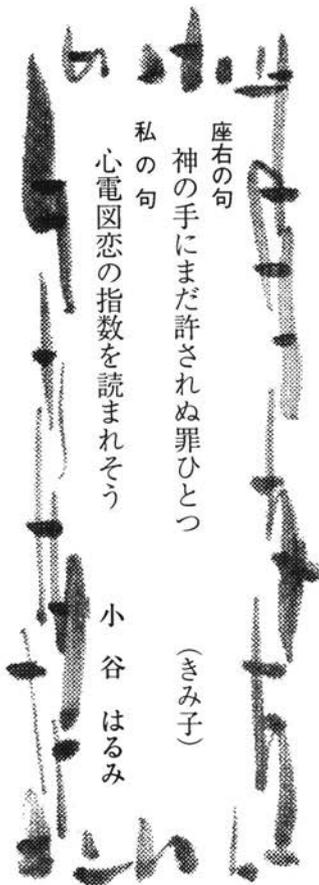
小・中学生合わせて三千三百五十三名の中からの輝く十句だ。鳥取市鹿野町がこの内四名、続いて群馬県が三名、あと岩手、新潟、福井の三県が分け合う結果となり、ゆつくりとよるこびがこみあげてくる帰路であった。

昨年度の快挙につづく鹿野勢の活躍はいよいよほんまもんだ。中原諷氏が指導する中学勢は相変わらずの好調ぶりだが、第一位文部科学大臣奨励賞に輝いた「恐竜もほくらと同じちきゅうの子」は鹿野小学校六年生・田中拓広くんの作品だ。森山盛桜氏と土橋螢

氏が鹿野小学校に時々呼ばれ指導されている。こうして一体となって川柳にとり組んで居られる鹿野町の熱さが、この結果に結びついたものと思う。

ちなみに、中一の野藤英治君は「メガネかけきのこの僕とさよならだ」は福井県知事賞に、同じく中一の国森茜さんは「メガネから力をもらう視野もらう」は第二十回国民文化祭福井県実行委員会会長賞に、中二の高田恵梨子さんの「恐竜が見ていた空が今はない」は福井県川柳作家連盟会長賞にそれぞれ輝いた。なお、この他鹿野小学校の田中尚宜君の「くもりなきメガネは先をみつめてる」も各題三句ずつの佳作として入賞した。

ことしもう一つ嬉しい事は三宅保州氏が情熱を傾注された「川柳しませんか」の小冊子の評判が大変よく、噂を耳にするたびに嬉しさがこみ上げてくる。この冊子で来年は大きく活動範囲が展開するものと期待している。



座右の句

神の手にまだ許されぬ罪ひとつ

(きみ子)

私の句

心電図恋の指数を読まれそう

小谷 はるみ

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「茶筌の里・生駒高山」

| | | |
|----------------------|-------------|-------|
| ■巻頭言 ジュニア川柳 ことしも鹿野町！ | 河内 天笑 | ：(1) |
| 趣味は遊びでなく感動だ | 遠山 可住 | ：(2) |
| 川柳塔(同人吟) | 河内天笑選 | ：(4) |
| 川柳塔の川柳讃歌 (12) | 木津川 計 | ：(53) |
| 自選集 | | ：(54) |
| 水煙抄 | 板尾岳人選 | ：(58) |
| 愛染帖 | 新家完司選 | ：(80) |
| 誹風柳多留 一篇研究 4 | | ：(84) |
| 檸檬抄「名簿」 | 仁部四郎・藤田泰子共選 | ：(86) |
| 「鐘」 | 山本正光選 | ：(88) |
| 一路集「反省」 | 塔 寛子選 | ：(88) |
| 「終わり」 | 坪井孝一選 | ：(89) |

趣味は遊びでなく感動だ

遠山 可住



ふと出会った川柳。それは目からうろこの感動であった。以来五十年、よたよた従って来た川柳の道は、昨秋「川柳ささやま」の句

報六〇〇号の歩みとなった。

人生は仕事と趣味の二人連れ、と言うのが私の持論だが、地方公務員という本業と農業(副業的規模)という家の仕事を両肩に担っての毎日で、とても趣味に時間を割く余裕などは無かった。ただ幸いなことに、公務員という仕事は農業技術の普及であったことから、家の田んぼがそのまま本業の実践農場になって自信と信頼の活動が出来た。

普及という仕事は農村の第一線にあつて、農家との対話から始まるので、そこにいろいろな人との出会い、心の出会い、本音の語り合いが生れる。それはそのまま川柳の心に通じる面白さがあつて、私の場合は川柳作句という時間を割くことも少く、ノートと鉛筆がポケットにあれば、仕事の中でふれ合う一言、一言がハンド

初歩教室「早い」……………三宅保州…(90)

秀句鑑賞「同人吟」……………土橋 螢…(92)

水煙抄……………島 ひかる…(94)

■エッセー あらためて閉会のことば……………仁部 四郎…(95)

時代をつかむ……………井上 桂作…(96)

岡本吉太郎さんを偲ぶ……………田中正坊…(97)

第20回国民文化祭・ふくい2005……………(99)

十一月本社句会……………(100)

各地柳壇(佳句地十選/小川てるみ)……………(104)

柳界展望……………(119)

十二月各地句会案内……………(120)

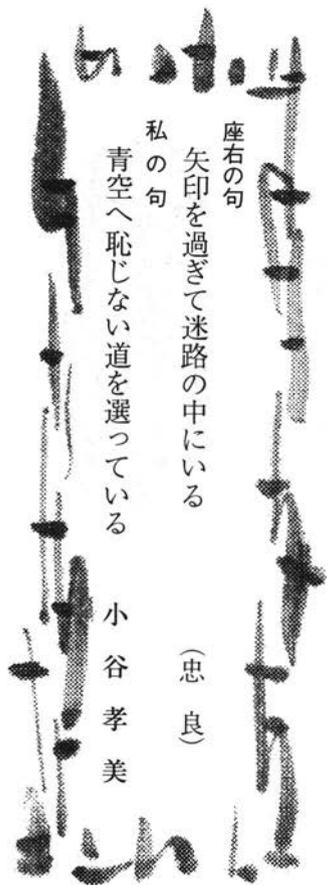
■編集後記(ひとこと/早川棲世)……………楓葉・希久子…(122)

座右の句

矢印を過ぎて迷路の中にいる (忠良)

私の句

青空へ恥じない道を選っている 小谷 孝美



ルの遊びのような存在になって、川柳に溶け込んでいたようである。

農業といっても今の機械化農業でなく、トラクターも田植機もない時代だから、牛で耕し、人手で田を植え、刈取りをする朝星、夜星の労働である。こんな時、ふと出会ったのが川柳。それは島根県の農家の主婦、笹本英子さんの句であった。同じような貧しい農村生活の本音がそこにあって、「これが川柳か」という目からうるこの感動が、五体をつ走ったのを憶えている。特に次の五句は若き血を燃えたたさずにはおかなかった。

豊作とさわいでみても五反八畝(英子)

百姓に生れ鎌とく午前四時

そとは雪ガラスに雪とかいてみる

夕映えへわれ恋をすと叫びたく

月へ出て月はわたしのよい味方

それ以来、川柳雑誌の諸先輩から現川柳塔の諸先輩の名句が、私の大学ノート「名句集」を飾ることになって、この数冊のノートが私の川柳の師になっている。

川柳に出会い、川柳を識り、川柳に教えられた遠い道を静かにふり返るこの頃である。趣味は遊びでなく感動だ。川柳が教えてくれた私の人生観である。



河内天笑選

八尾市 村上ミツ子

秋風に乗って南画と黄泉の旅(直原玉青氏逝去)

黄門も美人刺客に狙われる

裏方の汗はテレビにうつらない

晩学へ広辞苑引くドッコイショ

風邪の熱ぐらいと軽くみていたが

本音にはしっかり鍵をかけておく

神戸市 山口光久

授乳する顔は天下を取ったよう

うそ一つつけぬ親父の顎の線

流木は無駄な抵抗などしない

和やかさ演出してる軽い嘘

ポストよりお給与ですと妻の声

紅顔が表と裏を使い分け

鳥取県 蔵本悦子

コスモスもいつぱい恋をするだろう

私に秋の鏡が気をつかう

休耕田だんだんスキ陣を取る

コスモスになぜか照れてる鱈雲

ダイエツト美味しい秋が過ぎてから

人間の勝手を地球許すまい

寝屋川市 籠島恵子

入口も非常口だと心得る

回転寿司客がどんどん回転す

よそ事でないかもしれないぬへビ サソリ

あいうえお順もなんだか不公平

悪知恵をつけて貰った帰り道

政治家のせいだと思おうアスベスト

堺市 志田千代

すべり止めもやの道を歩いてる

相談をしたお方から漏れていた

世話好きの亡母がまた種に花

かけっこの速い太郎の嫁になれ

太郎花子残してほしい子の名前

あれこれに化けて夫を楽しめます

海南市 三宅保州

海外旅行まかりならんと言う主治医
途中下車前途無効に邪魔される

鉤裂きのような別れが繕えぬ

ベットにはならず滅んだ狼よ

キズモノ難あり地球という器

風船をかたく握っている迷子

東大阪市 谷口 義

ユニクロで買ったと言わんでも分かる

女にも皆目わからないおんな

入門書だけで終った水墨画

トンカツの好きな家族で遊び好き

歯ブラシの硬さが違う家族です

似合っても似合わなくても着る喪服

弘前市 高橋 岳水

小さな字に生死がからむ但し書

私心なき汗がしたたるボランテイヤ

胸上げが敗者の視野を埋めつくす

名を捨てて一会の風とたわむれる

アクセルを踏んで昨日を振り払う

安心がほしくてサブリメント飲む

鳥取市 録 沢 風 花

ご近所の解体工事もマスクする

高齢化空き家が少しずつ増える

取りたててニユースは無いが恙ない

名月が妖しく照らし眠れない

影法師わたしと同じ骨粗鬆

青い鳥翔んで来そうな秋の空

枚方市 海老池 洋

二匹目のドジョウも狙うウォームピズ

電話口妻とつときの声を出し

正座は足 胡坐は腰が痛くなり

土となら本音で話できる仲

体重計買ったが妻は量らない

華やかな道にも踏み絵落とし穴

藤井寺市 高田 美代子

脱線をしたがる靴を履いている

外国の松茸だけどほんまもん

冗談にも好きだと言ったことがない

目の前の餌にとびつかないように

歳のこと忘れて赤い服を着る

わたくしが少し崩れて十二月

唐津市 坂本 蜂 朗

さわやかな笑み確かめる洗面所

神様が眉につばつけ聞く懺悔

悔いのない人生などとベロを出す

停年後あきずに磨くただの石

もぎ取って早く通れと改札機

古い酒封を切らせる友が来る

檀原市 居谷 真理子

十五分男待たせた今日の贅

満月がくれた悪女になる勇氣

病んで見る夢には若き父と母

十三弦 跡とり娘という音色

白熊の雪より白い子が生まれ

この値段作つた人は知らぬはず

鳥取市 近藤 佳子

甘酒がとろりもやもや消してくれ

お別れはきれいな嘘がよく似合う

白足袋のきりりと嫉妬寄せつけず

まだ生きてますよと梨を送ってる

打ち明ける痛みのわかる人だから

海岸に佇てばあなたが匂う風

堺市 山本 半銭

持ち時間わからないからおもしろい

夕焼けに包まれそつと眠りたい

ふたありで茶漬けを食べて旅終る

ふるさとに神さまが居る秋祭り

いたわりの嘘だと気付く今にして

コンパクトだけで女は磨けない

西宮市 秋元 てる

草紅葉思ひ出だけの尾瀬の秋

大物は自分で電話など取らぬ

亡き母の育児ノートにあるわたし

美学とかロマンとか男可愛らし

ヒロインは転向三枚目で行こう

ブランコに揺れを残して二人去る

富田林市 中井 アキ

突然のお誘いだつたのが最後

父母の居ない里にも柿実る

残り火がまだまだ女主張する

気の抜けた返事に妻の目が光る

少年の夢限りなくかぎりなく

あの時の瞳に戻る愛戻る

奈良県 渡辺 富子

巨大クラゲ海を席卷する恐さ

逃げ足の速い月日を追う日記

美しい誤解のままに許し合う

君と僕ねじれたままでしじみ汁

すり減った捻子がころがる父の部屋

危険水位越えそうな恋胸に棲む

和歌山市 古久保 和子

手水鉢の水にも秋の雲が湧く

靴紐を結んであげる姉妹

いつもの席でいつも読んでる経済紙

迫力満点かあさんのオムライス

寝言にいびき私を責めて下さるな

脳味噌にどうも消しゴムあるらしい

松江市 三島 崧 丘

着ぶくれのわたしを笑う雪ダルマ

衆目の中で脇役演じきる

お笑いを肥やしに脳の活性化

積んで崩してやつと二人のマイホーム

揺れながら降りながらいろは坂

松江市 川 本 畔

山びこは二十歳の響き持っている

四捨五入しながら走るマイペース

月も私も約束があり走り出す

無雑作に稲穂は体投げ出して

絵の中で落穂拾いを手伝った

松江市 小 川 注 湖

貝のよう口を閉ざして争わぬ

白魚の腹は透明秘密なし

銀婚式息子のくれた温泉地

神様にテロおつくりか聞いてみる

マニキュアの指にドラマが隠される

松江市 佐野木 み え

紫のハーブに心癒やされる

パプリカの赤 絵の中から飛び出した

メロドラマ テレビの中にのめりこむ

菊花展さすが王者の貫緑だ

不整脈気にせずいつもマイペース

松江市 松 本 知恵子

宮参り家族写真の空澄んで

初孫に貰う生きてゆく力

きらきらとみどり子あやすママになる

国宝の神魂神社で神と居る

傷心に乗せた電車を母が待つ

松江市 津 川 紫 晃

命の重さ難民の子もテロの子も

いい話こっそり丸ごとラップする

年輪のドラマ演じた深いしわ

登校拒否 犬が少女にお説教

大地踏む明日を待たる元氣足

松江市 安 食 友 子

マドンナよ男の駒も忘るるな

笑わして笑ったわたしおかめです

娘との不仲を聞かす友の贅

眠そうな受話器の主も乗っちゃった

意味深な囁きですぬ宵の虫

出雲市 園 山 多賀子

七回忌追慕も褪せた紫煙の輪

潤滑油くれる嬉しい柳友がいる

月満ちて羽化が始まる夜の蝶

希少価値失せて私は傍観者

清濁を噛みしめ卒寿齒は達者

老獺をみごと晒した影法師

出雲市 吉岡 きみえ

頑張ろう にぎりこぶしがまだとけぬ

清め塩まいて火まつり水まつり

にここの仮面ころっと瞞される

米のめし食えるうれしい快復期

出雲市 富田 蘭水

全霊をそそぐ穂先に写経する

そよぐ風当たると頭さえてくる

逢ってきた余韻の波が和んでる

頭下げてばかりのテレビに慣れてくる

映画村壺井栄の町おこし

出雲市 小玉 満江

中々に納得しない太い眉

展示会 粗品欲しさに無駄を買い

医学書を読んで勝手に自己診断

立ち向かう若い議員の自己主張

靖国で純ちゃんまんじゅう買い求め

出雲市 伊藤 玲子

箸袋 今は形見の一行詩

喪服脱ぎ泪の涸れるまで走る

走りっこ私と遊ぶ秋の月

のほほんがチャリ覗かす親心

山の幸ほどよく炊けて輪が和む

畑を打つ友も元氣だガキ仲間

出雲市 森 茂美

こうのとり今夜は何処が時やら

遣伝子を組みかえられて生きている

蝶蝶がまた来てくれた彼岸花

街角でふと足止めるなつかしさ

出雲市 久谷 まこと

般若経誦んじ日毎唱和する

残り日を数えて今日の幕下ろす

これからの夜の長さをどう捌く

言い訳ももう馴れたもの年の功

もう師走あれもこれもと欲張って

出雲市 岸 桂子

合掌の時には澄んでいる心

結局は二膳の箸と風景画

てにをはをポストの前で一思案

人の輪で生きるつもりのお笑い作り

戦争のない幸せに気付かない

出雲市 多久和 敬子

かくれんぼ孫にパワーをもらう日々

コスモスが遠い記憶を呼び寄せる

来年の予定も入れて翔んでいる

他人には言えず日記に書いておく

石段を登りストレス捨てて来る

出雲市 持田 多輝子

境遇が似た者同士うまが合う
文才はいないがどの子もみな素直
つまらない話に乗らぬ父の肩
くじ売場一億円の夢抱かせ
お浄土へ罪ほろぼしの念珠くる

出雲市 佐藤 治代

賑やかな家族へ朝の飯を盛る
太陽は遠くて近いお友達
七十三歳どきどきもする そわそわも
から元氣出して大きな声を出す
寝起きする夫婦のむろに色がない

出雲市 小白金 房子

風は秋心の鬼と寺まいり
店頭で迷う才女の市場かご
栗はじけ民話の里に秋深む
戴いた辞典宝として生きる(尼先生)
里いもの味覚ココロ秋を盛る

出雲市 多々納 テル子

トイレには朝刊マンガ置いてある
頭痛薬一錠のんで様子みる
洗濯も食器洗しもスイッチオン
ご多忙でいつも留守電味けない
頑張るぞ五年綴りの日記帳

出雲市 青山 久子

火をつけた人と山坂越えてきた
送り火がすめば心も秋になる
伴走の友が次つぎいなくなる
遠くからそっと見守る鬼瓦
人間もカラスもつまみ食いが好き

出雲市 小豆澤 歌子

おだやかな話大好き箸袋
さよならも言わずにいった茜雲
雲流るどこへ走つていくのやら
うな垂れて稲穂反省ばかりする
決意して真つ直ぐ飛んだ白い蝶

雲南市 毛利 幸

しがらみを洗い流して泳ぎ出す
ストレスが溜って袋はち切れる
歳月が友との便り遠くする
稲の穂に食の未来を問うてみる
ふんざりがついて心が軽くなる

島根県 伊藤 寿美

苺スプーン掻き混ぜている独り言
反故にした約束胸に蹲る
グーの手でわたしの哀しみを拭う
分別をすればわたしは燃えるゴミ
宰相の出す刺客は国のためですか

岡山市 井上 柳五郎

米寿まだ飲める幸せ妻の酌
人生暮色まだ決断が空を舞う
行間に鬼の言葉がかくれてる
ふと襲う孤独はなんの前兆か
黒白をつけたくないの互角です

倉敷市 小野 克 枝

真実を伝えられない友見舞う
生きざまを見せて点取虫は這う
花屋から花が届いて生き直し
爪切っておく旅立ちは不意に来る
海からの陽よ平凡の有難さ

倉敷市 撰 喜 子

梯子を掛け届く高さの望み持つ
壁は画布塗り重ね行く子沢山
腕くめば言葉いらぬ星月夜
読めなくてもうれしい母の変体仮名
変化球投げ妻の乱幕が開く

倉敷市 井上 富 子

マンションというお城でくらす王子様
社長室のドアの前で深呼吸
片道キップであなたに嫁ぐ綿帽子
花言葉も知らずに野暮なプレゼント
指笛に誘い出される揚羽蝶

真庭市 福 嶋 智恵子

薫風師北斗の杓にメ女乗せ
老父母と案山子まつりの握り飯
寝転んで地球の温み過疎にある
懲りないのだからか何度でも転ぶ
黄昏の街道走るママチャリン

真庭市 国 米 きくゑ

亡夫の墓華やぎ添えて曼珠沙華
青空と笑顔大好きにぎり飯
高い天、心耕やす豊かな日
白壁に柿輝いて秋日和
竹を踏む脚健康を願いつつ

美作市 小 林 妻 子

開放感抱いて女も共稼ぎ
仏様に迷うた話など出来ぬ
飽食を断つ分別が見つからぬ
平安の恋平成の恋眉がない
白菜もキャベツも水無月になる

美作市 山 本 玉 恵

紅少し濃くして喜寿の朝とする
おそ咲きの花に注いだ一雫
あの夢には届かぬ走っても走っても
輝かせてあげたい老母の髪を梳く
とりあえず命の限り美しく

美作市 大石 あすなろ

一輪の花ほのほのと無人駅
再会へ胸のトレモロ鳴りやまず
座り直した時が一番こわい妻
軽トラに乗った神輿が過疎をゆく
自己責任で打たねばならぬ句読点

岡山県 福原 悦子

自問自答 独走小石に蹴つまずき
花活けて未練ごころは捨て切れず
見抜かれた弱点を追う不整脈
粗衣粗食心に沁みて七十路
本音は腹据えしっかり聞いておく

竹原市 正畑 半覚

草原のうねり大地の鼓動かも
阿蘇五岳ゆっくり寝ようではないか
倒された稲穂を棒で起すひと
赤牛の目線は阿蘇の噴煙に
蓮の実を食べた仏の味がした

竹原市 森井 菁居

雲海のどこかに在す神仏
賭け事を控えお金がたまり出す
肉筆に限ると思うラブレター
ガンリンが要らぬ車の夢を見る
宮里のすごさ臆せぬインタビュ―

竹原市 岩本 笑子
振り返る帽子をちよつと直すまで
透明になれそう萩の花はらり
月に濡れ萩に濡れてる庭は秋

歯医者から一步突然秋の風
お隣もそのお隣もサンマかな

竹原市 時 広 一 路

いい知らせ来るよう庭を掃いておく
今日の日がどうあれ夕陽美しい
空青し内緒話は出来ないね
死ぬるまで付合う気かね点滴よ
休肝日酒の話に横を向く

竹原市 石原 淑子

備長炭燃えること無く部屋の隅
自爆するために産んだ母は居ない
鰯雲海の鰯は不漁です
焦る気を両面テープが弄ぶ
ウォームビズひっぱり出したチャンチャンコ

広島県 藤解 静風

行間を読める眼鏡を母は持ち
みぎひだり違う笑顔を知る眼鏡
しょぼくれた姿は見たくない鏡
右は鏡へ左は他人へ見せる顔
年ごとに父に似てくる眼鏡越し

宇部市 平田実男

判決が国には甘い裁判所

美人だと思つたことがない美人

雑草の力が野菜にも欲しい

任されて任して絆太くなる

ほどこしたい日もありました赤い糸

美祢市 安平次 弘道

句読点打つて上手に逃げて来た

閑居しているのはドラマかも知れぬ

深読みはよそうよ意地がからみつく

原点に戻れば先が見えてきた

吊り橋を揺すれば謀反こぼれ落ち

熊本市 永田俊子

嫁の声聞こえぬ距離に居て平和

心のトゲ私もぬきたい松手入れ

あさましや絶食七日目粥の夢

キッチンで生きてる母の目分量

そこまでは言わずに糸をつないどく

熊本県 高野宵草

舌肥えて大方不味い不幸せ

難しさ怠け心がシャシャリ出る

髪よりも麓の髭が白くなる

扇風機閑居している良い季節

雀まで敬遠消毒薬の庭

熊本県 岩切康子

愛車傷 徹底的に塗る根気

改革かボストの時刻めっちゃ減り

退職金は半分つこと聞いちゃつた

理屈つけ現代美術みています

青春が詰つたアルバムおほほのほ

唐津市 山口高明

本当の理由を話さぬ離婚劇

奉納の女相撲が四股を踏む

不可能を可能にさせた青いバラ

賞味期限切れたと女将御謙遜

餅代と言うポーナスの町工場

唐津市 久保正剣

充実感ないまま余命延びて行く

リハール出来ぬナースの救急車

交換日記未熟な思慕が往き来する

ハローワークの椅子を知らない天下り

赤門を出てフリーターの仲間入り

唐津市 井上勝規

辿り着き涙で拌む手暗がり

物忘れ羨ましいとウツが言う

身勝手か終り良ければだけ願い

省略に慣れて阿吽の老婆といふ

衰えていつも流れの外に居る

唐津市 市丸 晴翠

高知市 北川 竹萌

カトリーナ生きた証しを奪い去る

指切りは三途の川の待合わせ

多機能の製品修理ばかり増え

通院の合間に入れる予定表

共白髪互いの杖となる絆

唐津市 宗 水笑

優勝の夢が打たせた逆転打

漬け物の味は逸品母の自負

子や孫にのぞみをつなく好々爺

例えばの話がうまいご住職

虫の音に俄詩人のひじ枕

唐津市 樋口 輝夫

気が付けば嫁が老眼かけている

明日のため尻尾ゆっくり休ませる

酌ぎに来た魂胆を読む苦い酒

肝臓にお礼を言って飲んでます

中三を見上げて叱る強い母

高知市 小川 てるみ

残り時間を謳歌している草紅葉

生き甲斐と言うには軽い作句帳

音程が少し狂った今日の鬱

コスモスの海でスカツとして帰る

ときめきが欲しい心が弾まない

わがことはすべて済まして無事に暮れ

敬老会夫婦そろうてよい日和

おのがこと誠実一路楽しゅうに

秋彼岸義娘の車で墓参り

死に神のようにまつわる子はいらぬ

高知県 赤川 菊野

清濁を吞んで静かな母の川

ハリケーン美女の名前でやって来る

拉致の子もきつとこの月見てるだろ

パスポート次は西方浄土かも

出生はわたし落人亡夫士族

高知県 小澤 幸泉

最終章を設けてみよう自分史に

それなりに大人を目指す茶髪の娘

期すること生前葬を自演する

年金のプラスの夢が消し去られ

日記帳伏せ字を残す青春譜

東かがわ市 神保 坊太郎

わざと呆け通し名優気分なり

取替えの効かない脳を洗ってる

約束へブレーキかけて生きており

それから積りつもってウツとなり

窮屈な家風を嫁が変えてくれ

東かがわ市 池内 かおり

隅っこが好き負け犬の血だろうか
今風に着ればモンペも超かわいー
番犬に夫連れ出す墓参り
お互いさま笑ってトゲは抜いておく
墓に花夫に酒が良く似合う

東かがわ市 川崎 ひかり

すり切れた尻尾家族に見せられぬ
丸のみの嘘がからまるのど仏
二人目が産まれ母親らしくなる
ブランドの鯖も食べれば鯖の味
鼻薬効いたか風がやわらかい

東かがわ市 原 賢

大喧嘩しても笑える血の絆
何もない日々で倅せだと思ふ
くたびれた辞書に残っている初心
忍と苦を皺に刻んだ母の日々
福の神笑顔たやさぬ人を選ぶ

東かがわ市 清川 玲子

主婦の座にお世辞言うのも板に付き
投票に行くにもちよつと鏡前
つくづくと平和と思う日程表
駅前の団地が僕のルートです
石仏一つ一つに慈悲の顔

東かがわ市 伊勢 八重子

長男の嫁という名で縛られる
甘い罨あの手この手についコロリ
健やかにただそれだけを母心
死ぬほどの恋もはるかなセピア色
消えそうな伝統守る祭りの灯

松山市 高橋 宏臣

お歳はと聞いたら返事は西暦で
長い列ちよつと並んでみようかな
つまずいた隙間に他人の花が咲き
ずぶ濡れの方が惚れてる二人傘
日本が真ん中にならない世界地図

松山市 古手川 光

翌朝の月下美人は哀れなり
アメリカを一喝消えたカトリーナ
蝉しぐれの後はしんみりチチロ虫
表札にまだあの人は生きてはる
ルンルンで走る赤字の本四橋

松山市 宮尾 みのり

いい方にとらねば闇を深くする
檜山を桃源郷と思わねば
記念日は食卓にある小市民
後悔も夢ももしもの中にある
台風へお手植えの木の一大事

松山市 丹下 美津子

若いなあ祭太鼓に飛び起きる

インタビュ―百寿の叔母も化粧する

丸木橋渡る勇気をくれた母

合格通知祖父母ささやく金工面

お手頃なお値段ですと売り上手

西予市 黒田 茂代

コスモスのさゆらぎ風のファンタジー

高下駄に蛇の目わたしは雨が好き

落したとこにちゃんと待ってた落し物

買って来たのはわたくしのため釣

秋が逝く心に柳を秘めたまま

大洲市 中居 善信

崩れないおんなちつともおもしろない

逃げた魚肴にしているコップ酒

おとつとつかり乗った誘い水

薄笑いそんな男は許さない

ラブイズオーバー扉を叩くことはない

砂川市 大橋 政良

その裏にうつが溜っている仮面

太陽の死角のつべらぼうになる

余白から余白へ渡す縄梯子

冬眠のシナリオを書く繭の中

ポックリ死握りしめてたスケジュール

弘前市 相馬 銀波

ひこばえに秋の農夫は癒される

満ち足りる時間眼鏡をまず磨く

薄味にひとこと酒にもの足らず

二枚目の舌が演じる正義感

さよならは近くて遠い人にする

弘前市 福士 慕情

鮭帰る故郷の川が活気づく

組合員以外は捕れぬ川の鮭

産卵この一瞬に生きてきた

産み終えて鮭は流れに身をまかす

鮭よりもイクラが高い値札付け

弘前市 高瀬 霜石

蝶番雨季も乾季も越えてきた

健康なつもりで酒を飲んで寝る

銀行で血圧計るお茶も飲む

独身が野菜のためを食べている

禁酒禁煙身体が変になるだろう

弘前市 櫻庭 順風

虫の音が響き渡って酔っている

来客を歓迎しては鳴きささがる

鈴虫の声も張り切る秋最中

夜もすがら日もすがら鳴くふくよかさ

餌にすぐかぶりつかない大らかさ

弘前市 今 愁 女

窓四角のこして絡む薦紅葉
やがて来るもの前ぶれ秋時雨
霜ばしら踏んで道草ランドセル
散りてなお艶やかにして柿紅葉
縫いぐるみ犬が留守居の旅三日

弘前市 須 郷 井 蛙

飲み過ぎの夫に付きたいATS
年金にじつと耐えてるもやし汁
年金を二回遅れで取る余裕
趣味の会友からもらうエネルギー
一流の料理割箸から違い

弘前市 岡 本 花 匠

蛇騒ぎあるたびごとにギョツとする
コウノトリ津軽に福を連れて来て
津軽弁の死語をたずねる心酔派
冬眠へ蜜吸う蜂も秋仕舞
雪搔きの戸口に置いて冬構え

黒石市 相 馬 一 花

へそのある豆腐を愛す高齢者
なげなしの髪がなくなる日の不安
心臓がパンクしそうな請求書
何事もなく平凡な日が暮れる
美しくなるヒントなら高く買う

青森県 小 寺 花 峯

地球が回ってる僕は呑んでいる
アルコール回って消える歯の痛み
日の出に起きて日の入りを待つおチョコ
飲み会の予定を記す二重丸
懺悔する酒が揺れてる思慕の坂

十和田市 阿 部 進

人生のハードル越えて喜寿迎え
ワニ皮の財布の中は小銭だけ
古里の墓のお守りに困り果て
好きなもの最後に食べる癖がある
リングの花咲くと想い出よみがえる

佐倉市 岡 井 やすお

東京五輪共催はもう御免
看板だけ大きく出して逃げ支度
料亭に行きたいのやら赤い服
紅白もスキウタ公募で盛り上げる
大企業ますます太り年終わる

東京都 小 川 賀世子

岡山はいいなあ秋を一人占め
芸術の秋倉敷へ来ています
車間距離守っていますお隣と
お互いの一病癒し合う茶店
おいでやす京は全山燃えています

東京都 岸野 あやめ

さいたま市 星野 育子

おでん爛酒弱い上役強い部下

片言でポロリと真似る親の愚痴

強情な男嘘泣きには弱い

株長者損した人を思わない

奥の手を出す日は来ない方がよい

東京都 清原 悦子

無理をせず労りながら行く余生

明暗をつけて小さな絵が生きる

恥をかくつもりで話し打ち解ける

踏ん張ってみたら何かが見えるかも

思いきりハクシオンしてるひとり部屋

武蔵野市 亀井 円女

君が代を聞くと涙が出て来ます

初曾孫誰に似たのか芸達者

嫁は満点上手に探す五割引き

嫌いです裏のうらまで見るお方

お前はカラス人を気にせず生きているんだ

八王子市 播本 充子

ホームページ多分に演技しています

男なら殴るか蹴るか分からず屋

未確認情報に赤飯を炊く

家族写真に松坂も番長も

愛絆 心和 墓碑の様変わり

頑張れのエールはやめた千切れ雲

ダイヤより指貫似合う母の指

ダイエットやめたきつかけルノワール

楽しさとむずかしさ知る五七五

雑草の言い分もあり聞いてやる

日高市 根岸 方子

おみやげのトラ風船をいつ飛ばそう

繁栄の輪からこぼれるニート増え

ほめ上手思わずやる気刺激する

眼鏡から話が弾む三姉妹

あれやこれとろろのレシビ宝物

横浜市 小野 句多留

暗黙の了解下戸の位置がある

優勝に狂気の沙汰が許される

手荷物に二人一緒に常備薬

親離れ出来ぬ優しい子の同居

金婚を無口で祝う向かい膳

横浜市 菊地 政勝

だいそれた考え今も持っている

確約のない指切りは信じない

かたくなな心に愛が注がれる

若者と会話ビミョーにすれ違う

枕から湧いた一句は朝に消え

富山市 島 ひかる

残照へ輝きくれるのはあなた
トンネルに愛のことが匂する
何も知らず泳ぐ生簀の魚たち
少子化に無縁仏の声を聴く
泣き笑い今年も過ぎる十二月

静岡県 田 獭 杏

吾が村の土橋談合などはない
霧晴れて地球新たに生まれ出る
電話から笑いが漏れるいい話
大の字に寝て秋空の深さ知る
里帰り真綿のように眠りこけ

可児市 板 山 まみ子

弱い子のしあわせ願ひ赤い羽根
元をとるなんて無理ですバイキング
ダイエット本気にできぬ食べつぷり
仕上がりがこうも違うかプロの味
楽しみをまた見つけたす遊び好き

愛知県 早 川 盛 夫

生きて行くだけの空気も水もある
悪いのは酒で私は悪くない
ぽっかりと空気の抜けた子供部屋
どの山も思い出があり捨てられず
高そうな店一人ではよう行かん

大津市 中 宗 明

おお恐い電話メールで命取る
急病の友のリリーフ無事こなす
いもづるのように浮気の余罪でる
一寸した嘘から余罪暴かれる
腑甲斐ない夫婦喧嘩で家出する

京都市 都 倉 求 芽

肩肘を張れば卑しい影になる
発火せぬように垂らしておく涙
名案を産んだ吸殻だつてある
工場跡地にリストラ霊が出るはずだ
境内なれば是とせん ぎんなんの臭い

京都市 高 島 啓 子

鍵かけた時から家を忘れ去る
象の鼻家族自慢はほどほどに
柿を剥く左手首で舵をとる
五穀米嫌う夫は戦中派
おふくろの味と出された芋のつる

亀岡市 井 上 森 生

ゆつくりと歩いて地球と対話する
手よりも優しく強い足の裏
足の裏から健康の使者が来る
年号は忘れて御所庭ウオーキング
満潮時だけ水中に置くうまい牡蠣(新式養殖か)

長岡京市 山田 葉子

大阪市 前 たもつ

悲しみを沈めた空が夕焼ける
足跡をたどつて森に迷いこむ

打たれ強い子なんてお目にかかれない

つゆほども邪心見せない月見草

五感みなひろげ明日の風に会う

八幡市 結城 君子

男山ヤマに住み少うし天に近くなり

予定表知らぬぶりして日は流れ

おお蝉よわたしをおいて姿消す

通院もいいね男山の雲と走り合い

散策コース横目に魚の目いたわつて

大阪市 西出 楓 楽

菊活けてまだ無欲には遠くいる

野の花の好きな女で御し難し

金木犀の香りは風に載りたがる

眼鏡の度ちよつと緩目の方がいい

朝寝して昼寝する日もあつてよし

大阪市 古今堂 蕉 子

世のけがれおおい隠して雪積る

ぬるま湯につかり仲間の顔してる

浅知恵の底上げもせず生きてる

折角の若い芽摘んでる社会

エンゲルが笑いつばなしの我が家計

玉青翁の色紙掲げて訃報読む

ドラフトへ夢が叶ったひと握り

松茸の話はしないことにする

七年会昭和も一人かけ二人かけ

古稀すぎてこんな知らぬことばかり

大阪市 川原 章 久

ゆつくりとちひろの絵から虫の声

ちぐはぐに椅子が空いてる人減らし

新聞がゆつくり読めるのも平和

懐に響く家族の誕生日

これつきり読まぬと決めた週刊誌

大阪市 鶴田 遠 野

肩書きで栄転という都落ち

理想には八掛けですが嫁ぎます

泳げるか飛び込んでみる恋の海

なんぼやと値札見ながら聞いてくる

妻の旅僕に呪縛をかけていき

大阪市 川端 一 歩

僕はペン妻はパソコン意地くらべ

自衛隊母が待つてる十二月

目の曇り洗ってくれる運動会

時々は不良老人真似てやる

家族には疎んじられる寝てばかり

大阪市 奥村 五月

手の平で豆腐のように俺を切る
窓閉めてもう一度寝る朝の冷え
雄弁な男妻には逆らえず
減塩と酒も止められ生かされる
休肝日一杯だけと縄のれん

大阪市 大川 桃花

汁物が出るに緊張する晴れ着
先のこと分らないから今笑う
決心をすればすらすら言える嘘
切り出せずお茶のお代りして帰る
合唱の中に形のちがう口

大阪市 清水 絹子

一家団欒初心の老母も牌ならべ
退院日希いかなえた表門
浪速育ち世界地で行く大阪弁
塩漬けもほんのり旨み株価値
運動会孫のお陰に母と姑

大阪市 井丸 昌紀

酔うほどに人の心の裏も見え
おんなじ方に雲は流れる
芯のない男に話聞いてみる
茶柱を告げる人なく飲み干した
お茶漬が食べたくなって帰る家

大阪市 岡本 久峰

武力なき日本国よどこへ行く
日本の国がいつまで持つのやら
しょうもない輩がバツジ付けている
雑兵が赤じゅうたんを踏みつける
失政のツケを残して去るつもり

大阪市 岩崎 公誠

ちらちらと本音を混ぜた独り言
札東は万病に効く高貴薬
進化して文明病で行き倒れ
偉い人善人だとは限らない
ロボットも美人が好きと言い出した

大阪市 近藤 正

郵政で荒稼ぎした自民党
豹変も民の声だと造反者
九条が脚光あびる節目年
豊岡で巢作り励むコウノトリ
月下美人嵐の前に咲き急ぎ

大阪市 中村 叡子

矢張り秋二日続きの雨が降る
新人の女刺客が気焰吐く
昼寝して深夜テレビで愛知博
センスよい店で自然に足がむく
少々の賞味期限は気にしない

大阪市 渡部 さと美

今度くるわたし酉年永すぎる
トラ勝って派手に売りますイズミ屋も
またファイトきれいな空のある限り
列島のもみじが誘う彩と数
運動会ビデオの孫ですまされる

大阪市 本間 満津子

寒い朝お薯のお粥秋深む
松茸はないが椎茸かやく飯
卒寿全盲独居感謝が支えてる
とほとは帰る灯のない我が家暮れ果てて
月冴えて兔に昔話する

大阪市 神夏磯 典子

今日もまた生きねばならぬ顔洗う
諦めることから次の幸が来る
深入りをされず気楽な傷口よ
蹴った石素直に相手へぶつつかる
紙おむつそう簡単にはけません

大阪市 小谷 集一

真つ直ぐ歩くと壁に突きあたり
暴走も出来ず立ち止りも出来ず
自画像の自分の色が決まらない
意地張ってみても本音が出る背中
家計簿へときどき貧乏神が来る

大阪市 玉置 英子

リスの仔が犬のおっぱい吸う和み
生きてると体に故障箇所ふえる
日に二回血圧計る十一時
まだ暑いなかでとらふぐ袋競り
木犀の香り洗濯物を干す

大阪市 津村 志華子

メルヘンの森で傘寿の夢を描く
丸い月あすはいい日になる予感
山あいの大気いたたくバスの旅
遠い日の母が恋しいきな粉餅
叩かれた杭は奮気の意地を抱く

大阪市 川久保 睦子

痒いところが届きそうさあ大変
趣味ひとつ持って心の張りにする
青い空訳なくパンザイしたくなる
着メロにあなたの好きな曲を入れ
追伸に深い想いを軽く打つ

大阪市 板東 倫子

人生の達人みんな褒め上手
絆とは悲しいものネと老母笑う
金髪の間取もいる大相撲
大阪の根性そごう生き返る
介護するよりされている身のつらさ

大阪市 安達 はじめ

弾んでた毬ころびだす老いの坂
熟年の河童の皿が干涸らびる
事勿れ主義でまあるく老いていく
保護色に馴れて自分を見失う
エアコンを止めた窓辺に虫の声

大阪市 小泉 ひさ乃

目が覚めて幸せ思う朝のお茶
さっぱりと洗い流せと丸い月
衣食住足りて自由をもて余す
ライバルに投げ返す技見あたらず
この一年すったもんだで終りそう

大阪市 小糸 昭子

爆睡の息子の寝顔つくづく見
官と民そんなに官が偉いのか
お上が言う景気も一つピンと来ず
子離れがニートにしてる無関心
人の口耳からすぐに抜けていく

大阪市 町田 達子

路地の風やとこさで秋を連れ
何と言っても自然に勝るものは無い
郷里の友からメールが届く弾んでる
午睡の夢に亡母が出てくる久し振り
忘れてた用事ひよっこり思い出す

大阪市 津守 柳伸

目覚しはいらぬ至福の朝がある
天ぶらになる松たけは豪快だ
紅葉もチラホラ混浴露天風呂
山奥の料理人情山盛りに
携帯を持たぬ社長のバイタリティー

大阪市 津守 なぎさ

ウォーキング雨も風情の河童橋
腹六分自分いたわるダイエツト
上高地皮はがされたシラカンバ
紅葉はどちらでもよい露天風呂
一人旅しみじみ元気がどう

大阪市 松尾 柳右子

日々サンマ食べて殿様思い出す
おふくろの味に嫉妬の嫁がいる
久し振り顔たしかめる里法事
この味のがさが良いの胃腸には
この世には未練は無いと医者通い

大阪市 西川 更紗

ハプニングがあつて振出しに戻り
ホカ弁に事務服並ぶお昼時
政治より世間騒がすチルドレン
バーゲンに淑女忘れて鬼の相
茶柱の福を信じて一人旅

大阪市 伊藤 博 仁

大阪市 榎 本 舞 夢

鈍行に変えて備北へ秋を行く
鈍行に刈田の鷺が舞を見せ
墓参後は宿で地酒と鮎が待つ
門構え泊った宿は僕一人
行つて見た郡が市の字なつただけ

大阪市 星 野 きらり

池田市 栗 田 久 子

国のためと躍った手足縮こまり
わたくしの青春奪つた負け戦
住み馴れた家の段差に腹をたて
婆ちゃんがさいらと言ひし秋刀魚焼く
そんな事ありましたかと秋の海

大阪市 熊 代 菜 月

和泉市 中 川 楓

友の声聞えるような文字のあと
かけ継ぎをしながら越えた古希の坂
四捨五入してから荷物軽くなる
過去形にしたら優しい男になる
六十年過ぎて忘れた黒い雨

大阪市 榎 本 日 出

和泉市 横 山 捷 也

フラダンス踊つて若さ取りもどす
日日多忙その日その日に味がある
健康でたらい回しを望んでる
松茸にきのこを足して不満顔
長生きも邪魔にされたら手を合わす

ついた嘘忘れぬようにノートする
ほめ言葉並べ女のおつき合い
つまみ食いしてる間はまだ元氣
ストレスを溜めないようによく動く
心地良い言葉に酔つて騙される
年忘れ腹から笑う寄席帰り
賑わいを冷静にみる招き猫
瞑目の石仏にあう山の道
腹骨を抜かれて皿にのつた鯖
触れられて花びらこぼす冬のバラ
秋灯下 文の弱氣を読み返す
輪の中をふつと離れて自分見え
星を見てこころ洗濯しています
子の支え感謝はするが甘えない
敬老日忘れ夫の畑仕事
カラフルな錠剤老母認知症
末席に居て数合わせ手を挙げる
善人を装う男の隠し玉
したたかに生きる女のハイヒール
呆けたふりして妻の言いなりに

和泉市 西岡洛醉

柏原市 永浜加津子

年金に頼る歩幅の糧を食む
生き残るための善意を積んで幸
私利私欲明日は奈落が口を開け
夕焼け雲静かに今日の幕を閉じ
妻の愚痴凡夫の背なで止まつてる

泉野市 山本蛙城

二で割れぬ答ばかりの世が楽し
笑いで倒す俺の刺客は馴れた奴
芸術の秋だピカソの声とする
自慢話吞まれた顔で聞いてやる
泥かぶる気はありません隅に居る

大阪狭山市 矢野梓

健康を気にしなかつた若い日日
行く先で見回しているアスベスト
くじ引きで気の重い役決められる
波立てぬ暮しのために折れておく
帰る音聞くまで妻は眠られず

茨木市 藤井正雄

Bランチぶつきらぼうに付く蜜柑
自惚れて敵はいないと思つてる
頂点の椅子は謝罪の初仕事
割り勘で義理残したくない女
整形で化けてるのよと陰の声

居心地のよさに甘えて輪に入る
食べるから太るのやとはつらい事
だからと物思いして夜が明ける
手に余る長い菜箸放り出す
想い出はモノクロになる出生地

交野市 森本弘風

後頭部亡父に似てきたDNA
お隣の訃報ピーポー三日前
妻の留守やっぱり俺は先に逝こ
朝三時津軽の地底行く列車
巨人ファン近頃猫もトラに見え

交野市 山川日出子

手が痺れさびしがつてる古ピアノ
ユーモアなスピーチ空気ピンク色
義経と去る枚方の菊人形
僧に聞き先祖の謎がやつと解け
みのもんだ朝昼晩と七変化

交野市 田岡九好

カウンタダウン始まりそんな古希が来る
嘘のよに長寿祝が届けられ
目出度いな阪神も古希ほくも古希
治癒力がないからこけぬよう生きる
隠岐の風詰めて帰った旅靴

河内長野市 坂上淳司

古希なんて公民館じゃ青二才

前立か進むようには出ない

簡単なオベだと医者には宣うが

鼻歌で第九とハモる年の暮れ

書字能力どんどん奪う電子辞書

河内長野市 井上喜醉

凡人で嘘の言えないお人好し

渋滞を無視して渡る奈良の鹿

無器用で見えぬ他人の表裏

先客をこっそり覗く縄のれん

へそくりを使う楽しさ久し振り

河内長野市 山岡富美子

秋日和受賞の栄にベンが酔う

マネーゲームに縁なき暮し秋刀魚焼く

CMの美女が微笑む目眩まし

坂道のロマンに触れる白昼夢

一歩ずつ女の坂はマイペース

河内長野市 水谷正子

はやり風邪最初にもらう愛想よし

一人暮し市長心配してくれる

間違いを咎めたてずに冬に入る

思い切り派手にやり度い忘年会

来年はお手やわらかに地震殿

河内長野市 植村喜代

六十年青春のまま帰らぬ友

両隣 車中黙ってメール打つ

秋はおいしい焼立て魚買つて見る

またお風呂上がれなくなり救急車

困った時頼れる人が遠過ぎる

河内長野市 村上直樹

貯金ゼロ借金もゼロ敵もゼロ

大根を擂つて誤解を解きほぐす

誓つてもどうせ飲むわとお見通し

茶柱の立つ日ひねもすい予感

逆風にたとえば竹のしなやかさ

岸和田市 原 さよ子

ささやかな夢耕して老夫婦

いたわりの言葉に歳を意識する

四捨五入のリズムで余生生きている

コスモスがゆれてやさしい風に会う

手作りの鞆で出かける母達者

岸和田市 井伊東吉

晩秋に鳴く虫の声細りゆく

文化祭予算が先に削られる

打算秘め村上ファン্ড隙をつく

難産の郵政法案日の目見る

日本海制圧したるクラゲ群

岸和田市 森 元 ふみよ

読みづらい絵文字連ねてメール来る

難病を持っていての子の涼しい目

さりげなく丸付けて置く記念日を

妹が皆なの器量ひとりじめ

ダンス熱昂じて免許取るはめに

岸和田市 林 力子

水害の遺児が見ている泥の海

持ち主の匂いでわかる介助犬

若葉マークに乗せてもらって落付かず

リストラの風が惨めにする家族

戦いの蟻の群行く朝の駅

岸和田市 土 橋 房 枝

落葉踏むサクサクサクとウォーキング

赤トンボ故郷の友思い出す

墓の花誰がかえたか気に掛かる

空しくて寝た振りをする倦怠期

子のメールいつも短いイエスノー

岸和田市 岩 佐 ダン吉

ミスを咎めそして私も裁かれる

着きました母が送ってきた五文字

長所問われあははうふふと言うている

会則に酒を飲むなど書いてある

わいわいと言うが正論譲らない

岸和田市 雪 本 珠子

運命の女神笑顔がお気に入りに

客が来て夫婦喧嘩も一休み

ジャズ聴いて疲れた脳を活性化

酔った振り照れずに言える好きやねん

古い二人拾った猫に癒される

堺市 神 原 文

秋の薔薇月光に映え白く咲き

赤ワイン透かして秋が迫り来る

風は秋、心に春の花が咲く

カンナ咲く阪神の旗振りながら

太り出す鯖は焼津で差しの酒

堺市 矢 倉 五 月

たいがいの所この頃はスニーカー

大勢に影響ないとすぐ忘れ

鈍感を装い打たれ強くなる

結論は堂々めぐりうめ焼酎

おやすみのキスはママパパババまで

堺市 和 田 つづや

饒舌な嘘より赤い曼珠沙華

紫がすき桔梗すき秋がすき

人生の角ごとためらい疵あまた

熟年の恋はむなしさ同居する

弱味なく生きたらこの世つまらない

堺市 柿花和夫

知らぬ間に連立した妻と母
古酒提げて友がこだわり解きに来た
腹の立つ記事を広げて爪を切る
人並に過ぎた恋など想う秋
僕だけの空想恋の後日談

堺市 村上玄也

水害で大国恥部をさらけ出し
温暖化年々夏を長くする
転んだら他人の顔をする夫
ご意見は聞くが聞き入れてはくれず
喉元を過ぎれば脇が甘くなり

堺市 石堂潤子

十月の朝顔健気なる小ぶり
聴きづらい耳が大きな声を出す
蒔いた種自分で刈っている懺悔
親不孝拭う術なし墓洗う
自尊心だけが残った消去法

堺市 西村りつえ

欲しい物何もないとはきつと嘘
少量で酔いが早まる古希の坂
アバウトと几帳面とで仲が良い
アカサタナ拡大鏡が手離せず
押し込まれ後遺症出た冷蔵庫

堺市 齋藤 さくら

かけっこのビリも涙は持っている
鈍行が似合う二人に星きれい
にっこりと夫の手綱引いている
満更でないけど自慢したくない
優勝のバーゲン期待ふくらまず

堺市 加島 由一

クリスマス人恋しくて電話する
牛肉より鯨アサリはやめシジミ
人形で性教育をしています
無言電話は声を聞かれるのが嫌い
紅白を全部見るには根気いる

堺市 近藤 豊子

離陸してはるかにZえがく機首
Zからはじまる歌もあるだろう
少年のえがく間取りに犬小屋も
かみなりへ祖母と籠った蚊帳の中
台風接近夫婦喧嘩もそこそこに

堺市 源田 八千代

道沿いに垂れる小萩の枝活ける
神として蛇も狐も崇められ
ダイエーが栄えてた頃子を育て
新装のそごう王妃の小便器
民営化しても意識は元のまま

四條畷市 吉岡 修

こころよく相手の立場にも拍手

鶴を折るぐらいが僕のできること

福耳と見せてどっこい地獄耳

大國が丸い地球に穴あける

闇討ちをかけても勝てぬかも知れぬ

吹田市 山本 希久子

九十七年牛歩続けて生きる母

夕焼け小焼け平常心をとり戻す

天高く胃袋だけはまだ若い

拍手浴びてブーム静かに去ってゆく

不慮な視線に傷ついてばかり

吹田市 瀬戸 まさよ

裏切ったことない自負を振り返る

医者 of せい葬儀のあとで慰める

書評らん読んで読書をしたつもり

子は自在おとなしんごいデジタル化

秋日和家にいるのは勿体ない

吹田市 大谷 篤子

喉かわく時悪友を思い出す

生きるため森がほしいと魚達

日本画の目刺し肴にワイン飲む

浮かぬ日はお喋り好きに電話する

賑やかな笑いの中の孤独感

吹田市 穴吹 尚士

遺言を半ば本気で考える

へそくりは天知る地知る妻が知る

人間にならないうちに母になり

法螺吹いた後の始末を思案する

これまでの苦労しのばすお人柄

吹田市 太田 昭

ペディキュアが地球を齧りながらゆく

役立たぬ資格生き甲斐にもならず

俺よりも国がお先に惚けてゆく

来年の話に鬼は笑えない

秋の蠅一匹をつい打ち逃がす

吹田市 野下 之男

マスコミにうまく乗せたら大勝利

三面は見たくないけど先に見る

単身につばさが欲しい金曜日

湯豆腐に熱爛猫が虎になり

角の猫食べる時だけ家の猫

吹田市 須磨 活恵

ありがとう働き者の洗濯機

簡単な漢字咄嗟に出て来ない

古財布 暮しの垢がこびりつき

ほんの少し歳より派手な服を選ぶ

不器用な私を笑う影法師

吹田市 早川 棲世

高槻市 傍島 克治

大丈夫かいな紳助に似た執刀医

募金隊去り駅前風景もどる

東京裁判その二の米ソ編をやれ

木炭バスあったな今の俺に似た

地下鉄の上は夕焼け蠱惑色

吹田市 木下 敏子

我が家にも改革を見る女の座

改革に夫の入れてくれたお茶

七十を過ぎて嬉し赤いバラ

正直なカメラに歳は隠せない

温暖化防止 今夜は早く寝る

吹田市 岩屋 美明

欲しいものばかりで仰ぐ暮れの空

頰杖をついても様になるおしゃれ

実りある余生の土を掘り返す

もう一度透かして捨てるポチ袋

料理教室ゆけばと妻が手きびしい

高石市 浅野 房子

ボーカールフェイス時時生の顔が出る

喧嘩売る敵にうしろは見せられぬ

ストレスの捌け口のない下戸である

うつぶんはためてどきっとお返しを

リベンジはきつとするあの一言に

百均の時計正しく時刻む

旅行先決め手となった美人の湯

大阪のおばはんらしくなる娘

退屈は一日無事の証です

摂生しろと言ったドクター先に逝く

高槻市 瀧本 きよし

指出してやれば止まるか赤とんぼ

ゴミの山ほどに葉の飲み忘れ

聴診器胸に当てずに脳に当て

無農薬表示の野菜ばかり買う

調子よく指切りげんまんしてしまふ

高槻市 西谷 治三郎

社長さんお辞儀上手にできました

若づくりしても席をゆずられる

愛してる言うたことなく五十年

粗供養にカタログ貰いシヨッピンゲ

休肝日珍客あつてまた延期

高槻市 左右田 泰雄

山彦のエコーがハモる夕茜

手料理をほめたら今日も同じもの

デラックスムードで囲むフルコース

ジんクスをたたきのめした逆転打

仏壇を点して庭の花飾る

高槻市 井上照子

努力より運を待つてるニート族

妥協した言葉の裏にあった棘

憧れた都会の色が子を変え

稚児の列化粧で吾が子みつからず

来る年の健康祈り食べるそば

高槻市 乙倉武史

夢と希望もてる改革頼んます

資産価値もてはやされるタイガース

万策は尽きて神様仏様

リハーサルない人生だ慎重に

贅肉と苦戦しているダイエツト

高槻市 生田義一

秋の風涼し湯の宿一夜旅

岡田さん笑顔くしゃくしゃ宙に舞う

くつきりと夏の名残りのシャツのあと

根性の差が歴然と六連覇

カラオケで軍歌唄えば皆そっぽ

高槻市 江原秀夫

真面目人間返上します八十路坂

反省はいつでも出来る秋の風

何げない笑顔に愛の花筏

爪を切る幸せの音菊日和

つつがなく朝餉すつきり卵割る

高槻市 執行稲子

ひどい言葉も何々大笑して素直

黒煮豆釘に命の色貰う

ベットにも避妊手術をそれも愛

フルムーン愛の深さを試される

あじさいの宿で拾って褪せた恋

高槻市 富田美義

寿命まで暮せる日本ありがたい

断崖でひとり海見て怪しまれ

延命はしないと誓い酒タバコ

手料理へ菜園の味そつと乗せ

ひと言が過ぎて心の破裂音

豊中市 安藤寿美子

曾孫まだ見せぬと孫に小言いう

それぞれにひいきチームがある家族

恋の句が作れなくなり欠伸する

お彼岸の不思議さつちり彼岸花

もう一度月を仰いで寝るとせん

豊中市 吉田あずき

観覧車七〇〇円の街の空

結論の出ぬまま重い靴を履く

男の言い訳はば見当はついてる

老後設計 政府が水をさしに来る

横書きのハガキ世代の違い知る

豊中市 水野 黒 兔

待ちぼうけ自分の影を日時計に

コンビニを伝えは家にたどり着く

ピーピーと電子レンジのおせっかい

ハローワーク職員だけは超多忙

神様の手相を見たら戦好き

豊中市 岸 田 知香子

動かない体はがゆい秋日和

秋夜長早寝極楽身を守る

誕生日 芋掘り会食うさ晴し

医者通いまた会いました同じ顔

何もかも近くで済ますパス要らず

豊中市 江 見 見 清

歩けるし食べて話して笑えるし

贅沢と思う一年おきのV

交替でお出掛けをして平和です

離れては歩いてるけど夫です

覚悟するしかない手術承諾書

豊中市 山 門 タ ミ

月替りカレンダーにも秋の彩

新米に銀めし偲ぶ戦時中

ふと思えば秋の七草かぞえてる

名月も地球の修羅場嘆くだら

孫からの敬老の花いとおしい

豊中市 榎 谷 郁 子

豊作に秋の先達彼岸花

我が郷も木の葉を染めて秋運ぶ

秋夜長癒しの刻か月冴えて

独り居はテレビ相手に高笑い

運動会ついてゆけないババ走る

豊中市 藤 井 則 彦

銀行はいつも特別警戒中

どなたとも同じ目線のお付き合

定年になってありつく午後三時

河原から妻と走った俄か雨

招待で行くとまどろむコンサート

富田林市 池 森 子

曲つてる胡瓜と無農薬のはなし

ふり向けば薄い情けに流される

満月を好きになれない四面楚歌

大いなるのぞみ詩囊を膨らます

例えばの話に棘が刺してある

富田林市 藤 田 泰 子

領いただけで私も共犯者

もう大人黙って見てる他はなし

認知症ですのと仮病使ってる

笑い声 青テントにも貧富の差

口直し みかんもリングゴも甘すぎる

富田林市 稲川 惠 勇

茶の友のはずが本気になってきた
ほめられた手相本気にしてしま
学問を極めたはずが青テント
まつたけはおいしくないと子に教え
エアポケットです観覧車のデート

富田林市 中崎 深 雪

気がつけば携帯なしは私だけ
着信音ところかまわず鳴る不快
携帯栄え心減びていく気配
一枚の軽い葉書の温かさ
携帯がなくても特に困らない

富田林市 片岡 智恵子

百までも生きるゲンマンして別れ
犬の義理しつぽちよつぱり振って見せ
懐かしいくせ字ワープロから見えず
失敗ほど役にたつもの無いと知る
日が暮れて帰りたくなる家がある

富田林市 大橋 鐘 造

迷ってる私を包む広い胸
不器用な指であなたを掴めない
ポケットの小銭で神と手をつなぐ
お流れを貰い面倒引き受ける
まなうらに消えない鬼が棲んでいる

阪南市 森村 美 花

楽しんで生きた母だと言つてほし
背筋のびヒールも軽い七十歳
亡き母の着物が生まれ変わった日
恐る恐る未知へ飛ぼうとしての僕
ふっくらの新米嬉しまだ元氣

寝屋川市 坂上 高 栄

娘の家へ一週間の避暑とやら
竜宮の暮しに飽いた里心
同級生訃報一人にさせないで
難聴に話の輪から遠ざかる
温暖化サソリや鰐やにしき蛇

寝屋川市 富山 ルイ子

辛辣な意見わたしのためだろう
まっすぐに生きた褒美をもらう日日
胃カメラへしぶしぶウンと言わされる
恩愛を思い何時しか涙ぐむ
平凡は奇跡死ぬまで平凡に

寝屋川市 太田 とし子

阿呆にもモラルがあつてなり切れず
大阪の阿呆はとつても爽やかだ
阿呆みたい夫が急に甘え出し
阿呆だからあんと一緒に居るのです
あんだ馬鹿わては阿呆の西東

寝屋川市 森

茜

古文書を開くと冬の匂いする

お守り役引き受け昔ばなしする

お愛想の笑い青い目不審そう

黒ずんだ青空うつす窓を拭き

木洩れ日を楽しむ冬がくる前に

寝屋川市

江口

度

ぶつかった壁にヒントが落ちていた

折鶴を吊ると祈ってみたくなる

もう造るものないと何時かは言うだろう

くもの巢のトンボ子供に助けられ

立読みの本に葉をはさんでる

羽曳野市

吉川

寿美

四コマの漫画演じて今日も暮れ

笑う日も泣く日も女米を研ぐ

娘は叱れぬ昔わたしもそうだった

折り目節目に母が遺した備忘録

母方似のお人好しです丸い鼻

羽曳野市

酒井

一壺

生活になぜが消えたら味気無い

文明が進み悪人なぜ増える

てのひらを返した心解からない

疑問符の中で人間鍛えられ

癖もなく趣味もない人そっけない

羽曳野市 三好 専平

変節は計算済みの造反派

風さえも人の奢りに牙を剥き

マニフェスト勸進帳を真似ました

戦争に負けて保険もパーになり

原爆を持った刺客がごねてみせ

羽曳野市

安芸田

泰子

こだわりを捨てると増えて来る味方

善人の嘘には尻尾見えている

割り切ったはず決断でまた迷う

子離れの膝を小犬が温める

胸がきゅんもしかして恋かも知れん

羽曳野市

徳山

みつこ

金バッジつけている間の靖国よ

角切りへ夫も頭を撫でている

発泡酒に格下げ夫の力水

足腰の弱い電話が武器となる(義姉入院 2句)

わがままが出てよくなつていくベッド

東大阪市

笠井

欣子

サンドイッチとお握り置いて妻出かけ

男性にスーパールの寿司よく売れる

遮断機が降りてる間足休め

肚割って話せる友を焼く煙

手話の人奇麗な指が弾んでる

東大阪市 北村賢子

神の手にのぞみをつなくオペルム
玉音がせめても十日早ければ
別れ際笑顔をつくる老母だった
美しすぎる月へ涙が湧いてくる
増え続ける人口地球重たかる

東大阪市 西村哲夫

予報士はいらぬ梅雨明け蟬の声
稲光強がるその手電気消し
蝸の声に答えて秋の風
トンボ舞いカメラ目線は彼岸花
腹芸は子蛙達に内緒です

東大阪市 安永春

子沢山金の成る木に鍛え上げ
荒海越えてやつと悟った父母の愛
役割を決めてまあるく住む親子
同病の仲間と癒しひびき合い
小刀でエンピツ削る心地よさ

東大阪市 中岡妙

ごめんには時効が無いと言つてやる
肩の凝る話だ回り道しよう
ご先祖のお顔を想う墓洗う
衝立で仕切る飲み屋の陰と陽
度胸ある人だ独りになるといふ

枚方市 安達忠央

走る世においてけほりをくいそうだ
こけるのがこわくて走り続けてる
遺伝子に感謝もしたし恨みたし
スピーチが済んで料理にありついた
天井までコルクが飛んだ誕生日

枚方市 荘司弘之

秋風に風鈴もまた秋の音
紅葉はほんに静かにやってくる
ひとりではあまり目立たぬ尾花たち
藍ちゃんがおへその顔でいいショット
万博に行つた並んだそれだけだ

枚方市 寺川弘一

オートクチュール夫しぶついで来る
秋刀魚焼くお前が俺の原点さ
人間が浅いとチンケな顔になる
さやさやとベット愛している余生
俺だつて昇天すれば神さまさ

枚方市 二宮山久

木漏れ日の昼の縁側里の秋
ストレスを持たぬ私も六十路
妻の留守こっそり手料理を始め
タイガース荷物忘れの日本一
幸せは淋しさわすれの趣味多忙

枚方市 丹後屋 肇

孤独感ダムの湖底に我が生家

孫の弾くアンサンブルと響き合う

ロボットに人命救助のゼミナール

ギャルミコシ シヤッター街に火を放つ

コンクール チアガールの空中戦

枚方市 森 本 節 子

虎の尾とセイジの青のコントラスト

ビール煮の残ったビールぐいと飲み

菊師不足今年かぎりの菊人形

しとみ戸の西日に輝く阿弥陀三尊

実生の木花のつくまでおれるかな

枚方市 宮 川 珠 笑

病室の夫婦奥さんみな天使

押し売りに強情ぶりをほめられる

とびついてほほずりしたい檻の中

予定表通院日から埋めていく

わんぱくに国旗出すわけたずねられ

藤井寺市 鈴 木 いさお

五七五に喜びがあり涙あり

納豆も我慢する内好きになり

英会話習ってみるかまだ米寿

今どきは先につくって後で式

まだ少し若い血残っていた米寿

藤井寺市 楠 昭 子

無茶も言うこれも若さの証拠です

父と母栄えたままにいる写真

しなやかな言葉で急所痛かった

この辺で流れ変えねば垢溜まる

許せない時の心がやせている

藤井寺市 鴨 谷 瑠 美 子

やすらぎを感じるひとと腕を組み

弟も還暦貫禄ついてくる

ぎんなんに酔うてのんびり御堂筋

果実酒で頬染めている他愛なさ

酌ぎに来て何を言わんと薄笑い

藤井寺市 中 島 志 洋

下手でよい真心こめて書く賀状

寺の子も欲しいサンタの贈り物

久し振り会えばお酒になる二人

今の幸十指に余る人の思

それなりに帳尻合わす大晦日

藤井寺市 太 田 扶 美 代

妻であるメンツ松茸買ってくる

花の余生へ割り込んできた介護

友情を量りにかけた事がある

お線香ポキリとイヤな音がする

私もペンも時々へまをやる

一工夫した弁当で仲直り

藤井寺市 若松雅枝

八尾市 生嶋ますみ

見解の相違視線を変えてみる

抱いている野心は見せぬ生き上手

古紙幣古い財布に残つてた

父に似た咳払いして子が帰る

箕面市 出口セツ子

八尾市 宮崎シマ子

親をやめ同じ視点で子と話す

心渴く日には子供に甘えてる

生きてゆくパワー不足の子が不安

終電が続き健康気になる子

おべんちゃんも嘘も言えない子の頑固

守口市 井上桂作

いつまでも夢をもてたら幸いね

座ったまま昼寝するのもまた楽し

七十年ふりかえみれば懐かしや

西の空台風去つて夕焼けに

物干しへ夕焼けたのしまた上がる

八尾市 高杉千歩

要支援ひとり暮しを守られる

認定へ素直になつていく私

時間まで記し記憶を辿るメモ

仕残しも養生訓に入れてある

ルビつけて下さいむつかしい名刺

お赤飯おめでた事のお裾分け

障子貼るときに独りを思い知る

女ひとりシシヤモを頭からかじる

木犀の香りも秋の雨も好き

無理するなすなど用事言いつける

八尾市 宮崎シマ子

咲いたと言えば雑踏になる萩の寺

虹を追つかけるちりぢりのシヤボン玉

すとなとはいかぬ絆がひつかかる

人を恋う波は百里の旅をして

長いものに巻かれているが骨はある

八尾市 宮西弥生

クレヨンの秋いっぱいも温暖化

七曲り八曲り出会うよい仲間

雑役のこぶしに光っている無心

何もかも許せる秋とひとりいる

一本の電話であした結ばれる

八尾市 長谷川春蘭

ふと開けし亡父の手帳赤い羽根

まだ青きみかんに触るる古里よ

虫に耳とられ思索の行き詰り

駅コスモス人の訣れを見るばかり

亡き人の想えばしばし鳴くちちる

八尾市 吉村 一風

人情に借りいっばいの余生なり
素晴らしい嘘の励まし身にしてみる
まだ十指しつかり動く幸せも
生きてるだけで幸せ忘れなや
また石に蹴つまずいてて叱られる

八尾市 山本 宏至

止めるとは言わず減らすという誓い
妻の留守心静かに飲んでいる
クラス会嘘と見栄との火花散る
波風を立てる若さがまだぬけぬ
おしゃべりで腹に何にもためてない

大阪府 野田 栄呼

最低と最高今日を振り返る
同年の計報に気持ひきしまる
刈取り後あぜに燃えてる彼岸花
運動で減らした脂肪襲う食
懐にしまい置きたい木犀香

大阪府 桑田 ゆきの

枯蠅 臨終の眼が天睨む
両の手に木の実拾えば陽の匂い
夕焼けに無事を祈って恙の日
保護してつもり古墳にバクテリア
ほろ酔いに任せ本心さらけ出す

大阪府 米澤 俣子

解け合えばなんと小さなわだかまり
潮時を待つて女は涙する
空元氣裏でこつそり吐く弱音
捨てかけたセーターしまうウォームピズ
ひと言が妙薬になり刃物にも

大阪府 初山 隆盛

忘年会やめて第九を聴きにゆく
マフラーが定番知つてるウォームピズ
すくすくと伸びておくれよ桐の苗
おーい風の子いたずら坊主降りてこい
バクダンを呷りマルクス語つた日

大阪府 澤田 和重

アスベストもあんたもボロを出してきた
運のいい手相もつてる苦勞人
老いの愚痴だれにともなく出てしまふ
疲れたなお喋り好きな人といて
外は雪鍋がぐつぐつ音たてる

神戸市 木村 貴代子

栄転も左遷も子には大差なく
神様の死角に子らの涙あり
草引きをせぬまま枯れて庭広く
十歳も若く見られてお赤飯
上弦の月が希望を持つてと言う

神戸市 山口 美穂

パートナーは頼りにならない犬と住む

冬のソナタにおばさんの胸キュンとなる

一日を無事締め括り歯を磨く

明日の目覚めを信じておやすみ言っている

手抜きだった事故は謝罪ですまされぬ

神戸市 伊勢田 毅

テレビ欄見て一日の計を樹て

遺言は書いたかと妻念を押す

他人めく言い方をする子が怖い

古希過ぎのドライブ好きを妻懸念

金と暇少し出来たが愛がない

相生市 中塚 礎石

手の平を反り返し見る生命線

これからの道勾配がきつくなる

黒髪に染めても目立つ顔の皺

ニュータウン今は老人村になり

焼酎の湯割りの加減ときに変え

芦屋市 黒田 能子

言う前に腹式呼吸ひとつする

今買えば損はしないとだまされる

遺言を書いててももめている遺産

玉子焼き平和な皿にのっている

紙袋同じ他人とすれ違う

尼崎市 長浜 美籠

どんと来い男気みせる眉あたり

それとなく探りを入れるマロンパイ

自信つくまでは流れに添っている

生きていく起伏は神の思し召し

薬より傷口にしむ思いやり

尼崎市 田辺 鹿太

嫁に出すように一輪お隣へ

毎日が王手のような暮し向き

一歩目で足の機嫌を確かめる

近代化心ブラはもう止めにする

相談というから寄れば飲む話

尼崎市 松下 比ろ志

秋ですね松茸秋刀魚ハリケーン

ふる里の祭りを想う赤トンボ

ご先祖が来たか仏間の隙間風

夏だ秋だと否応なしに日が過ぎる

悩むから恋は輝き増してゆく

尼崎市 春城 武庫坊

御輿に乗って神はふるさと伸し歩く

稲の穂は天を仰いで頭垂れ

虫鳴かぬ秋の気配に満ち足りぬ

落ち葉踏む空は奇麗に高く晴れ

修羅の場をくぐっただけに出来た人

尼崎市 春城 年代

竜胆はいちばん持ちがよろしおす
かつらむき出来っこないとあきらめる
体力のついて来ぬのがもどかしい
優勝のセールテレビで見て済ます
認知症の人の屈託ない笑顔

尼崎市 林 昭三

一人や二人何処の町にも情報屋
とび乗ったそのまま発車専用車
盆踊り祖母が褒めてる孫の所作
病院に行く途中とか元氣そう
味なこと言う人が居て苦勞人

尼崎市 軸丸 勝巳

八十年不眠不休の腸検査
腹黒いところはないと内視鏡
引力が道頓堀にある悩み
勝負事予想通りは物足らぬ
親孝行村の祭りに子が帰る

伊丹市 山崎 君子

愛知博い夢でしたフィナーレ
曾孫の話こぼれる長電話
コスモス迷路子連れ孫連れ赤トンボ
今日寒露ネクタイずらりショーウインドー
敬老会手相どおりに生きるかも

川西市 西内 朋月

誕生日にはコンビニのお赤飯
幸せな顔して御節食べている
酎ハイはいいが弁当遠慮する
長男に生れて親を看取られず
追っかけの熟女が走るタカラヅカ

川西市 米原 雪子

失敗を話上手が盛り上げる
カーナビを頼りに延びる小旅行
闊歩する破れジーンズ長い足
子のジョーク一拍おいて笑う母
金儲けうまくて世間騒がせる

三田市 北野 哲男

三角と俵にぎりの姑と嫁
そういえば遊んで年金貰っている
脳みそへ爆笑という換気扇
クラス会もう玉手箱あけた顔
電車さえ遅れるバスは仕方ない

三田市 久保田 千代

流派などいらぬ自然の四季を活け
コラム欄わたしと同じこと憂え
偏屈な鬼がかごめの輪を乱し
朝のお茶今日一日のネジを巻く
順序良くお迎え来ればいいものを

西宮市 西口 いわゑ

日記帳に今日のいのちを記録する
やさしさが山を動かすこともある

よろこびを残し満月欠けてゆく

お月様夢の続きはまたあした

今日も生きて空の青さと語り合う

西宮市 門谷 たず子

足早に秋は過ぎゆく衣替え

ハードルを下げてわが歳思いみる

三回忌遺影と話すことも馴れ

ご主人を亡くした松が枯れはじめ

茶碗蒸し春には嫁にゆく孫と

西宮市 牧 潤 富喜子

ソーランソーランカメラへ孫の大人びる

プロセスを見せずに咲かす曼珠沙華

ずんぐりのわたしがうつるガラス拭く

嵐去る積乱雲も夕焼ける

出直しに完敗もよし雨上がる

西宮市 亀 岡 哲 子

曼珠沙華咲くを見届け月沈む

縦割りの夕陽を拝むビルの街

地震以後棚には置かぬ壺がある

嫁もいて秋茄子料理アラカルト

正月まで咲くコスモスまだ元氣

西宮市 坪井 孝一

失敗は役立つものと決めている

優しさも傷つけるのもコトばかり

いつの世も根性とやる気求められ

惚けまいとメールで地酒探してる

ババシャツが今年は売れるウォームピズ

西宮市 山本 義子

雨降れば流れるほどの金は持つ

とは申せスタイリストに憧れる

さいころの転がる先に居るわたし

満身創痍だれも気づいてないらしい

雨宿り不届きなことふとよざり

西宮市 井上 松煙

輸入でもやはり松茸秋の顔

風呂の窓あけ虫の音に秋を愛で

黄昏れて里のお墓に詫びている

待合室コンバクト見るおばあちゃん

テレビの旅世界のグルメ目で食べる

西宮市 緒 方 美津子

閑空に降りた途端にケチとなり

退院にネクタイ持ってこいという

父さんの作る料理は酒が要る

姫路城借景にしてそば吸る

再任にほくそ笑んでる原ファン

西宮市 菊池 トミエ

コウノトリ夢を背負って大空へ
時きざむ命を刻む音たてて
老いてなお夢大切に行く旅路
あれこれと思ひ出させる秋の月
細腕と言うが意外な逞しさ

姫路市 古川 奮 水

鯖寿しの味くらべして秋祭り
タイガースグッズが増えて秋祭り
ジューパンの魔女が橋立股のぞき
足袋を履く冠婚葬祭汗が出る
分別のゴミ収集も知恵が要る

兵庫県 大谷 幸次郎

仕舞い風呂今日が昨日になってゆく
令状という紙片に畏まる
お札という紙で懐温まる
百万本のコスモス揺れて秋深し
金釘流の宛名嬉しい宅急便

奈良市 米田 恭 昌

鬼瓦家紋の重味知り尽くす
欲深い願いにアツと流れ星
仲裁の大阪弁に刃向かえず
夕ざれて秋の訪れきく散歩
藤川が泣き岡田が舞った甲子園

奈良市 天正 千梢

白馬寺へ嬰兒を捨てにしのび足(中国)
深いえにしか白馬寺で育てられ
乳代をお願いします募金箱
白馬寺へ子どもを捨てた母も老い
土の香をはらうに美しい寺帰り

生駒市 飛 永 ぶりこ

乗鞍の風雨に震え視界ゼロ
擦れ違う笑みがこぼれるウォーキング
好物を作り置きして友と旅
一斉に叫ぶ紅葉パラダイス
朝一番犬と一緒に秋を踏む

香芝市 大内 朝子

年一度塔のまつりへ寄る笑顔
表情の豊かそのまま皺になる
わだかまり解けた心が空になる
若くいる賞味期限のない心
ぼつくりを望みびんしゃこ生きている

橿原市 安土 理恵

群れてさえいればと思うひつじ雲
雑巾しぼる不意に夫の首根っこ
狂う魂 神も想定外という
深呼吸そして気持を入れ替える
ちよつと失礼今から脱皮いたします

大和郡山市 坊農柳弘

面目を支える男にあるドラマ

ナナカマド朱の一滴に火照る恋

喜寿傘寿ポーカークフェースの余命表

雑踏の中で白旗振っている

香焚いて待つ人が居る秋夜長

和歌山市 牛尾緑良

万華鏡今日は笑顔を取り戻す

途中下車ベッドを予約しています

柿たわわ昔仲間と居た里に

クジ運を使い果たした頃ジャンボ

反骨も少し丸味を帯びて秋

和歌山市 桜井千秀

行く道の険しさ予てより覚悟

つゆくさのため息吐息秋夜長

あちこちのページに回路つけてある

興味津々あっちこちと掘り返す

八方美人奇麗な方じゃないらしい

和歌山市 玉置当代

秋祭り なれ寿司恋し母恋し

反対の意見も聞いてこそ平和

夾竹桃六十年が甦る

大勢の人と出会った小商い

渡米する娘と暫くをグルメ旅

和歌山市 福本英子

テールライト母はだんだん小さくなる

年金の差が控え目な趣味の花

どっこいしょ歳ばれましたルイヴィトン

悪友と喧嘩するのもケータイで

憚らぬ啞え煙草もお化粧も

和歌山市 木本朱夏

裏方に徹して米を研いでいる

黄昏れて飾りボタンが似合わない

ラムネ瓶の喉のあたりにある残暑

虫の音に包囲されてる無人駅

作り終えた顔が他人のふりをする

和歌山市 喜田准一

分別を致しかねます妻の愚痴

笑ってはいるが鋭い眼の動き

片付けてゆつくり出来る男部屋

胃の壁を削る上司の怒鳴り声

首筋が凍る笑顔の肩叩き

和歌山市 武本碧

翅合わせ祈るかたちの糸蜻蛉

しがらみを捨てて蛍は身を焦がす

星降って風は詩人の顔になる

古さでは負けぬ案山子の一本気

それぞれのカラーで生きる核家族

和歌山市 楠 見 章 子

和歌山市 細 川 稚 代

辛子を効かすすんなり老いてなるものか
秋空をいっ気に飲んだ缶ビール

でかい靴みると元気が湧いてくる

懸賞へ歳のサバ読むアンケート

家の周りを三回ちよつと口げんか

和歌山市 松 原 寿 子

指切りのその後止まっている時計

今にして言葉の重み噛みしめる

時効にはならぬ絆へ朱を足そう

飾りポケット浅くて夢がこぼれそう

充電はもう叶わないああ枯れ葉

和歌山市 堀 畑 靖 子

悲しみに潰されそうで庭に出る

真似ごとだけれど漁師をしています

田舎での暮らし野性がまた戻る

庭園美たんのう足立美術館

離婚しています勇氣があつたなら

和歌山市 上 地 登美代

人生にまさかと呼ぶ良い知らせ

倅せをしつかり抱いている両手

大切な時にエラーが貌を出す

澄んだ瞳と内緒話はできません

イエスマン揃え日本どう変わる

振り向いて下さる日までまつ地藏
人こばむ山はすっぽり雪化粧

音信のとだえた友よ雨しきり

評論家ばかり多くてすすめない
思い出のつまる帽子をすてかねる

和歌山市 松 尾 和 香

まだ若い女翔んでるひとり旅

百歳の命育む五七五

肩を組み青い山脈歌う古稀

九条を守る命の力瘤

身の丈の望みに生きる家族の輪

和歌山市 宮 本 三喜夫

激戦区しこり残してけりがつく

夢破れ政界あとに職探し

議員さん登院気分如何です

決意述べる小泉さんに期待する

アパートも北と南で競い合う

和歌山市 山 口 三千子

古希すぎて心の籠も緩みだす

日進月歩次の世代が追ってくる

嫌な事続いて松の木も枯れる

ねじ巻けば賑やかなるオモチヤ箱

無言電話暇なお方も居て御座る

和歌山市 田中みね

でこばこ道もあつて人生長丁場

土産話を満載にして旅果てる

国産の松茸ですと換気扇

人様のこと言つた矢先の誤字脱字

監督が誰になろうがああ巨人

海口市 谷口義男

お互いに潮時探る長電話

老いの坂気ばかり焦る空元氣

我が過去と息子の歳を比較する

実践の養生訓で傘寿坂

病院で待つ忍耐を強いられる

海口市 堂上泰女

北風が私を強く練り上げる

遣伝子は母似息子も譲らない

魂を攫うか白い曼珠沙華

調子良い言葉で読まれてる財布

あらオシヤレ上手いジョークで切ってくる

鳥取市 富山 檳榔樹

せせらぎが悩み捨てよと語つてる

力一杯世渡り励むやせ蛙

月餅を芋名月に賞味する

いも粥で耐えた戦時が懐かしい

目出度いな目出度いなあと喜寿迎え

鳥取市 徳田ひろこ

告白をされても君は姫リング

返信に私も絵文字打つ若さ

表札の栄えるお陽さまが当る

もう少し希望だかせて母を見る

繁栄を支えた女たちの腕

鳥取市 武田帆雀

快調な五体は神の思し召し

スイングをするとき臍が美しい

お隣の柿の葉を掃く朝の月

案山子かと思えば歩き出す爺や

ご馳走さんでしたと僕は帰れない

鳥取市 田村邦昭

美しく自分らしさの色をもち

口笛が似合つた故郷の丘がある

膏藥を貼つても趣味はかかせない

収穫の秋だ悩みがまた増える

意地悪いマイクが負けを聞きたがる

鳥取市 田中 瞳子

珍味ゆえチヨウザメは子を奪われる

駆け引きが過ぎて王様丸裸

戦後派も庭いっぱいに芋を植え

八十の目には六十まだ子供

求めすぎ愛はするりと手を抜ける

鳥取市 土橋 はるお

ネクタイに首締められて出ぬ笑顔

僕のした事に感動してくれぬ

たった今老人死ねと言う日本

居酒屋の障子貼りでも手伝うか

順番に幸せがくりや慌てない

鳥取市 土橋 睦子

さりげない笑顔に合わせぬ意地っ張り

肩書のない者同士馬があう

夕餉には甘い顔するお爺さん

秋刀魚焼くのそり顔出す猫二匹

外面のいい人だから嵌められる

鳥取市 中村 金祥

夫の愚痴定退までとじつと聞く

満月へじつとガマンの月下香

アスベスト余罪で合わす顔がない

プロよりも夫の手もみがよく効く

独裁の日へ着々とおお恐い

鳥取市 西川 和子

さらさらと追い越して行くニューフェース

スランプの脳を洗っている夜長

睡眠が足りて調子も乗って来た

スナックを利かせた苦言投げて来る

好奇心の眼さらさらよく動く

鳥取市 夏目 一粹

金のない人でも愛に魅せられる

にんげんは口があるから喜怒を生む

難聴に聞こえぬ母の微笑みよ

家族には言えぬが火の輪くぐってる

永遠のライバル名簿から消える

鳥取市 杉本 孝男

ゆつくりと除夜の鐘聴き年送る

わが子への嫉の効果まだ見えぬ

客寄せの効き目ばつちり餅つきよ

ご機嫌を直し隣と手を結び

謙譲の美德古いとあざ笑う

鳥取市 山本 益子

笑顔見せ泣きたい心折り畳む

ゴキブリは明るさに酔う性を持つ

武家屋敷お菊怨念皿の音

諍いの中にも見える熱い愛

計りづらい党首の地位に興味持つ

鳥取市 美田 旋風

年ごとに撮った写真が気に入らぬ

戦争を知らずに吠える憲法論

戦時中の話を聞かせ子に残す

ほどほどに遊べる友と意気投合

老人も好きなことすりや若返る

鳥取市 福西茶子

口数を増して女を煙に巻く
ありがたや咄嗟の時に居る家族
カーナビに誘い込まれた崖の道
健康に自信はあるがドック入り
どの色も生きた証になる絵の具

鳥取市 春木圭一郎

したいこといつも心に決めている
たいていは覚悟があれば片がつく
思い込みないか時々考える
決断ができない時は待つてみる
縁あって今日も多くの人と会う

鳥取市 永原昌鼓

救急車 家族の祈り積んでゆく
リリーフがいれば降りたい主婦の椅子
ハードルを下げるとファイト失せてくる
ほどほどの雨と日照りを恋う山河
莫大な国の借金おお恐い

鳥取市 平尾菜美

丸丸さん本音吐いても軽すぎる
埒あかぬ水かけ論をファイルする
カプセルがやる気包んで落ちつかぬ
アウンの乱れに月のノクターン
晴れの日に座るお経がよく弾む

鳥取市 福島庸二

夕立の後に出て来る虹を待つ
漁火のゆらぎ心も燃えている
満月の夜道を隠す雲流れ
占いに頼って見たい時もある
お世辞とは分つていてもゆるむ顔

鳥取市 林露杖

休耕田占拠セイタカアワダチソウ
掌を這わせて飛ばす青蝗
国勢調査職業欄は家事と書き
貯えも無く借金も無いけれど
何だ彼だデイサービスをサボる妻

鳥取市 福田登美

同窓会どきどき老いも若がえる
喜寿過ぎて品よく老いた人ばかり
胸襟を開けば弾む笑い声
生きてきた証汚れてきた辞典
再会の握手慕情が揺れて秋

鳥取市 宮脇道子

月下美人どきどき視く闇の中
認知症訳もわからぬ名をもらう
老いた今頭切り換え人頼り
細木さんズバリ聞きつつ胸がすき
老世界とても気になる救急車

鳥取市 山宮 愛 惠

鳥取市 加藤 茶 人

仲人がとても上手にもつてくる
呼ぶ人も少なくなつて秋祭り

天下国家論じて眠る祭り酒

忠告があつてうれいとも思う

はて何を取りに来たのか二階まで

鳥取市 西村 黙 光

漫画本で勉強せよと稚孫言う

ストレスの測量計だよワンカツプ

鼻髭見て格好いいよと友笑う

酒に酔い候文で駄駄こねる

八十歳鼻髭自己を主張する

鳥取市 裕 寛 子

今そこにそれをさがして今日も暮れ

丹念に年を重ねた独りごと

長老といわれ丸い背らしく見え

ほんの少し頼り頼られ続く仲

ハリケーンだ地震だテロだ世も末だ

鳥取市 鈴木 一 弘

彼岸花 無縁仏の水まつり

母ゆずり嫁いだ先で舞を舞い

玉葱を刻む独居の目に涙

晩酌でちびりちびりとしめくくり

表札と靴が独居の留守居番

若作りしてはる女の笑い皺
酒タバコやらないだけで良い旦那
国想うよりも私は子を想う

米びつを見れば幸せとは言えず

片意地を張ると意外に腹が減る

松茸は無理とあきらめ栗ごはん

鳥取市 岸 本 孝 子

自分史の余白を埋めるため歩む

難問が片付きうまい酒となる

礼節を親しい友に教えられ

ナイターが終りテレビがただの箱

鳥取市 岸 本 宏 章

迷いそう避難勧告避難指示

視力2のころから星が減っている

凝った庭作つて今は持て余し

息抜きをするにもやはり金がいり

スケジュール知りたい政府専用機

鳥取市 倉 益 一 瑤

一番なりさあめしあがれ仏さま

収穫を信じ軍手の真つ黒け

洗つても消えない罪がふたつみつ

丸洗いしよう定退後の夫婦

隙のない所が妙に勘にふれ

鳥取市 倉 益 一 瑤

鳥取市 上田俊路

何とでも気侷に言える外野席

裸一貫よりもみじめな無一文

紙コップでの乾杯は気のりがしない

生前に聞きたいわたしへの弔辞

焼き芋がおいしく焼けた敬老日

鳥取市 植田一京

わたくしの愚痴は隣の犬に言う

生きのびるために芝居の二つ三つ

曲がり角まさかの敵が待っていた

ツーカーで通じる君のメッセージ

古里の言葉辞典に載ってない

鳥取市 奥谷彩子

シャッターチャンス心の髻も写し取る

四方に根を張り良き友という実り

タクト振り気遣う妻がいてくれる

どんぐりもどんぐりなりの夢を抱く

あるがまま生き急ぎせぬ井の蛙

鳥取市 有沢せつ子

健康を保ってゆくに根気要り

百歳の元気に元氣いただいた

墓地で会い挨拶かわす同世代

投書欄同じ気持に笑み浮かぶ

散歩にもおつくうになり秋深む

倉吉市 最上和枝

気がつけば自分本位に綴ってる

付かず離れずでつきり夫婦と決めていた

ほろ酔いの口が本心零れさす

崖っ縁立てば思わぬ知恵が湧く

沢蟹と栃の実遊び秋深む

倉吉市 松本よしえ

花を愛でひとを愛して母になる

雨乞いの踊りシャンシャン町を練る

こちらにもいい病院はあると言う

正直な雀は何時も朗らかだ

何回見ても出雲神楽は素晴らしい

倉吉市 山中康子

融通のきくもての器です

もう少し秋の余裕に陽が欲しい

肉親の目の輝きに妬いている

賞味期限見ずにケーキを上げちゃった

鈴虫がさみしがりのやの連れになる

倉吉市 猪川由美子

自民圧勝 税率上げが見え隠れ

国会復帰でソーリソーリが期待され

マスメディア大袈裟にして媚を売り

幼な児が束ね絆の役務め

鬼のかく乱地球は徐々に発熱す

倉吉市 山本玲子

米子市 政岡日枝子

婆さんは暑い寒いが口癖だ

傘寿から時計の針は駆けだした

値打ちものですと家電屋愛想いい

落葉樹錦を飾る秋日和

スローだとみくびつっていた蝸牛

倉吉市 牧野芳光

渦巻きのように心に溜まる鬱

人間にどつぷり浸り喘いでいる

浜に出て海の嘆きを聞いてやる

赴任地の休み空しく過ぎてゆく

言い負けた課長の椅子に掛けてみる

倉吉市 米田幸子

有難や未だ福祉の手を借りず

糟糠の妻が夜な夜な爪を研ぐ

傷ついた心を癒す里の山

節ぶしに人の情けが詰めてある

酒豪だと言われた酒もびたり止め

米子市 林瑞枝

菊の御紋の尾道やまと艦に乗る

颯風もそれご利益のバスの旅

灯の点る森にボーイソプラノの囀

若返りしまなみ海道いい景色

小咄のとっても巧いそば枕

枝たわわ今の栄華を誇る柿

どの種類のんでも効かぬ風邪ぐすり

笑い声隣も家も消えていく

天空にちちはは見たたり、うろこ雲

若いから盛りだくさんの夢を持つ

米子市 澤田千春

にらんだら笑って返す野の仏

毎日が祈りを抱いた綱渡り

散歩道うっかり出来ぬテロの罫

年重ね無理したつけが重くなる

この夕日足の裏にも見せたいな

米子市 青戸田鶴

秋の雲大事な人を連れ去った(長男の嫁が急逝)

一瞬に散ってしまった沙羅双樹

懸命に生きた姿が眼裏に

振り向いてと叫んでしまう夢の中

逆縁の糸のもつれに耐えかねる

米子市 白根ふみ

たった一夜を月下美人は契りきる

よどみない筆致で筋を通される

忘れ上手で生きてゆけると言うておく

満点に足りないものがそこかしこ

秋高し絆一つが切れる音

米子市 野坂 なみ

風を味方に与党は今や肥満体
企業とファンドはでな戦が見物だな
この裾野ご先祖からの本籍地
何事も器用で人と妥協せぬ
この家であと何年の陽を拝む

米子市 木村 春枝

四面楚歌 開き直って出る笑顔
うっかりを狙いきれいな蜘蛛の糸
秋風に一目散の枯葉連れ
一日をあれこれ探し忙しい
神様から借りた人生楽しかり

米子市 中井 ゆき

年金が出たら球根買いにゆく
金木犀母の香りをつれて来る
青みかん忘れた恋がよみがえる
アデ虫は家をかついで雨の中
球根に夢をあずけて冬を越す

米子市 門脇 晶子

五体どこかに波の音譜が鳴ってくる
花に学んで明るい方に向いて行く
外出はおしゃれメガネをかけてます
秋の匂いを出して回ろう水車小屋
息つく暇もなく正月がやってくる

米子市 光井 玲子

我慢強い老父にはほんに脱帽だ
洗いざらい打明けほんに胸がすく
説教もどこ吹く風と反抗期
老いてなお老父のパワーは現役だ
地図ひろげ私ひとりの旅をする

米子市 本吉 宗光

4Fの窓に明るさ取り戻す
同人になつて早くも半世紀
十七字追いかけている半世紀
貴女には私の想い言つて見る
雨雲が流れて今日のくもり空

鳥取県 新家 完司

日本のためにお役に立ちたいが
長生きをしたいが酒も飲みたいよ
みんなからわざとはぐれて独り酒
また一歩老化が進む二日酔い
よく眠る妻は百歳まで生きる

鳥取県 谷口 次男

蟻の列 愚直を誓い愚直なり
梅好きで梅里を気取る父だった
日本を銭進国とよく言つた
古い辞書溺愛しつづ字を忘れ
お上から睨まれてこそ五七五

鳥取県 石谷 美恵子

実の味は如何と樹からメッセージ
ポスターの笑顔振り向く人もない

眩しいひとをガラス越しから見る焦り

私とわたしが揉める熨斗袋

リハビリへちからを貸さぬ鬼でいる

鳥取県 太田 幸枝

一匹の蚊と鬼ごっこ不眠症

神様をこちら向かせる鉦を打つ

ストレスはまつりの風で吹き飛ばす

若葉マーク無事帰るのを祈る母

初恋の彼夢の下手をつなぐ

鳥取県 吉田 弘子

尾を引いてさみしさ募る秋の傷

大物の釘一本が黙らせる

逆算の余生がさせる全電化

陽に当てた布団ふくら笑い出す

野性化を期待されてるコウノトリ

鳥取県 佐伯 やえ

病む友へ風をスケッチして見せる

自由な秋をポッケに入れて一人旅

窓際を守りつづけている土瓶

草刈りのたたかい終えて水戸黄門

礼肥にそむかぬ花が美しい

鳥取県 鳥羽 玲子

地図かこみ津波へ心おいてみる
祭り笛気高く秋の風にのり

趣味同じ夫婦触れ合いながら生き

浴衣縫う人もなくなりゆかた恋う

残り物まとめ創作料理する

鳥取県 下田 茂登子

満月を拜んで頼みごとを言う

頑固さがますます進む爺と婆

黒幕の口に乗つたら怪我をした

半世紀暮して見えぬ夫婦愛

狂うたら我が子も邪魔になるおんな

鳥取県 山本 正光

日の丸は一民族の誇りなり

人生を変える素敵な出会いの日

ほどほどの調子でながい趣味のみち

眼の先の花回廊は雨の彩

善意です つうじなくてもそれでいい

鳥取県 山下 節子

ひたひたとロボット人の職奪う

おお恐い子供叱るも気をつかい

父さんがリリーフ母の味出ない

とんびに生れ鷹になろうともがいてる

罪一つ隠し余罪を重ねてる

極楽へ楽々行ける善を積む

鳥取県 近藤 春恵

修羅の海 男をためす風よ吹け

パトロンの泥舟だったとは知らず

その昔流した涙生きてくる

ふる里の海が壮志を抱かせる

鳥取県 竹信 照彦

ゴーヤの手結んだ紐が多すぎる

実らせてからでは遅い草を抜く

お隣の若葉見ながら種を蒔く

雨なんか平気と橋の下で釣る

秋雲に乗って心は孫悟空

鳥取県 深田 倶久

ホールインワン何時かあろうよ わたしにも

鉛筆を削って川柳書いてみる

爪を切る今日の予定の無いままに

無理やりに通す法案穴があり

何も彼も許してしまうこの齢

鳥取県 盛田 夢路

ゆったりと雲は大空パトロール

墓参り祖父母は曼珠沙華となり

道づれは時を追ったり追われたり

やみくもに煩惱ばかり焦りおる

どの花も天の恵みと土に咲く

絵手紙に実りの秋が描ききれぬ

鳥取県 澤 裕子

無意識に比較している目を恥じる

口げんか最後は妻が巻き返す

廃屋に賑やかだった跡がある

リリーフに妻がへそくりボンと出す

第55回 西大寺会陽川柳大会

- と き 18年 2月26日(日) 10時開場
11時半投句締切 1時開会
- ところ 西大寺ふれあいセンター (086-944-1800)
- 会 費 第一部 投句料 1,000円 (発表誌)
第二部 2,000円 (昼食・発表誌・参加賞)
- 第一部 事前投句 便箋に各題2句、住所、氏名、電話を
明記。締切 1月15日
- 投句先 〒704-8112 岡山市西大寺上1-15-28
久本にい地 宛 TEL 086-942-3074
- 「掴む」梅崎 流青 選・「負け」天根 夢草 選
「触れる」やすみ りえ 選
- 第二部 (出席者に限る) 各2句
- 「萌える」田中 博造 選・「湾」石部 明 選
「消」若草はじめ 選・「吉」長谷川紫光 選
「ルール」西出 楓楽 選・「囃む」草地 豊子 選
「席題」山口 流木 選
- 大会前日宿泊希望の方は1月31日までに久本にい地まで、
ご連絡下さい。
- 主 催 西大寺川柳社 後 援 岡山市他

川柳塔の

川柳讃歌 ⑫

木津川

計

禁酒していたら出世はしていない

夏目一粋

出世したのはまさか一粋さんではありませんまい。河内主幹も「自分や家族の自慢をしない」と十月号に書いておいでです。禁酒せねばならぬ事情に構わず、その男は出世したのです。酒席で上司に取り入り、可愛がられ、「家庭の幸福は諸悪の本」と太宰治張りの生き方で今日の地歩を築いたのです。大阪のアルサロ王だった磯田敏夫さんの言も真実だったなあと感じ出します。「伝書鳩みたいに帰りを急ぐサラリーマンはものにならない」であります。

来て欲しい手紙は地図が入れてある

石谷美恵子

「所も言わずいっぺん遊びに来い」はどんなの名句でしたか。何が不愉快といって「お近くにお越しの節は是非お立ち寄り下さい」などとぬけぬけとなぜ書くのでしょうか。儀礼

的とは知りながらも不必要な世辞はやめた方がいい。「ほんまに來はって、わたし困りました」という人に出会ったことがある。美恵子さん、偽りとほんまの区別をありがとう。

胸奥に一線引いてから強気

長浜美籠

遠慮だったかも打算だったのかもかもしれません。だから弱気だったと美籠さんは悟ったのです。「胸奥に一線を引く」、即ち覚悟を決めたのです。もう迷わない、と思つたあとの強気です。それが文字通り一線を引き、第一線から去る、であつては淋しいですね。日本語の複雑、だから面白いのです。

忘れたい過去へ切り取り線がない

喜田准一

一線があり、第一線があり、環状線もあれば三味線があり、赤線もあつた昔です。「線」を数学的に言うのと難しいですね。「点の動いたあと」であります。動いたあとの「忘れたい過去」は誰もにあります。ですが消しゴムはないと多くの人が歎き、准一さんは切り取り線のなさと嘆くのです。所詮、人間は過去を背負つて生きていくのですね。

計報聞くとこまで知らずのか悩む

古今堂蕉子

よく人情の機微にふれました。知らされて、ええつ、なんで僕に？と思つたことが何度もありますから蕉子さんの悩みが分かります。それに昨今は香典も無用の葬式がふえる一方、受け取りますの旧来もあるから悩みます。香典を持つていくのかいのか、蕉子さん、今度は、香典は要らんと聞いてホツとする、そんな心境を読んでくれませんか。

わたし達出合い頭の夫婦です

田辺鹿太

十月号には国米きくまさんの「夕立が緑となつて今の幸」もあります。「雷が落ちたあなたに御家も落ち」などと訳の分からん機縁もあります。一目惚れとは聞きますが「出合い頭」は初めてでした。婚礼で尾頭付きの鯛を前に巨頭を熱くした鹿太さんの思い出です。

八十路駅オーバーランをした思い

山門タミ

よほど悔やまねばならない事情があるならともかく、八十路を越えたタミさんは祝福さるべきなのです。電車はいけません、人生にはオーバーランはないと心得ましょう。タミさん、遠慮せず、気兼ねせず、百まで生きてください。いい川柳をつくってください。

(立命館大学教授・「上方芸能」誌代表)

白選集

河内天笑

千葉で負け地元で負けた拍子抜け

来年があると慰められる虎

姉さんと間違ひそうな丸い鼻

ボク的にビミョウていうか曖昧語

ヒステリーみたいに鳴らすクラクシヨン

小林由多香

髪型で一つや二つ若くなる

秋風にやつと食欲とりもどす

刺客とか現われ選挙戦揺する

どちらにも長所短所があり迷う

三人の家族で車庫が三つある

斉藤 焄

樵の木のしずくが樵の子を育て

闇の中みんな花火を持つている

魂は抜けていませぬ枯野原

よく笑う子ほど深あくなる眠り

また集う話が弾むこけし達

田中正坊

義経が終幕かざる菊人形(ひらかた太菊人形)

あでやかに静御前が舞う場面

幸せな一日 束の間に過ぎる

三人の友の訃を知るOB会

亡き友のありし日思う秋哀れ

玉置 重人

働いて汗してぬくい灯に戻る

図書館へ行くと居眠りしたくなる

愚直さを信頼された役どころ

硬直した脳でベンが進まない

矯めている力が風を読んでいる

恒松 町紅

手不足を近い他人に助けられ

世情には疎い肩書き抱いている

他人にも小姑がいて聞き流す

ぼつぼつと言つて指先焦つてる

執着が断ち切れなくて積んでいる

遠山 可住

救急車何処かで誰か一人死ぬ

好きなればこそ音楽へ泣きに行く

身の丈のくらしで遊ぶ宝くじ

内職の腕へベットのちゃんちゃんこ

アルバムの貧しい頃のいい笑顔

土橋 螢

魂も肉体もいま待ちぼうけ
それその笑った女がお友だち
片棒を担いだ罪を認めない
十五夜の月から露が落ちてくる
長男の長男という宝もの

仁部 四郎

あれこれと読むがヒトラーむずかしい
ヒトラーの映画はどれも恐ろしい
結婚の時はヒトラー法を履み
ヒトラーのヒゲを外せば笑うかな
いつかまたまたヒトラーが来る噂

波多野 五楽庵

水滴の一つ一つにお月さま
ひざ冷えて雪の予報がさらさらと
生きている時は旬だと決めている
冬の絵を破って冬を忘れたい
母は今 輪廻の道のどのあたり

芳地 狸村

うまいこと財布とられたシヨツピング(イタリア旅行)
素晴らしいカンツォーネの別れ宴
カトリックの大きさを示す宗教画
カンツォーネ流れてきそうナポリ湾
浴場のモザイク生きる2000年

宮口 笛生

ふる里に亡母のぬくもり其処此処に
なるようになるとはあまり勝手すぎ
点滴の一滴いのちつないでる
前立腺癌何くそで生きている
酒うまく癌を忘れてしもうてる

森下 愛論

喝采もなくてポツンとバラ一つ
切り札を手繰ってもがく木偶の坊
振り向けば背中丸める影法師
転んでは己の阿呆叫んでる
しがらみを忘れて赤いバラ贈る

八木 千代

剃刀にうなじ預ける理髪店
わたし弱虫じぶんで刃物当てられぬ
極楽にスリルも少し理髪店
ひと皮剥けて秋の鏡とご対面
自らの力で脱皮しなくちゃ

八十田 洞庵

どたん場で器用に曲げる政治の場
口の扉ワインの精が開けにくる
判決に希望を持たず助言入れ
あれほどの恋に別れの序曲聞か
幕引けばごめんと言いたい悪女ぶり

両川洋々

オンボロの地球に保険掛けておけ
まっしぐらの男と波長合う街だ
天下取る夢をベットが聞いてくれ
メールでは好き好き好きと言えたのに
復興のエースはポランティアだろう

阿萬萬的

瘦せ我慢張つてますます世に疎く
頑固さでやっと生き甲斐支えてる
雑魚なりにこだわりがあり不整脈
こりやまずいと惚けた顔も年の功
四分六で妻に譲つて日々平和

石川侃流洞

満月へ淋しがり屋の雲が寄り
初恋の想い出楷書のまま老いる
鳥取砂丘 駱駝アラブの夢を連れ
百均から空気の缶詰土産にし
曾孫の花嫁見たく葉飲む

板尾岳人

討ち入りが済んだらしいという噂
十二月漬け物石は大き目に
あの時は十二月だった父の逝く
十二月だから私は走らない
クリスマス コロツケの方が良いと言う

奥田みつ子

古い殻脱ぐ気にさせた秋の風
気張つても過去はかえらぬ月の暈
満天の星にたましい解き放つ
つまずきも傷もプラスにして生きる
蕩もみじ残りのいのち輝かす

河井庸佑

世の常とと思う矛盾に憤る
過ぎた今日思い返している湯舟
義理欠いて自分で世間狭く生き
句読点ひとつと疎かに出来ず
万全と過信の策に穴ひとつ

川島諷云児

一日を乾いて家に辿り着く
よたよたと俺に似ている冬の蠅
忠告の声聞こえない有頂天
その先は言うな涙に弱いから
引つ込みがつかなくなった勇み肌

木村あきら

虎落笛鳴らして寒気団が来る
北風に笑顔崩さぬ野の仏
竿竹屋が流して通る十二月
片隅に花活けてあり無人駅
食べ漁りねぐらへ急ぐ小鳥たち

黒川紫香

窓開けて今日の空気を吸う旨さ
病室へ向かいの犬が尻尾振る
ほんやりと一日過ごす秋の風
毎日と同じ葉で息をする
やっとだけトイレに行ける一歩踏み

小西雄々

介護する母から学ぶ満ちた愛
おしどりへ他人気付かぬ隙間風
過疎の里 熟れてる柿が気にかかる
プライドをいたずらな風吹き飛ばす
煮えきらぬ男へ揺れが止まらない

原稿募集

— 薫風名誉主幹を偲ぶ —

平成十八年四月二十四日、一周忌を迎える薫風名誉主幹をあらためて四月号で偲びたいと思います。先生の思い出、エピソードなどのご応募をお待ちしています。
締め切り 2月10日 本社事務所宛
本文400字詰原稿用紙1枚半〜2枚
(600字〜800字) タイトルは別につけて下さい。
ただし原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。

編集部

川柳オホーツク400号記念 第7回 全国誌上川柳大会

題と選者 (各題2句詠・共選)

「流れ」 泉 比呂史・石田 一郎
木本 朱夏・斎藤はる香
「雑詠」 大野 風柳・平田 朝子
北野 岸柳・岡崎 守

投句締切 H18年1月31日消印有効厳守

投句料 1000円 (発表誌呈)

*投句用紙/指定用紙又は便箋
賞 「流れ」 合点5位。「雑詠」 特選4名
準特選4名に呈賞。

発表 川柳オホーツク18年5月号誌上
投句先 〒090-0033
北見市番場町4-10

北見川柳社 誌上大会係
TEL 0157 (24) 2444
FAX 0157 (24) 9912

主催 北見川柳社

『川柳・明日香』

(創刊11周年記念全国誌上大会ご案内)

課題&選者

雲石 隆子(宮城野・宮城)
播本 充子(川柳塔社・東京)
「夢」 白崎 道子(明日香・北海道)
柏井日出子(松江番傘・島根)
国吉司函子(那覇川柳会・沖縄)

2句詠(表現自由・読み込み可・5人共選)

用紙 自由(清記します)

参加費 1000円(発表誌呈)

締切り 平成18年1月31日消印有効

賞 総合点10位まで呈賞(同点は到着順)

発表 『川柳・明日香』18年4月1日号

投句先 〒369-1102

埼玉県川本町瀬山2-1-9

明日香川柳社 宛



板尾岳人選

神戸市 田中 章子

深く腰かけて出直す時を待つ

金木犀 父母のいた頃のこと

埋み火がいつか点火をする予感

つい口がすべった後のにがいお茶

考える人は祈りの形かも

さくら茶のピンク広がるうれしい日

大阪市 森 田 明子

深い闇見知らぬ私また出会う

芸のない犬で我が家に合っている

お若いと言われるほどの歳になる

小包みが北海道を詰めて来る

パズル解くようにはいかぬ曲がり角

パソコンにもっと日本語教えたい

神戸市 両川 無限

詩集からぱらりと落ちた若き日々

森を出る道をつくっていると

海鳴りが男の肚の中にある

切り替えの早い若さに期待する

人間をつくった神にある誤算

逆転ののぞみあるから踏んばれる

断つ事がとても大事になる老後

たましいの奥を覗かれ好きになる

絵手紙をくれたいい人なんだろう

医者の声すぐに信じるバカの壁

ジャンプする気力を妻に見せておく

だらしない寝顔になってゆく予感

大阪府 片山 忠

癪だけど妻の小言を返せない

その先はとうに読んでる妻の笑み

箸置きを添えると馳走らしくなり

試されているのか天も味方せず

やさしさを同じぬくみで返さねば

贅沢はせぬが晩酌だけは別

大阪府 升成 好

松江市 松浦 登志子

五年前やはり咲いてた道の花
たつぷりと息を吸ってはふうーと吐く

露草もドラマチツクに旅続け
芒の穂ちよつとつついて風感じ
本当の気持ちを書いて空仰ぐ

松江市 山根 邦代

中秋のロマン昔のことになり
勿体無い耳に残ってる母の声
コオロギの子守唄です里の秋
夕方の早さとまどう秋の虫
星空が冴えてあしたの予定表

真庭市 矢谷 富士野

転んでも妥協はしない老いの意地
雷が落ちて女系の家静か
盃が小さいと酒豪だだとこね
畠という楽園があり老い二人
隣猫来て相槌を打つてくれ

出雲市 荒木 英子

魅力ある人生目ざし一行詩
世の移り混乱の中選挙戦
盆も去り熱い茶もらい秋を呼ぶ
倅せは予定の中に秘められる
老いてなお若さ求めて娘恋う

雲南市 武島 ちよえ

優しさを形にすれば丸い物
出っ張りがあるから言葉引つかかる
皿に盛るだけのおかずを買ってきた
もつれ糸解く手順が見つからぬ
交代を自覚したのか枯葉舞う

雲南市 菅田 かつ子

満ち足りた顔で揺れてる花と蝶
堪え兼ねて烏賊は本音の墨を吐き
今もつておつちよこちよいが直らない
悪友と遊ぶ話はすぐ決まる
この上に翼があれば落ち着かぬ

鳥根県 柳 樂 たえこ

残り火を燃えつくすのか秋の虫
言い負けて食事の仕度ホイコット
裏腹な事を喋った口叱る
飛んでみてはじめて分かる風当り
追い風に加勢を頼み行く戦

府中市 藤岡 ヒデコ

勾配が微妙に変わる七十路坂
暑いのも寒さも苦手彼岸花
それなりの姿勢保っているくらし
老人会入ってみればみな若い
大根と女太らせ秋の風

宇部市 高山 清子

口重く水掛論をさけている
エリートが札で綴った転落史
丁重な言葉でズバリ断られ
何事もなかったことにする二の矢
それなりに紅白粉でまだ女

広島県 馬場 利子

部屋ひとり内緒話が洩れて来る
嘘一つ流して朝の顔洗う
泡掴むような話に輪が軋む
あれこれと妥協重ねて共白髪
気分転換風ともつれて旅に出る

大洲市 花岡 順子

寂しくて化粧直しが終わらない
習慣になったため息とは寂し
土の中で雨のささやき聞いている
退屈な時計の針が動かない
他人の眼考えている腹の虫

今治市 塩路 よしみ

燃えるものこころに秘めて米を研ぐ
過ぎし日は無となり今日の日向ぼこ
喜びを陰で支えている黒子
溺愛の愛の尺度が定まらず
行間に人の情けが透けて見え

今治市 野村 清美

客が来る予感に花を活けて待つ
ウインドーへ枯れ葉も飾る秋深し
ひそと咲き別れを惜しむこぼれ萩
満ち潮と引き潮海の深呼吸吸
感謝して沈む夕日へ手を合わす

高知県 桑名 孝雄

立派だな禁煙という金字塔
総論は賛成ここで酒にする
同期生バブルの頃の顔をして
徳俵うまく使った勝ち名乗り
不器用で一押し二押し三も押し

札幌市 三浦 強一

ラムネ玉からりと鳴って夏が逝く
コンビニにおでんの香り秋が来る
世界一長寿が怖い国に住む
ヘルパーの来る日は剃ろう不精髭
髪型を変えても夫気付かない

東京都 やまぐち 珠美

じゃあまたねトンボかすめて行つたきり
亡き母の顔を私が持っていた
振り返らぬようにためらわぬように
風よお先に やはり一人の乱気流
乱反射するかい泣いて帰るか

東京都 長谷川 康子

娘の誘い少し無理して乗ってみる
変化球夫に投げて躲される

総選挙少しはマシな世の中に
計算がはかどる今朝は冴えている
膝の尻に優しく絵本読んで祖父

横浜市 中尾 哲代

笑う飲む喋る熟女のバスツアー
悪い人見分ける知恵を教えこむ
自分でも驚いている卒寿とは
極上の霜降りにする給料日

余生とやプールを歩く昼下り

横浜市 長 島 亜希子

マニフェストよりも大衆受け狙う
地震 火事 雷 今も怖がられ
老人会に誘いがあって腹たてる
ウォームピズわたし前から着ています
出来たての介護施設がすぐ埋まる

横浜市 川 島 良子

爆発をせぬよう脳のマッサージ
スタートは順調だったはずなのに
気配りが過ぎてストレス溢れだす
結論を急ぐとろくな事はない
賢母にはなれぬ私はバカですか

昭島市 野口 忠

紅葉に追いかけられて旅仕度
相槌も自作自演の一人旅
満腹に目が箸掴み思案顔
電子辞書おもちゃが一つ増えました
子を叱る目には優しさ見え隠れ

日立市 加藤 権悟

まだ若いつもり敬老会など無縁
普段着の母は一番美しい
大夕焼けを抱いてふるさと母ひとり
祭り終え風は無口な村になる
一枚の暦師走の風せかす

佐渡市 高野 不二

胃カメラに心の傷は見られない
酒が薬と言ったテレビを忘れない
おとなしく叱られている親孝行
クールピズもうけた人もいたらしい
放送の今日はおからが売り切れる

岐阜市 平野 あずま

一枚のくじに大きな夢を買う
一枚の皿に愛情てんこ盛り
パスポート十年前の若い顔
円換算安い高いと土産店
若い日を覚え昨日のこと忘れ

岐阜県 鶴留百合

家中がおもちちゃとなつて子は育ち
捨てた村見え隠れするタムの底
はじかれて足許へ寄る蹴った石
万国へ平和戻れとご来光
これ以上浪人できぬ深夜も灯

犬山市 金子美千代

飛び立てぬ蛍にさせた甘い水
かわいいと美人どつちがうれしいと
白魚の指家事なんかやりませぬ
決めたなら四の五の言わぬ人が好き
国産の香り忘れた土瓶蒸し

愛知県 八木百合子

人間ってあほだね終わらない戦
携帯のなくても困らない暮らし
押入れを独り占めする不用品
強制はしませんと言う寄付集め
腕時計はずして暇を持て余し

京都市 清水英旺

秋天とひと刷け雲のコンチエルト
風匂う夜道にさがす金木犀
二匹目のドジョウとなるかウォームピズ
自慢するもの一つなし秋無聊
秋の日のつるべ落しに気が急ぐ

京都市 三宅満子

フリーチケット買って秋色探す旅
露芝の小紋の母は若いまま
騙すより騙されておく生き上手
四行の言葉が嬉し子の便り
鉛筆がご褒美だった運動会

篠山市 谷田多美子

風鈴に未練残して糸トンボ
宅急便都会の匂いのせてくる
温暖化防止でエアコン切るタイム
朝シャンでぬいた昨夜のアルコール
アルバムの夢を閻魔にもつてかれ

高岡市 青井はつえ

脳細胞指令の速度遅れがち
簡素化を自分の趣味に当てはめず
花ことば知ってドラマになる予感
セレブ婚さらつと離縁する世相
パソコンに時々バカと叱られる

大阪府 小栢こずえ

自家野菜作り健康管理する
紅葉もいのちみたして赤くなり
栄えてる家は温和な風が吹き
自己催眠若い若いと言ひ聞かせ
安堵感無事に終った夕茜

大阪府 神野 千恵子

一輪の花で空気が生きてくる
寂しさについつい自分に嘘をつく
赤ちゃんが笑って人の仲間入り
団塊の世代といえど人独り
ジャングルベルじたばたしても十二月

大阪府 池田 岩夫

矛盾にもさほど気にせぬ歳になり
兄弟も遺産からめば他人並み
持ち味を奥にしまつて無趣味です
癖のない字ですねえが褒め言葉
シンデレラ夢みた頃もおましたなあ

大阪府 畑中 節子

年毎にお役退きたい農繁期
汗実る黄金波打つ膳棚田
新米検査 一等米に疲れ癒え
人生は波瀾万丈猿芝居
用件を忘れるほどの長話

大阪府 吉田 富美

喜寿乾杯 明日を信じて掃く落葉
かくれんぼ鬼が木の実を拾つてる
ちよつと地味でも母さんの割烹着
金もくせい少し入り口開けておく
高々とクレーンが秋の陽を掴む

大阪市 尾崎 黄紅

妻の逝く夫の逝くの句が増えて
夢を追うだけは休まず続けてる
残塁の数は誰にも負けません
大阪で観たことのない蒼い月
拳手の癖いまを老兵生きている

大阪市 三浦 千津子

追伸の二行が温い眼鏡拭く
底辺に生きて泣きたい日を笑う
強がりの仮面はずせば淋しがり
子の主張 波乱ふくみの青写真
単細胞ひよいと従う癖がある

大阪市 中井 萌

地球上いつもどこかで揺れている
方便の嘘さえつけぬ罪な人
電話口 母力なく元気だよ
ブランドー寡黙な男よく似合う
お茶でもとペットボトルの味気なさ

大阪府 北出 北朗

優れ物生まれながらの猫にヒゲ
乳吸わせながら母猫至福の眼
十五夜を見上げて猫の物思い
昼寝する猫に教わる風の道
顔洗う猫に天気を賭けてみる

池田市 上嶋 幸雀

不揃いの粒のぶどうの自己主張
マスクット口紅つけて捨てられる
天高く負けず嫌いのダイエツト
首筋を不気味に撫でる秋の風
宇宙から見れば地球は美人です

池田市 多田 契子

一円を拾い明るさ知った月
ポストから見えかくれる赤い舌
朱の月が思わせ振りで眠れない
バカの壁 一途に叩き優勝た
どうしてもその日の覚悟浮かばない

泉佐野市 備後 三代子

いやなことさらりと忘れ麦こがし
ちよつといい話に笑顔老いの皺
菜を刻む老いてリズムもしめりがち
塩分を八十路になつて抑えても
サングラス外して母の顔となり

柏原市 伴 洋子

やさしさが上滑りする都市砂漠
薄味にならされ覇気のない余生
女の一途たじろぐほどの炎かな
十人十色それぞれ違う彩で咲く
お互いに嫉妬している岸の花

岸和田市 堤 植代

喜びの笑顔見たくて編みはげむ
恋しさに寝返りをうつ秋長し
亡き母の歳と我が身を重ねてる
恵まれてもつたいないを忘れてる
菜食の妻に内緒で肉を食べ

岸和田市 中岡 香代

おしゃべりが目当ての祖母が散歩する
名案を賛成しない天の邪鬼
姑と嫁の味覚が喧嘩する
肩書きがとれた名刺は欠伸する
迷惑を顧みてないマイペース

堺市 大久保 伸子

目瞑れば韻ききたれり亡夫の声
難民の子供の笑顔笑えない
忘却という宝物もっている
心では許して男笑わな
掃除機で吸い取るように税あまた

堺市 奥 時雄

生かされてそつと掬った三分粥
真剣な瞳にジョーク引つ込める
冗談に込めた本音が通じない
うたた寝の毛布気づかぬふりをする
蠅螂の斧は承知の上である

堺市 藤井 一二三

富田林市 古田 千華

諦めの数をふやして歳を取り

彼岸花 棚田を埋めて朱を競い

悲史いまに染めて棚田の彼岸花

(飛鳥)

甘樫の風すがすがし樹々ゆする

爽秋の季節日暮れが背を押し

吹田市 早泉 早人

晩秋に恋の思い出遠ざかり

秋深しだんだん口が重くなる

木枯しに熱爛つけて冬支度

雑踏に孤独なこころ遊ばせる

うつろって菩薩になれる老いの恋

高槻市 大崎 侑子

杖をつく元韋駄天とすれ違い

同じ物食べて夫は超スリム

食べ過ぎとスリム指向が反比例

優勝のセールで増える不用品

小走りに追いかけてきお釣りでず

高槻市 佐甲 昭二

ワntenポ遅れて楽に生きている

本心を覗く眼鏡が欲しくなる

人間が好きで絆にしがみつ

運試し引いたみくじにねぎらわれ

人生の流転を刻む濡れ落葉

リズムカル階段下りてくる若さ

新米が気焔上げてる無礼講

マルビルの電光掲示甦り

人生の盛付似合う器ほし

食材のオーケストラを盛る器

寝屋川市 森田 れい子

万歩計しんどいノルマ作らない

健康美バロメーターにパフ叩く

味しめて事後承諾が増えてくる

雲掴む話電話が喋り出す

石橋を叩いてペース乱さない

羽曳野市 森下 一知

アイディアの数だけゴミが溢れ出す

ふるりの森で昔の絵に出会う

原点に戻る覚悟の素っ裸

骨密度減って頑固が薄れだす

無駄骨の汗に実が付く遠回り

枚方市 二宮 紫鳳

秋風に萩こぼれ散る無名寺

古都の萩やさしく揺れて夫婦旅

栄転の息子に嫁の株上がり

黄金の稔り色どる彼岸花

鈴虫の音色に心澄み渡る

藤井寺市 西村 栄一

箕面市 寺井 柳童

大声で呼んだら違う人やった
何もせずお客のような里帰り
青空へ二回もまわす洗濯機
青空へおうちの事は後まわし
青空の下で充電中の僕

少年に少女に戻るクラス会
六時にはいつも戻って来る夫
被災地に笑顔が戻る秋祭り
男性の杵はみだして立つ厨房
もう一軒六甲嵐夜の街

藤井寺市 伊藤 アヤ子

八尾市 田中 トシエ

姑母は元気な証拠留守ばかり
母さんの留守傑作な玉子焼き
傑作を練って今夜も眠れない
ふるさとに涙を捨てる海がある
名も知らぬ虫も啼いてる秋夜長

地方紙に包まれ母の宅配便
自分史に余白残して夢深く
一行の余白があつて救われる
間違えたボタンに重い後始末
不況でもジングルベルは鳴って来る

東大阪市 大塚 サキ子

八尾市 平川 幸枝

満月の光らず低き雲間より
秋立ちぬ植木の鉢を買い足そう
素晴しい友を得たるは大吉だ
幸せも分相応に足りている
一言が足りず心の晴れぬまま

ふとん干す いい夢のままふくらます
沈黙に対して焦らない無口
憧れと不安を併せ持つ純愛
脳のしわ増えて用心深くなる
割り箸に替えて豆腐の角を持つ

枚方市 伊達 郁夫

八尾市 脇 俊子

近づけば憧れの色褪せてくる
煩惱の殻が脱げないカタツムリ
自画像は時間止まったままでいる
メダカにも名前を付けて独り部屋
逆風に毅然男の貌になる

貪欲に走り続けた夫婦箸
我慢せず号泣すれば晴れるかも
ひと言が消化不良を起こして
通り雨相合い傘に恋少し
母の背を月日が走り丸くなる

八尾市 赤木 妙子

八尾市 西川 義明

しあわせをちらちら試す向かい風
熱いうちに打ったはずだがまだニート

お日さまもちよつと朝寝になつて秋

目が泳ぐ人どこまでを信じよう

感情線を泳げばわたし溺れそう

八尾市 笹倉 ひろし

本当の顔は心で確かめる

生臭い私を消した蟬しぐれ

傘寿祝い招待客も減つてくる

輝いた昔を被う紙オムツ

内助の功今は夫が守り立てる

八尾市 松葉 君江

思いやる心の文化風化する

人生の休み時間にする病氣

歳月が心の角をけずりとる

癒される家が私のカルテです

かくれてる運は自分で引きよせる

八尾市 田邊 浩三

酔うてても灯台だけは見えています

ボケぬため泳がしておく好奇心

定年を迎えてやつと立ち泳ぎ

呼び水になつてしまつた迎え酒

ロボットの世話にはならぬ阿弥陀さま

優勝を一緒に騒ぐ百貨店

惚れ抜いて押しの手で貰うた妻

仏壇へ楽しい話だけ聞かす

電池切れするまで飲んだ二日酔い

食べ初めにとびきりデカイ鯛を買う

神戸市 木村 忠義

缶ビール時々中身見たくなる

独酌は侘しいけれど度を越さぬ

親切なこと表札にルビをふり

日本地図貼ると自分の土地に見え

職退いてから髪が濃くなつてきた

相生市 村木 信子

白紙埋める接続詞なら愛がよい

地下足袋を高々と干すわが伴侶

ゆきずりの二枚舌から仮面ずれ

残照へ棚田がもえる曼珠沙華

秋祭り景氣不景氣人の渦

三田市 阪本 藤朗

ぼちぼちと仏壇用に庭の菊

松茸を食べた話に入れない

酒呑んで寡黙のままの人がいる

虫食つたカシミヤ着るかウオームピズ

安全を保証しないと言う地球

三田市 白井二英

兵庫県 安達厚

あつそうか妻卒業もありうるな
個人差があるから定年伸びてよし
服装も顔も男女の区別なく
万人に平等なのは時間だけ
鏡みて直すときだけシャンとする

三田市 堀正和

風鈴も聞かせ名月愛でている
聞かたびに大きくなっている魚拓
よく食べてよく眠る女よく喋り
時刻表持たず洗心ひとり旅
考えておくとじんわり断られ

三田市 上垣キヨミ

母の歳越えて感謝で生きている
恐ろしい体重計の右回り
母さんは座つといてとチン料理
シルバーになつて遊びが忙しい
投げられた小石拾つて悩む日々

宝塚市 丸山孔一

駅を出て携帯妻の指示を聞く
お前にはケータイだけが友なのか
排気ガス吸つて里山ハイキング
父母の遺影のみ住むくいの家
ありがとう妻にも言える歳になり

幸せと思う八十路の旅の宿

また一人暮敵が減つて秋の風

あれこれと病はあるが花づくり

腰痛に興味と生き方変えてゆく

赤字だと知つてて稲を植えている

奈良市 乾春雄

たそがれて落ち葉が遊ぶ滑り台

くすりより効いた寄せ書き抱いている

垢じみた軍手の中にある野心

誇り捨て見栄捨て橋を渡り切る

引き際が読めず火傷をくり返す

和歌山市 山田侃太

環状線幾度回つた失恋記

水害へ案山子の顔の仁王様

爪先で立つと魔法にかかりそう

黙礼をしてやり過ごすつむじ風

鷹の爪噛んで女が煮えたぎる

和歌山市 根田よしこ

他人事 離婚話に花が咲く

秋雨にちよつと気になる人と逢う

薄化粧なかなかこれが難しい

紅葉狩りいつの間にかやら食べ歩き

意地っ張りごめん母さんそっくりで

和歌山市 柏原夕胡

人間の数だけ罪が咲いている
それぞれの卵が秘めている野心
ストレスの波に吞まれている地球
飾るだけ飾りわたしを見失う
愛されているのにこころ満たされぬ

和歌山県 村中悦男

電話の子笑顔の妻が見えるかな
つなぎめがわからず焦る乱れ糸
母が逝く極楽浄土に行くマスク
いい季節冷暖房はひと休み
憂きことは噂の風にのりやすい

田辺市 大峠可動

自己診断上下があつて詩になる
気合いだけ見せて達磨の目は欠けた
煩惱を抱いて手酌の酒に酔う
一瞬に永遠に命の風に逢う
絶望も希望も性の返り血よ

米子市 小塩智加恵

秋の山猛暑がたたり茸生えず
二人して百五十五 元気です
ペチャパイはおしゃれも金も遠き縁
下ろしたて靴を履いたら腰のびる
地区内の歴史尋ねて秋散歩

鳥取県 橋谷静江

母の焼くサンマの匂い秋一番
ダイエツトしたいが味覚へ取りつかれ
夫の吹く笛で元氣を取りもどす
明日のこと決めて今夜の髪洗う
程合いを知って贅沢できぬ日々

鳥取県 岡村孝明

みそ汁のご飯で達者夢描く
年金に合わせスマート暮らしする
夢を持ち歳のことなど気にしない
あちこちが痛みを告げる下り坂
現ナマに勝るギフトはなさそうだ

倉吉市 前田喜美子

らくらくと生きて果せぬ夢を追う
万物の霊長へ座がきしみ出す
子育てを猿に学べよ若いママ
老い二人我が家はニュース聞くばかり
学芸会オンチも混ざる笛の音に

倉吉市 酒井芙美子

どうしよう もしも泥棒人つたら
こっそりと逃げて失意の胸を抱く
こっそりとへそくり隠す場所さがす
母の声ただ聞くだけで癒される
ことわりのきっかけつかず迷つてる

出雲市 加藤 スズコ

北の国怒りは胸の奥にある
太陽の弾んだ声だ良い余韻
秋が好き包むドラマにいわし雲
きつと咲く深い絆の彼岸花

出雲市 川 島 和歌子

いまここで怒れば負けと腹の虫
年毎に変身しながら生きている
出雲弁 出雲時間で茶をよばれ
母さんの秘密知ってる葉指

雲南市 福 間 博 利

亡父たちと兎追いした山が消え
出かけよう二人を急かすにぎりめし
けつまずくほどの段差ではなかったに
居酒屋に掟やぶった顔ずらり

安来市 原 煩悩児

退職の余命みたいな男郎花
まだまだとおんな演ずる女郎花
間引き菜の香り嬉しい老いの朝
老いてなおうずくものあり運動会

府中市 岩 本 雅 代

虫の声耳を澄ませて手を休め
大根を買えばサンマが目に入る
秋風に柿ののれんがゆらぎ出す
女です逝くまで恋しい人を抱く

唐津市 岩 崎 實

信頼を得るまでたたく土性骨
飛行雲中国行きか伸びていく
秋風と虫の音部屋に迎え入れ
電器店なじめぬ器機の花ざかり

メルボルン 藤 原 ポン吉

リストラで代議士にでもなろうかな
茶柱の立ったお茶飲みやけどする
トラ刈りの母の床屋は賑やかだ
お手伝い不揃いきゅうり子の笑顔

シドニー 三 谷 たん吉

夏バテを味わう夏は過ぎたはず
四季乱れ花鳥虫も迷うだろ
非常食プームの国に舞い降りる
公務員務めた日から楽隠居

シドニー 坂 上 のり子

帰るとこ猫も私もある平和
ペットいて暮らしほどほど和んでる
あやふやな日本語のまま生きてます
娘の失敗待ってみましよう気付くまで

今治市 渡 邊 伊津志

共通の言葉になっっている笑顔
交わってくれる心となる笑顔
踊る手を支える自負のある黒子
噴水に乱反射する幼児性

東かがわ市 向山治延

山ざとの自慢の柿も猿の餌
丘の梅匂いよこせと窓をあけ
山あいの落ちるしずくが大河なす
旧友に声をかけたが名が出ない

高知県 百田 幸

酔っぱらい名刺の顔はどこへやら
バランスをとりあい丸い嫁姑
一輪の花玄関にある温み
良い話今日は空気も澄んでいる

草加市 飯土井 健翁

汗かいた一生だった運も連れ
手入れして庭は見るもの見せるもの
線香の煙の中に妻の顔
耳と足 駄目でも明治目は達者

東京都 井上 つよし

二駅を歩いてやつと万歩計
安売りの店を発見万歩計
九条を守って国が守れるの
トンネルを抜けて深まる秋の色

横浜市 巖田 かず枝

色白は無理と解った美容液
入場券買えるが株は買えません
服のまま寝ようか地震続いている
アスベストやつと表へ出て来たね

横浜市 金森徳三

特急のように古希から喜寿に着く
咳こんでわが家見回すアスベスト
レストラン煙草吸うかとチエツクされ
チャンバラを視ると頭が冴えて来る

横浜市 布山嘉信

クラス会時効と笑う恋仇
甘柿にゴーヤを這わせ對話させ
葉にも毒にもならず生きている
彼岸花墓参促すように咲き

静岡市 中西 雅

木の繁み動くものあり野鳩の眼
言葉尻いつもとられる負け戦
知恵袋開かぬはずだよ茗荷好き
敬老の日 美酒と美食でありがとう

浜松市 杉浦 えむ

やれやれと着いたところが休館日
仏像はどれも誰かに似てみえる
教室でいちばん若い五十肩
しあわせの前には長い列がある

犬山市 吉田 幸子

背伸びした若さ今にも崩れそう
甘酒を注いで民話の里に酔い
カウベルのこだまハイジの里にとけ (スイスの旅 2 巻)
温暖化氷河ちよろちよろ刻む音

犬山市 関 本 かつ子

赤線を引いてページも折る大事

お隣の犬のタクトで起きる朝

冗談が本気になっていくお酒

単線のままでコスモス風に揺れ

愛知県 河 合 ますみ

落胆の手に温かい卵酒

じゅげむじゅげむトンボはとうに逃げました

ツいでなくカーでもなくて意気が合い

見上げればあの日と同じイワシ雲

京都市 榎 本 宏 子

玉露入れあれこれ思う過去未来

わがままでペットの誇り持たぬ犬

謎めいた着物美人の私生活

正直もほどほどにして輪が乱れ

大阪府 高 木 道 子

秋風が地蔵の頭撫で通る

名も知らぬ雑草黙って実をつける

濡れ縁に風あそびせて野良いびき

さわやかな風だひと先ず深呼吸

活断層走る真上に住んでいる

総選挙 小泉風が突っ走り

買い溜めて積んどくだけで満ち足りる

だし巻きが上手に焼けるようになり

大阪市 池 上 清 治

大阪市 平 井 露 芳

部分ボケ合い間に来る五七五

邪魔者は切る剪定の名において

カラオケか映画か迷う金千円

低いのが威張っていいの天保山

大阪市 中 村 忠 敬

ビンのふたあけづらくなり歳を知る

来年も着られるかなと衣替え

糸通しうまくいかずに縫う気失せ

ゴキブリが鳴いたらキッチン喧しい

大阪市 中 村 れんげ

例えばの話すぐのるあわて者

ああうんの君と二人で秋の宵

若作り娘の服を着て出かけ

秋の日のつるべ落としを知らぬ娘等

大阪市 吉 川 弘 泰

筆で書く年賀に一句添えてみる

新年を迎える道具揃えだし

住所録調べて年賀書いている

雑煮椀七十路迎え来年も

大阪市 伏 見 雅 明

やさしさを隠して母は子を叱る

ぐうぐうと聞き分けのない腹の虫

一杯のコーヒーが解くわだかまり

懲りもせず金の成る木の夢を見る

大阪市 平 嶋 美智子

人間はつばさ無くても翔び立てる
重いドア開けて何かを見つけよう
市になって人影もない故郷です
鉛筆も消しゴムも良き相棒だ

大阪市 吉 内 タカ子

敬老の集い嬉しや私語やまず
コスモスも風と遊べる余裕みせ
せい一パイ素直に生きて友ふやす
縄飛びで余裕を作る知恵袋

大阪市 若 月 祐 作

よく食べて瘦せたいために歩く汗
近頃のドラマ命がかかるくなり
早朝の法話かき消す蟬しぐれ
化粧水頬にしっとり朝の風

大阪市 寺 井 弘 子

魅力ある女レモンの香りする
バラサイト ニート乗つかる親の背
国連に掲げる日の丸まだ遠い
韓流にはまり手抜きの手入れ

泉佐野市 稲 葉 洋

儂だつて生き物だから群れ恋し
臓も腑も弱つたけれど生きている
持ち味を生かせば変り者にされ
その内にみんな忘れる身とはなる

泉大津市 助 川 和 美

公園に砂まみれの子見ぬ落葉
万歳とトラが運んだ秋元氣
嫁ぐ娘に母が目標という幸
換氣扇今日もサンマと笑つてる

門真市 矢 阪 英 雄

顧客殿ニース答える心あり
値は高い味で納得至福麵
大量のくらげで波が空に舞う
会席か鍋にするのか幹事殿

河内長野市 木 太 久 正 一

ふる里のほのかに匂う彼岸花
汝は玉 吾は石なり仲間なり
金木犀今年も元氣吾に告げ
国勢調査時代おくれとちがうかな

河内長野市 内 海 綾 乃

盆僧があたふたと来てすぐ帰る
頭の上の眼鏡搜すの暑さほけ
高齢者に値上げラッシュで住みづらい
鼻柱折られ変わるかホリエモン

岸和田市 坂 口 英 雄

見ておれぬ力はないが口貸そう
九条知らず茶髪へそ出し街を行く
有名な天保山はこれですか
父が逝き表札だけは生きている

堺市 羽田野 洋介
さあどつち たばこを止めて酒残す

有り難味薄れるような恩を着せ
体重計増減なしでまずはよし
苦労話そつと隠して和やかに

堺市 荻野 像山

出不精のお酒がすすむ祭りの音
言うてみるもんだ女房へ美しい
愛敬で点を稼いでいるおかめ
葬祭の無情に早い後始末

吹田市 二宮 栄子

秋風に心の鍵をゆさぶられ
人間と地震の怖くなる独り

ぐち混ぜたビールへ笑う仏さん
譲られた席がむずむずこそばゆい

高槻市 安田 忠子

百までは持つと歯医者に誉められる
旨い物食べて料理の腕上げる
人は皆人の力で生かされる
リハビリへ一句もらいに今日も行く

高槻市 住友 佳一郎

瘦せたいと思う願いに金もうけ
富無けりや波風立たぬ親兄弟

山と谷終る事ない夫婦旅
セキュリティー大金出すより吠える犬

豊中市 源田 啓生

明日という枕を抱いて眠りつく
豊漁のサンマで戻す夏疲れ
この夏はミンエーと鳴く蟬だった
カフェオーレの泡に浮かんでいる平和

寝屋川市 北田 ただよし

柩には窓は要らぬと遺しておく
柩には真つ赤なバラを百万本
柩にはモーツアルトを浴びるほど
柩には皆の思い出詰めおいて

寝屋川市 岡本 勲

気配りをしすぎて変に誤解され
衣食足り過ぎて礼節うすれゆく
好物はチャンと食べてるダイエツト
さて今日は何もなければ日記書く

羽曳野市 吉村 久仁雄

近道で花踏みつけてから落ち目
火中の栗素手で拾ってからの運
生きていることの幸せ土瓶蒸し
貸し借りのバランスとつて友でいる

羽曳野市 福田 悦子

冬の絵を画きに来ました道の駅
おかえりと言ってもらえぬ一人居に
花一パイ亡母の写真にある笑顔
ボランティア奉仕は人のためならず

羽曳野市 永田章司

空調も休みが増えたクールビズ
常連の好み女将は暗記済み
レイアウト妻にまかせた台所
人事権譲り人生秋を知る

羽曳野市 松本静子

虫しぐれ秋の気配をしみじみと
もつたない思う私は古いのか
健康と野菜たっぷり食べている
あくびして酸素吸ってる深呼吸

羽曳野市 仲谷真一

あなたの子きつと傑作産みますよ
子に任しあなたの夢は叶うかな
初秋の蚊血は充分に吸わせたる
秋なのに夏と冬とが混在し

東大阪市 佐々木満作

民営化ポストに賛否問うてみる
若者とき合う術を摸索中
栄光も挫折もなめた半生記
古希迎え若づくりして謳歌する

東大阪市 米田水昇

生きざまを残して去った蟬の殻
曼珠沙華白一本は夫かとも
グーヤ切るまないた母の音たてて
門限を決めて自分をセーブする

東大阪市 今岡貞人

降れば文句降らねば文句梅雨の空
晴天と喜び布団干したのに
呼びかけて美人の方へする募金
葉桜になって静かな花の寺

藤井寺市 吉田喜代子

今日もまた逢いに来たのか揚羽蝶
自家菜園どうにもならぬ曲り癖
球根の貰い手決まり空の青
敬老祝嬉しいですが歳も知れ

藤井寺市 俣野登志子

お隣と仲良し同じ花咲かせ
寝惚け眼木犀の香に叱られる
見掛け通り裏も表もないわたし
渋滞に月と夜景が癒し役

枚方市 小川良吉

総理殿両手から票こぼれそう
ハリケーン環境破壊のメッセージ
ダービーも力と運が女神呼ぶ
信仰に力はいらぬ有り難さ

八尾市 中島春江

姿見に腹八分目言い聞かす
焼松茸諦め秋刀魚焼いている
表札に亡夫の名前七回忌
阿呆やなあ笑顔で叱る亡夫恋し

八尾市 平川 幸枝

夢のなか喜怒哀楽が直ぐにでる
鰻屋のうの字が長いノレン押す
波風が立てばたすきを掛ける母
天上の夫へノックをしつつける

大阪府 西川 冷子

柿の実の熊より先と人のちえ
登山者を癒やす泉の冷たかり
暑すぎて虫も育つし茄子盛り
ニート族働く汗も若いうち

神戸市 武田 恵美子

気をつけて単車をなでて走らせる
笑い虫車の中は大ゆれだ
景品につられてでていく愚妻かな
ひさしぶり早起きをして脳体操

神戸市 山田 婦美子

正直に生きて出世も出来ぬまま
生命線計報聞く度細くなる
三文の徳と言わねど目が覚める
二日とは続かぬ空よ秋日和

尼崎市 河津 正治

姿見が相槌を打つ旅支度
里帰り母もご飯もやわらかい
聴く耳を持たぬ天狗の独りぼち
兄弟で机奪った遠い日々

尼崎市 小池 幸子

衣替えミカン色付き四季の国
ひと雨が秋の涼しさ連れて来た
振り返りや色々あつて喜寿の坂
サカナ好き猫も呆れるように食べ

尼崎市 桑原 東園

水中花 汗拭く客をお出迎え
読んでいた本を枕に高軒
好奇心窓から覗く赤蜻蛉
近付いて来た幸せに気が付かぬ

尼崎市 古川 正子

大和路や三輪明神の山静か
彼岸花稲穂の横にきれいです
金木犀はや香り来て秋本番
秋祭り供太鼓の楽しそう

三田市 石原 歳子

げんごつが飛んできそうな雲行きだ
年輪を深く刻んだ知恵袋
輪の中に入って溝のあるを知る
健診の結果を比べ合う夫婦

三田市 辻 開子

娘が嫁ぎさびしさ感じ六十路生き
レモンティー今日のさわやか友と飲む
里の秋土産も旬も山盛りで
月下美人 一夜の香り部屋に置く

兵庫県 黒崎 美紗子

町角で元気でしたかなごむ顔
点滴の落ちるを眺めゆとりの日
少しの利話少しがうますぎる
戸ごとに獅子舞回る秋祭り

兵庫県 岩本 美緒子

呆けぬうちわたし発火す株の売り
キャンパスに見切られ穴が埋められず
テロに発砲うかと出来ない世の移り
テレビ報 玉青翁の死去を知り

西宮市 石野 照代

死ぬまでが賞味期限のわが人生
書道展何て読むのか聞きづらい
人生の余白残らず使いたい
月の夜すこし細めの影法師

西脇市 七反田 順子

亀でいいのそりのそりと見て歩く
斎場でいい人だった耳にする
夏野菜バテたと言ったことがない
ストレスはその場に置いて歩きだす

奈良市 矢野 良一

爆発音人が驚く鳥威し
つくつく法師秋だ秋だとせからしい
野良風がやさしく揺らす秋桜
超おもしろい衆院選というドラマ

生駒市 小西 稔

世の中を極める頃に職おりる
ぜいたくを極めたつけが太りすぎ
かけっこに本気で走る園児たち
世の中のうまいはなしはとげがある

檜原市 藤永 実千代

極めたる人の珠玉の言葉聞く
意気込みが過ぎて物事成り難し
錦繡の大地に心解き放す
こせこせと生きて大地に笑われる

和歌山市 坂部 かずみ

松花堂よりも我家の栗御飯
お日様を取り替え冬の植木鉢
金持ちの上はまだある富裕層
早起きの新聞捲る秋の音

和歌山市 土屋 起世子

ごめんなさい素直な詫びにある勇氣
この先も元気でいたい種を蒔く
栄光の日も語らずに落葉舞う
前向きに行こうコスモス揺れている

和歌山市 たむら あきこ

神さまの手品と思う秋の彩
目を瞑るときの天井どこだろう
酒粕を炙りひとり暖める
消灯へ明日のことは考えぬ

和歌山県 辻内次根

真つ当に生きて赤字が少し出る
溢れるという事はない知識欲
山崩れこだまが去つていった跡
人間へそっくり返つてくる仕打ち

和歌山県 森下よりこ

我慢出来なくなつてから行く歯医者
怒つたり笑つたりわたしの野菜たち
おしゃべりが嫌いで町内会休む
父母夫見送り身軽です わたし

和歌山県 木村徑子

園遊のそぞろ歩きにこぼれ菽
お茶室のただ待ちわびるお正客
トネルは昔を喋る潮の風
ほろほろと地を這う吐息聞いて来る

鳥取市 中宇地秀四

頑固さが可愛くもある祖父の愚痴
賽銭ははずむ何とか頼みます
結果見て好きな事言う評論家
おお恐い貧乏神に褒められた

鳥取市 河田のり代

良い国に老いて嬉しく有難い
あれこれと心配る友に支えられ
元氣かと訪ね人なく文を書く
アルバムの亡母の笑顔に勇気わく

鳥取市 近藤秋星

敬老の日です一日だけ主役
人はみな無から生れて無に還る
かぐや姫になつて嫁いで行つた娘よ
刑務所の増築入所して見たい

鳥取市 山口千代子

若さはいいな地味も破れも愛らしい
虫の声 季節忘れず教えます
そろそろと鍋の出番を喜ばれ
実りの里に熊も獲物を漁り出る

鳥取市 谷岡清子

月見草見たくて里の空仰ぐ
底辺は仲間ばかりで馬があう
祭り笛なつかし里の栗おこわ
虫の声いやされ明日の氣をもらう

鳥取市 岡田信恵

油断した体重計が飛び上がる
車椅子頼り寄り添う命綱
食卓に秋の香りで鍋かこむ
冷えてきた肌にしツクな衣替え

倉吉市 前田三津子

人間は未だに人を食っている
北風が無口な花をなびかせる
ぶら下がるものがいろいろ人の首
食べ合わせ悪いとわかる肥満体

あかつき 川柳会

日 時 1月6日(金) 於 国労大阪会館 14時
兼 題 新鮮 交流 花束
投句先 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102
森村美花

瑞兆のしるしか虹が二連見え
気力なくモップに頼り掃除でき
子供等の笑顔に触れてほっとする
風よ吹け風車の命果てるまで

鳥取県 岩崎和子

雷も天気予報をすっぽかす
勿体ない心持ち味戦中派
機は熟し口八丁が結ぶ縁

鳥取県 毎田信雄

まじないが僕によく効きすぐに癒え
家は熟し口八丁が結ぶ縁
一息を入れるひまなく日がくれる
指先をからませながらくどかれた
家の中いらぬ物が場所を取る
一枝をさして我が家に秋かざる

境港市 遠藤那珂子

ライターとタバコを持って禁煙す
落葉掃きごころうさんとまた落葉
遠回りそれは月との恋だった
解体をしても道路は続きます(道路公園)

境港市 中井虎尾

第25回 川柳塔鹿野みか月川柳大会

日 時 12月4日(日) 午前9時開場
場 所 国民宿舎「山紫苑」大広間
TEL 0857-84-2211

課題と選者 出句締切 11時半

| | | |
|-------|-------|---|
| 「食べる」 | 河内 天笑 | 選 |
| 「とびら」 | 森中恵美子 | 選 |
| 「風」 | 大家 風太 | 選 |
| 「箸」 | 小島 蘭幸 | 選 |
| 「なごり」 | 木本 朱夏 | 選 |
| 「珠」 | 竹治ちかし | 選 |
| 「伏せ字」 | 政岡日枝子 | 選 |

席題なし 各題2句

会 費 2000円(昼食・発表誌・記念品呈)
賞 優秀賞杯(副賞付)ほか

出席者優先とする

前夜祭 12月3日(土) 18時半より

問い合わせ先 中原 諷人

TEL 0857-84-2100

主催 川柳塔鹿野みか月

後援 鳥取県川柳作家協会ほか

第18回 井笠川柳会笠岡誌上大会

薬 ひこばえ

課題 「泡」 「骨」
中田たつお 久保 青花 共選
西原 艶子 泉 佳恵 共選

応募料 1000円(定額小為替) 発表誌送付
応募要領 指定の用紙又は便箋に各題2句
(計4句)を列記。

郵便番号・住所・氏名・電話番号
所属柳社名を明記

締切 12月20日(火)

投句先 〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68

井笠川柳会 宛

TEL 0865-62-6200 FAX 0865-63-6131

賞 品 課題1位には石碑贈呈(2名)
(本人希望句・1年以内建立)

3才に粗品呈(句碑建立者を除く)

主催 井笠川柳会(日川協加盟)

愛染帖

新家 完司 選

和泉市 横山 捷也

米洗う背中妻には見せられぬ

大阪市 小谷 集一

不整脈でしようときめくわけがない

唐津市 仁部 四郎

入院で習うお金の使い方

河内長野市 坂上 淳司

顔付きが悪いと墓に叱られる

東京都 岸野あやめ

苦しんだ日の日記です雨一字

西宮市 門谷たず子

井戸だけが残るわたしの生誕地

三田市 堀 正和

向かい合う大事な椅子が空いたまま

故郷と同じ色した赤トンボ

趣味ひとつ増やし左遷地去る男

海南省 三宅 保州

今日という舞台本日限りです

背もたれがなければもたれもないものを

堺市 志田 千代

年金をもらえる国で生きらるる

アンコールはしない帰りを急ぐから

和歌山市 木本 朱夏

さわやかに種も仕掛けもない若さ

ドライフラワーのように都会が眠っている

羽曳野市 吉村久仁雄

急ぐことは何もないのに五時に起き

川に出てまずは見つめる広い空

札幌市 三浦 強一

幸せな鼻高からず低からず

補聴器でまだ聞き役に徹してる

手を当ててやれば少しは減る痛み

事件あるたびに広げる世界地図

禁煙を勧めてみます秋日和

腹へると涙出てくる戦中派

いい声で他所の赤ちゃん泣いている

階段を踏み外させるプロポーズ

味方にも見せてはならぬ足の裏

猫を抱く女が一人居る飲み屋

土足では孫のマイカーには乗れぬ

今はもう思い出にある伊吹山

験直しいつもと違うポストまで

組板の上でお医者にしっぽ振る

犬にかしずいてゆつくり歳をとる

鳥取市 有沢せつ子

藤井寺市 太田扶美代

八尾市 山本 宏至

交野市 田岡 九好

八王子市 播本 充子

吉川 寿美

奈良市 米田 恭昌

鳥取市 土橋はるお

尼崎市 春城 年代

堺市 羽田野洋介

唐津市 坂本 蜂朗

和歌山市 たむらあきこ

引き寄せた肩を今では揉まされる
(評)引き寄せた責任は最後まで全うしなげればならない。それにしても、歳月は非情

和歌山市 喜田 准一
寝屋川市 籠島 恵子

悪口を言う間にも歳をとる
(評)あつという間に流れ去る二十四時間。愚痴と悪口だけで消え去るのはもったいない。

権原市 辰谷真理子

弁当とお土産付けて見せる芸
(評)同じ芸でも、銭の取れるプロと銭が要るアマ。でも、楽しければいいではないか。

唐津市 岩崎 實

食べきれぬソーメン夏が過ぎていく
(評)山にも行かず海にも行かず、頂戴したソーメンも食べきらず、秋になってしまった。

東大阪市 北村 賢子

いわし雲多くの友が逝きました
(評)あの友この友と過ごした懐かしい日々。思い出のかげらのような雲が浮いている。

和歌山市 横山 捷也
大阪市 小谷 集一
唐津市 仁部 四郎
河内長野市 坂上 淳司
東京都 岸野あやめ
西宮市 門谷たず子
三田市 堀 正和
海南省 三宅 保州
堺市 志田 千代
和歌山市 木本 朱夏
羽曳野市 吉村久仁雄
鳥取市 有沢せつ子
藤井寺市 太田扶美代
八尾市 山本 宏至
交野市 田岡 九好
八王子市 播本 充子
吉川 寿美
奈良市 米田 恭昌
鳥取市 土橋はるお
尼崎市 春城 年代
堺市 羽田野洋介
唐津市 坂本 蜂朗
和歌山市 たむらあきこ

富田林市 大橋 鐘造
勇み足怠け者ではない証拠

八尾市 中島 春江
花婿よ負けてはならぬ初めから

弘前市 高橋 岳水
種明かしするとなんでもない手品

西宮市 坪井 孝一
さりげない会話で探す忘れた名

弘前市 宮崎ヒサ子
あなたの痛み知っているけど踏み込めぬ

今治市 渡邊伊津志
花が好き甘い言葉はもつと好き

奈良市 乾 春雄
拝観料託びてるような仏の目

神戸市 田中 章子
非日常 台風の日の海も好き

和歌山市 古久保和子
五百円玉貯める日使う日ビンの口

富田林市 池 森子
怪気炎あげた日もあるシヤボン玉

豊中市 水野 黒兎
ケータイを耳に貼り付け葱坊主

米子市 政岡日枝子
少しの土にわたくし流の種をまく

八尾市 田邊 浩三
撰ってます黒酢青汁ヨーグルト

堺市 加島 由一
泣かないと誰も振り向いてくれない

倉敷市 井上 富子
ああそうと責任のない馬の耳

弘前市 高瀬 霜石
ストレス解消アンテナを低くする

泉佐野市 稲葉 洋
おばちゃんを目撃談はド迫力

東かがわ市 池内かおり
しあわせな時ほど老母を忘れてる

鳥取市 夏目 一粋
人間のあしたに期待かける月

八尾市 生嶋ますみ
会いたい人にチャンス逃さず会っておく

京都市 高島 啓子
小さい土地の境界線で揉めている

八尾市 村上ミツ子
札束でなぐられたつてノーと言う

堺市 奥 時雄
交叉点对峙するかのようになり立ち

鳥取県 竹信 照彦
だんだんとおくやみ欄の歳になる

松原市 玉置 重人
五つ星ホテルでゴキブリと出合い

弘前市 福士 慕情
池の鯉みんな集めて餌をやる

大阪市 神夏磯典子
目だけが語り合ってる車椅子

鳥取市 徳田ひろこ
文章は下手でも自分史は遺す

橿原市 安土 理恵
吹きガラス魂入れているんだよ

尼崎市 春城武庫坊
天高し風船放しそうになる

唐津市 市丸 晴翠
セールの撃退もしてお留守番

シドニー 坂上のり子
行儀良くトイレに飛んで帰る猫

高槻市 龍本きよし
食器洗う嫁は溜息いつも吐く

吹田市 早泉 早人
想われて想うて開く着メール

西予市 黒田 茂代
合わせ鏡でわたくし裏を見る

鳥取市 土橋 睦子
子守唄歌って聞かす児もいない

尼崎市 山田 耕治
花植えて窓から見てる午後の雨

東京都 清原 悦子
見たままの絶景胸に持ち帰る

池田市 北出 北朗
歩いて走っても月着いてくる

三田市 阪本 藤朗
食べ物もベットも捨てる国がある

米子市 門脇 昴子
ガラス窓笑うまで拭く空は青

鳥取市 土橋 螢
もったいないと落ち穂を拾うお婆さん

大阪市 前 たもつ
マンションで生活音も消して住み

松江市 三島 淞丘
エレベーター乗ればどなたも回れ右

羽曳野市 森下 一知
妻を師匠に台所に立っている

和歌山市 楠見 章子
生きていますと隣へ雨戸開けておく

吹田市 岩屋 美明
老いふたり小津の目になるうろこ雲

交野市 山川日出子
お祝いは決まって祖母がお赤飯

高槻市 傍島 克治
抜擢に妬み僻みが出す

三田市 北野 哲男
栓抜きであけるビールは家がない

池田市 上嶋 幸雀
ゴミ出し日知らせてくれるカラス群

鳥取県 谷口 次男
下手くそに樞の釘を打つ役目

熊本県 岩切 康子
法師蟬 深い淋しさ連れて来た

熊本県 高野 宵草
朝の水ゴクゴク飲める幸せよ

藤井寺市 高田美代子
白萩や今年をそつと振り返る

三田市 石原 歳子
悪筆も和紙のハガキがましにみせ

岡山市 井上柳五郎
欲がまたいらんところで顔を出す

横浜市 長島亜希子
無理したんだろうヘルベス出た登山

鳥取県 石谷美恵子
何回も転んだ人のいい笑顔

尼崎市 長浜 美籠
馴らされて馴れて出られぬ日向水

豊中市 安藤寿美子
失敗はボケてるねんと言つておく

大阪市 津守 柳伸
串かつに行くジーンズを穿きかえて

寝屋川市 北田ただし
夕日見て朝日を想い出せますか

鳥取市 美田 旋風
暮参りへおいでと彼岸花が咲く

今治市 野村 清美
秋茄子の甘みが好きで秋が好き

和歌山市 福本 英子
シャボン玉上手に飛んだ秋日和

堺市 近藤 豊子
吾子の住む関東地方今日も晴

和歌山市 山口三千子
球根の芽に雑草を抜いてやる

鳥取市 西川 和子
痛むからマッケンサンバ唄つてる

堺市 村上 玄也
追い風が義理人情を忘れさせ

米子市 澤田 千春
近よれば嫌いな人も打ち解ける

四條畷市 吉岡 修
ごく稀に大もてをしておのめり込む

富田林市 片岡智恵子
箸紙を結んでからの長談義

大阪府 初山 隆盛
老妻の生れた町の名が変わり

鳥取市 福西 茶子
良妻と言わせて鬱を病んでい

枚方市 海老池 洋
定年後曜日ときどき間違える

和歌山市 玉置 当代
娘が渡米これから二人捻子を巻く

兵庫県 黒崎美紗子
点滴の同じ仲間であう話

西宮市 緒方美津子
指先でこなしています厨事

香芝市 大内 朝子
老いるとは気力も抜けて歯も抜ける

米子市 青戸 田鶴
いとしんだ人を想ってダリア咲く

海南市 谷口 義男
雨以外休まず励むウォーキング

今治市 塩路よしみ
ライバルが前に後ろにいて疲れ

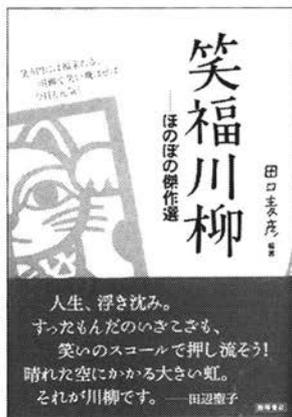
鳥取市 福田 登美
温泉でみんなやさしい顔してる

《最新刊》 田口 麦彦 編著

笑福川柳

ほのぼのの傑作選

46並製 税込一四七〇円送料210円



川柳で笑い飛ばせば今日も元気!

読売新聞西部本社版で連載中の『笑福川柳』欄の入選句からさらに選りすぐった秀句の傑作集です。全部で624の秀句をテーマ別に分類しまとめました。選者である田口麦彦の川柳コラムは7編も載せ、さらに同じ熊本出身の風刺漫画家那須良輔氏を記念した「湯前まんが美術館」主催の「風刺漫画コンクール」入選作をイラストとして使用しました。立体的で充実した川柳書です。

《好評発売中》 田口 麦彦
楽しみながら上手くなる

穴埋め川柳練習帳

現在活躍中の川柳作家の秀句を例題に、キーワードを埋め字することで自然と川柳が上達する本。
クイズを解く楽しみと川柳が上達する喜びを同時に手に入れることができます。

46並製 税込一六八〇円送料210円

川柳表現辞典

現代川柳の秀句六九二七句、見出し語一五四二語をあげて語の意味等説明。表現の方法と技術を示した

田口麦彦 46上製箱入
税込三五七〇円送料210円

現代川柳入門

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を現代の言葉で例句をあげて説明。実作者への入門書

田口麦彦46上製カバ
税込一九八〇円送料210円

川柳技法入門

川柳上達の技法を九二五句の引例で説明。一句の完成までの推敲添削他 風刺・ユーモア・比喩等の方法

田口麦彦46上製カバ
税込一九八〇円送料210円

時事川柳入門

現在を17音で切りとる諧謔精神の表現方法やサラリマン川柳の即興性など、九五三句の例句で説明

田口麦彦46上製カバ
税込一八三五円送料210円

ご購入はお近くの書店か直接小社まで・各書の内容見本進呈

〒112-0002 東京都文京区小石川1-16-1 飯塚書店 TEL 03-3815-3805 www.iizukabooks.com
FAX 03-3815-3810 振替 00130-6-13014

誹風柳多留——一篇研究 4

清 贊。

22 観音にふらついて居て目立也 都

伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦・山口由昭

小栗清吾

清 博美

20 花の山やくらの跡へ塔を立 山田

伊吹 江戸の桜の名所のひとつの上野のお山。慶長ころは藤堂高虎の屋敷があつたが、寛永年間に東叡山寛永寺が建立された。すなわち城槽の跡へ堂塔を建築した。

萬を引きぬいてさくらを植るなり 二一九
山口 贊。上野は伊賀上野から来た名だといふ説もあるが、現在の伊賀上野にも広小路という地名がある。

清 贊。

21 中しやうぎ御後の出ぬ斗なり 鳥口

伊吹 中将棋は、「室町時代から行われる古

い将棋の一つ。盤面は縦横各十二目、駒数が九十二枚ある。駒は取捨てで、とつたものを再び用いることはできない。現在も行われる。〔日国〕である。

現在一般に将棋といわれているものの駒数は四十枚であるから、比較すれば格段に駒数もその種類も多い。それで王将や竜王、麒麟、獅子などはあるものの、お後の駒だけが無いというものである。

ちなみに西洋将棋のチェスには、キングもあればクイーンもある。

中将碁後の駒がないばかり 八一—18

中将碁覚えて居るか相手なし 二四—14

増田 贊。将棋を将碁と書くのは、初期の俳諧のころから大変に多く、慣用的なものである。

伊吹 観音は、浅草寺の観世音菩薩。これから吉原へ行くところなのであろう。まだ日の暮れまで少し時間があるので、観音さまの境内をぶらぶらと歩いて時間潰しをする。

目的を持って歩いている人たちが多いので、吉原組は目立つのである。

くわんおんを道くさにする面白さ 一四—28

とつちがついでか浅草と吉原 四二—22

山口 贊。参詣ではないのだから目立つ。吉原行きさの仕度も。

小栗 贊。きんきんもので。

清 贊。山口・小栗両氏の補説是非必要。

23 あつさりとした八大屋の松かざり 喜朝

伊吹 大屋からたんごぶ程なか、見もち

明三—天二

と大屋は、地主・家持の代理として町屋敷を管理する単なる差配人であるから、万事において地味で始末屋である。だから門松も、質素なものである。

すきくわの入らない柵を大屋たて

安四仁 4

大屋からおのをもちいぬまつを立テ

安八義 2

増田 賛。なにはともあれ、各戸に松を立ててくれはする。

小栗 礎説は「大屋というものは始末屋なので、自分の門松も質素なものを立てる」という意によめるが、類句には「大屋が店子に配った松かざりがケチなものだ」と解すると辻褄が合う句が多い。主題句はいずれであろうか。私の趣味としては、増田説の如く、大屋がくれた松飾りに対する店子の寸評ととりたののだが……。

柵とおもへハこうはらと長屋い、

安六天 2

清 同右。「なんデエ、つまらねエ門松をくれやがって」。

24 品川のほたけ一日なけて居る

鯉紅

伊吹 品川は、伊達綱宗公の下屋敷があった芝白金猿町の袖が崎。ほたけ（火焚）は、輪祭りのこと。鍛冶・鋳物師・石工など輪を取扱う職業の者は、十一月八日に輪祭りを行った。「その家より蜜柑を投うつ。群童、争ひ

てこれを拾ふ」と『俳諧歳時記菜草』の「吹き革祭」の項にある。遊女高尾を三つ又で吊るし切りにした綱宗は、下屋敷で蟄居のかたわら刀鍛冶に憂き身をやつした、と古川柳などではする。伊達公が行う輪祭りであるから、その投げる蜜柑の数も多く、一日投げていただろうとの想像句。

袖か崎ほたけに蜜柑御買い上ケ 四四一

増田 賛。袖が崎が袖が浦かについて、私は以前に袖が浦が正しいと書いた。袖が崎は五反田の方、袖が浦は大井の方に、どちらも品川に実在したが、綱宗が隠居した地は袖が浦の方で、今もJR大井町駅の近くに仙台坂の名が残っている。川柳子には、目黒や御殿山などの名所で袖が崎の方がなじみの名なのであろう。

なお綱宗が刀を鍛えたのは本当のようで、『甲子夜話』にも作刀の逸話がある。

小栗 賛。増田氏解説の通りである。綱宗が逼塞したのは、大井村の下屋敷（かの海晏寺の隣り）らしいが、白金にも屋敷があったので、川柳作者にしてみれば、その辺は適当なのだろう。

清 賛。

25 松葉屋はついでに買ふさくら艸 蘆松

伊吹 松葉屋は、吉原江戸町一丁目目の角にあった妓楼。対々という語を辞書で見付け得なかったが、対の禿という語があるから、二人禿のために対の鉢植の桜草を買ったのだろう。例句と同じく、松と花の結び。

花の外には松葉やへ行になり 二〇三

山田 松葉屋は大店だから花魁も多い。その禿一人一対がそれぞれ桜草を買うのである。

小栗 賛。それだけの句と思う。

清 同右。

26 春の買ものたと隣からなだめ

五連

伊吹 息子も考えられなくはないが、恐らく亭主であろう。十二月十七、十八日の浅草の歳の市から吉原へと繰り込んだ亭主。帰ってくる案の定喧嘩となった。それで隣の住人が「まあまあ歳の市と言えば、正月用品の春の買物だから、そう荒立てないで」となだめに入る。

きげんよくしな正月のかいものだ 一八四

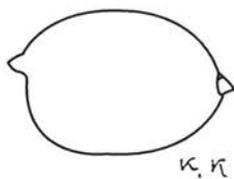
清 賛。

年の市の買い物から吉原へそれてしまふのも、川柳の約束の一つ。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「名簿」 仁部 四郎 選

要る時にどこかへいつている名簿
出雲大社の名簿に載っていない我が子
ああ母校寄付の時だけ来る手紙
まっさきに我が名を探す寄付名簿
金高で字幅が違う寄付名簿
旧姓があつて領き合う名簿
ガリ版の名簿に褪せぬ恋がある
マドンナの真横に僕がいる名簿
名簿には載つてなかった人と飲み
受信料の未納リストで吠えている
名簿からもれた自分に覚悟する
だんだんにあちらで友の待つ名簿
あいうえお教師名簿を諳んじる
名簿順だったら東大受かるのに
名簿から逃げたつもの青テント
くじ引きで名簿に載つた自治会長

| | | |
|-------|--------|----|
| 京都市 | 高島 | 啓子 |
| 堺市 | 加島 | 由一 |
| 鳥取県 | 吉田 | 弘子 |
| 三田市 | 上垣キヨミ | |
| 大阪市 | 近藤 | 正 |
| 三田市 | 北野 | 哲男 |
| 浜松市 | 杉浦 | えむ |
| 尼崎市 | 田辺 | 鹿太 |
| 東大阪市 | 西村 | 哲夫 |
| 四條畷市 | 吉岡 | 修 |
| 弘前市 | 相馬 | 銀波 |
| 和歌山市 | たむらあきこ | |
| 弘前市 | 福士 | 慕情 |
| 東かがわ市 | 池内かおり | |
| 三田市 | 白井 | 二英 |
| 岸和田市 | 坂口 | 英雄 |

「名簿」 藤田 泰子 選

つつしんで名簿干して原爆忌
大好きな人と並んでいる名簿
鳩尾にブラックリスト持つ女
竹馬の友名簿から孵化してきそう
亡き人の名簿を入れるシュレッター
紳士録にまだ載っている七回忌
名簿には鬼籍へ発つた跡がある
セピア色の名簿を出すと散るさくら
愛憎はもはや彼方の古名簿
移民史の名簿に祖父を見つけたり
現況届きびしい貌をする名簿
異分子もひとり混じっている名簿
名簿には幽霊の名ものせてある
ああ母校寄付の時だけ来る手紙
学歴詐称名簿は嘘を吐きません
役職をはずすと名簿読みやすい

| | | |
|------|-------|----|
| 唐津市 | 樋口 | 輝夫 |
| 権原市 | 居谷真理子 | |
| 東京都 | 岸野あやめ | |
| 鳥取市 | 夏目 | 一粋 |
| 大阪市 | 川原 | 章久 |
| 和歌山市 | 福本 | 英子 |
| 大阪市 | 伏見 | 雅明 |
| 寝屋川市 | 籠島 | 恵子 |
| 交野市 | 田岡 | 九好 |
| 和歌山県 | 三宅 | 保州 |
| 藤井寺市 | 高田美代子 | |
| 鳥取市 | 徳田ひろこ | |
| 堺市 | 志田 | 千代 |
| 鳥取県 | 吉田 | 弘子 |
| 高槻市 | 乙倉 | 武史 |
| 三田市 | 久保田千代 | |

名簿より若く見ると役回り

東大阪市 中岡 妙

見本だけで顧客名簿に組み込まれ

唐津市 井上 勝視

脇役のリストにあつたわたしの名

西子市 黒田 茂代

名簿流出はくはなんにも困らない

弘前市 高瀬 霜石

肩書きの要らぬ名簿が温かい

堺市 石堂 潤子

役職をはずすと名簿読みやすい

三田市 久保田千代

十歳は鯖読んでおく客リスト

犬山市 金子美千代

極楽の名簿を見れば妻がいる

川西市 西内 朋月

保護法の施行に悩むクラス会

横浜市 巖田かず枝

折つては細る戦友会名簿

尼崎市 春城武庫坊

カルチャーの名簿はピンで止めてある

東大阪市 谷口 義

名簿から抜け出しそれからの自由

富田林市 池 森子

赤紙の名簿に帰らない息子

松原市 玉置 重人

風邪ぐらいで名簿消されてなるものか

大阪市 前 たもつ

老人会いつまで残る男女別

寝屋川市 北田たよし

カタカナの死亡者日本人らしき

和歌山市 三宅 保州

卒業名簿国を動かす卵抱く

熊本市 永田 俊子

年賀状それが今年の住所録

三田市 堀 正和

群れたがるそして名簿が出来上がる

大阪府 神野千恵子

回覧板の名簿にポチのお母さん

和歌山市 楠見 章子

名簿から漏れたくなくておべんちゃら

鳥取県 谷口 次男

難病に名を連ねてる控訴審

大和高田市 鍛原 千里

撤兵の名簿の案はないはずだ

軸吟

名簿に泳ぎ続けた束ね髪

富田林市 片岡智恵子

まつ黒に君の名を消し絶つ未練

奈良県 渡辺 富子

思い出をいろいろ孕んでいる名簿

西宮市 西口いわゑ

高額所得に載つたことがない名簿

米子市 白根 ふみ

幽霊の名簿で金が行き来する

富田林市 大橋 鐘造

新手詐欺古名簿から弾が飛ぶ

大阪市 岩崎 公誠

どこでどう洩れた奇妙なメール来る

シドニー 坂上りのり子

政治家の名簿裏から読んでいる

浜松市 杉浦 えむ

群れたがるそして名簿が出来上がる

大阪府 神野千恵子

台帳にはくが裸で載っている

和歌山県 辻内 次根

棒線二本わたしもいずれ消されます

橿原市 安土 理恵

名簿から二人が消えた十二月

東大阪市 谷口 義

名簿から脱けてあなたの妻になる

藤井寺市 太田扶美代

名簿から抜け出しそれからの自由

富田林市 池 森子

出雲大社の名簿に載つてない我が子

堺市 加島 由一

受信料の未納リストで吠えている

四條畷市 吉岡 修

老人会いつまで残る男女別

寝屋川市 北田たよし

名簿流出はくはなんにも困らない

弘前市 高瀬 霜石

極楽の名簿を見れば妻がいる

川西市 西内 朋月

同窓名簿長寿さびしく置いてかれ

熊本県 高野 宵草

名簿からぼつりぼつりと散る椿

米子市 野坂 なみ

埋み火のチロチロ燃ゆる名簿なり

西宮市 山本 義子

ばら色の名簿を開くクリスマス

軸吟

鐘

山本 正光選



野良の背へ時計がわりに響く鐘
教会の鐘でカッパルでき上がり
温暖化警鐘鳴らすカトリーナ
一年をしめてきれいな鐘が鳴る
肩車夕陽におされ寺の鐘
尼寺の鐘は優雅な音で鳴る
国のため弾にもなった寺の鐘
坊さんの撞く鐘の音はやはりプロ
寺の娘もチャペルの鐘の虹の中
初舞台早鐘を打つ幕の袖
鐘一打はんのを消す音で鳴る
晩秋の鐘奈良ではの詩も生れ
あの人と会えば鳴りだす胸の鐘
常夏へ日本脱出除夜の鐘
無人寺鐘も無言で人を恋う
司会者の胸に飛び付く鐘三つ
知恩院の鐘の重さをつと
大和路の夕焼け鐘の音が映える
永遠を誓うチャペルの鐘が鳴る
核のない未来に向けて鐘を撞く
修羅いくつ抜けて平和の鐘鳴らす
寺町に住んで鐘の音聞き分ける

百合早子 昌鼓 晴翠 虹汀 彩子 志洋 美代子 幸雀 恭昌 あずま 喜子 一風 美明 盛夫 育子 一知 英子 正雄 さらり 岳水 碧 和重

八月の鐘の余韻にきく鳴咽
野良婦り画布にのせたい鐘の音
天主堂の鐘はみどりの色で鳴る
鐘を撞くしほし仏になる心
梵鐘の余韻少女の胸疼く
鎮魂の鐘は哀しく風に乗る
百八の自戒に祈り鐘をつく
夫婦して今年も無事に鐘を聞く
一つずつ煩惱を消す鐘ひびく
勤行の鐘は痺れる足で聞く
秋雨に淋しさつのる寺の鐘
鐘を撞く棄てたい過去が一つある
胸の鐘冷やかに鳴る置手紙
団体が着いて賑やか三井の鐘
鐘のなる丘を知ってる世代です
佳

権悟 悦男 俣子 鐘造 充子 慕情 黒兔 智加恵 康子 淳司 銀波 善信 富子 哲代 かおり 螢 まみ子 (編) 洋 アキ 照彦 雄々 寿美 正畑半寛 天 軸

詫びて済むことではないとクビになる
そうやなど言うが反省しない顔
反省はそっちだ僕は納税者
反省の晩年杖が離せない
自立への足引っぱった母の悔い
追伸に筆を惜しんだ悔い一つ
反省をゆつくり洗う仕舞風呂
反省のポーズだけして丸く生き
ありのまま言つて反省ひとつする
よくもまあ反省謝罪の種尽きぬ
三軒目までは覚えていたのだが
同じ轍踏まない道を選っている
四コマ目いつも足許拘われる
ぜんざいに塩足すほどの自己批判
我武者羅に生きて反省する間なく
反省は夜まで持たたぬネオンの灯
反省へ鏡も伏せた日の自虐
足踏み鏡の打率素振りくり返す
昨年も来年こそはと書いたはず
ごみになる物今日もまた買いました
ジャンケンに勝ったことまで悔やまれる
したり顔していた頃が恥ずかしい

かおり 登美代 修 可住 幸子 柳弘 強一 たず子 悦子 のり子 浩三 ヒデオ あずま 北朗 一粹 あずま 雄々 銀波 キヨミ 章子 扶美代 徑子

反 省

塔 寛子選



謝罪文マニユアルもある社長室
お仕置の夕飯抜きに泣くこぶし
反省文書いてるうちに腹が立ち
高年の登山無事とは言うもの
反省はしても行く道曲げられぬ
言葉の裏読めと心の傷が言う
今までの歩幅の数を悔いている

反省を知らぬ大人が子を叱る
錦秋に染めて反省する猛暑
反省をしての賛成票かしら
惜敗をくやし涙でかえりみる
反省のつもりかトップだけ替わり
謝罪して反省しない国らしい
あんなこと言ってしまった別れ際
毒舌の逃げ場を探すふところ手

答案の隅っこに描く達磨の絵
お片付け下手な自分が嫌いです
禁酒とは書かず一合だけと書き
秘書一人反省役に置いておく
反省の茶髪夜学の灯をたすね

反省はしましたまたも議員です

総懺悔すればみどりになる地球
天 許して下さい傷つけながら生きてます

つまるところ反省ですか愚痴ですか

章 かつ子
時 雄
幸 雀
昌 鼓
俊 子
孝 一
秀 四
照 彦
秋 星
岳 水
美 明
早 人
盛 夫
螢

霜 石
あやめ
百合子
四 郎
権 悟

藤 朗

次 根

出口セツ子

終わり

坪井 孝一選



時間だけ終りないよと進んでる
スリラーの終わりから読む悪い癖
コールドで終わった背にも拍手あび
いい人と言われて切れた赤い糸
二つ三つ蓄積してバラが枯れ
せいっぱい笑顔添えて締め括る
勇退の花道花の散るように
終ること考えないで今生きる

一つ終りまた新しい出会いでき
終電車遊び疲れてない人も
ライバルと最後は握手できるかな
人生の幕へ言いたいありがとう
終わりまで聞いてと愚痴る里帰り
終わりにには笑う自信を胸に秘め
通帳の残高夢を終わらせる
お開きが今か今かと下戸の膝
人生を記号のように終止符を
ラブゲーム終りにしようきりがない
エピソードとかく男は背伸びする
終電車なんか乗りたくない夜道
寸劇の終わりにいつも君がいる
終章に書きたい言葉補足する

故郷はバスの終点から五キロ (花) 順子

さよならもあつけられかんのEメール 水笑

こぼれ萩女ざかりは昨日まで 理恵

終わらない話を無理に終らせる あやめ

最後には妻を信じる他はない 重人

恋の終わりとつくりに知ってる花時計 千里

自分史の終わりに書こうありがとう 遠野

終わりには最後の火花打ち上げる 三喜夫

このままでは終らぬ意地を持つている 准一

今日過ごし明日を持つてる夢枕 (若) 和子

結末のそれから先の裏話 愛論

実らないままです終った花の思慕 アキ

終章はラインダンスで賑やかに きらり

終わる日が分かれれば今日を惜しむたら 智加恵

終りなき道で見つけた夢ひとつ 悦子

佳

もう済んだ恋かもしれぬすれ違ひ 善信

狂うたら終りよバラもわたくしも 朝子

いつからか終りない道歩いている ミツ子

土壇場になると女の底力 かおり

まだここでヒリオド打てぬサスペンス 登美代

人

末席に正論があり終らない (備) 輝夫

一つずつラストへ捨てる欲の数 あずき

天

一日を丸い笑顔で締めくくる 武本 碧

軸

フルートが冴える少女の終楽章

初歩教室

題一 早い

三宅保州

自分の心を投入した句を!

ご投句の「マラソンの野口選手の世界」を一例として、作者が傍観者では報告句になり勝ちで、作者の思いを込めた作句をと訴えさせていただきます。故橋高薫風先生は「自分の心を投入し、自身の人生の軌跡を書きとめてほしい」と述べられています。先生この教えを胸に、自分が存在する句を心掛けたいものです。そして、「水が溶けたら春になる」という感性で作句したいものです。例えば「マラソンのゴール前でもこの早さ」「野口選手のサインがほしい万歩計」とでも作れば少しでも作者の気持ちが入ります。

マラソンが出て行き暇なスタジアム 邦雄

【添削・批評句】

原 餅まきは早い者勝ちで暮とじ 順子

中八・下四でリズムが悪い。五・七・五に。

添 餅撒きのアツという間に拾われる

原 早いから必ず良いとは限らない 真一
中八。具体的に詠みたい。例えば。

添 早いから良いとは限らない仕事

原 静けさや早くも虫の声しきり サキ子

原 原則的に「や」などの切れ字は使いません。

添 いち早く秋を知らせてくれる虫

原 早足で歩く男に有る魅力 弘子

早足に対して「歩く」は省略出来ます。

添 早足の男に何となく魅力

原 早い目に来てもお役に立たぬ年 象山

添 老人会定刻前に皆揃い

原 バーゲン品つかむ早さで里が知れ みち代

添 「里が知れ」は蔑視的なきらい。

添 バーゲン品掴む早さは自信あり

原 三月の予定にババはもうオモチャ (節) 子

添 「三月」と今の時期が分からなくなり動く。

添 おめでたと言われた途端おもちゃ買う

原 逃げ足の早いお金を引きとめる 満子

川柳眼としては引き止められぬ詠み方に。

添 逃げ足の早い諭吉にかなわな

原 早ければ早い程よいガン治療 秀四

添 典型的な説明句になっています。

添 早ければ治せていたと言われても

原 三文はいらんと布団またかぶり 浩三

ユーマアがあるが「早い」から離れ気味。

添 早起きは三文よりも得があり
原 早朝に話聞き夢うつつ 忠子

添 組板の音で起こしてくる妻

原 満月もやがては欠ける季の移り (燭) 節子

添 満月ももう明日には欠けはじめ

原 早くても自慢にならん食時間 れんげ

添 早食いは何も自慢にならないが

原 細いの早喰競走一番だ 水昇

添 大食いはいちばんなのに痩せている

原 早いナー貴方が朝に弱いのみね代

添 朝起きの妻に頭が上がらない

原 妻に背を見せる早さに治りたい 清

原 早いこと南天の実が鳥が食べ 夕カ子

添 南天の実を早々と食べる鳥

原 のど元を過ぎれば神仏忘れ去る 道子

添 喉元を過ぎて神仏忘れられ

原 早く起き多忙な朝を邪魔する児 孝明

添 早起きの児らと朝から戦争だ

原 三才だが早く話せる我が娘 綾乃

添 もうとてもおしやまに話す三歳児

原 パンクする早く早くと産院へ 美恵子

添 予定より早い産気へ救急車

原 早い足ついていけない立止まる 那珂子

添 世の中の早さについてゆけません

原 落選の先生早い次期選挙 智加恵

添落選にめげず早くも次期狙い

原 決勝点一斉に向くママカメラ 冷子

添 一着をママのカメラは逃さない

原 スピード化ギブアップする運転士 徑子

添 運転士もついでゆけないスピード化

原 早いもの卒寿が近くなりけり 信雄

添 アツという間に卒寿とはなりにけり

原 早く起き子供に云われてしぶしぶと 雅代

添 早起きの子どもにいつも起こされる

原 スピーチは短かく早く終わりたい 千華

添 早く終わった祝辞に万雷の拍手

原 泣き虫もニキビ面して声変わり キヨミ

添 昨日まで泣いていた児も声変わり

原 旬の物早い目に食べ生命のび 俊子

添 言い伝え守って早く旬を食べ

原 関西はエスカレーターも早足で 洋子

添 土地柄かエスカレーター駆ける人

原 早々と十一月に書く賀状 (白) 信子

添 早々と十一月は同義「訳あつて」とかに。

原 早寝早起き家訓に添って五十年 (柑) 信子

添 五十年は動くので「共白髪」とかに。

原 女医さんが測ると脈が早くなり 好

添 面白いが同様の既句があり。もう二工夫。

原 足早に追い越して行くスニーカー のり子

添 足早と追い越しが同義。上五「洗濯を」に。

原 要するに早い話が嫁はしい 昇

下五は「金がない」的な方が繋がるのでは。

原 還暦を過ぎたら早い古稀喜寿 松風

添 下四なので喜寿を「傘寿」にしたい。

原 目覚ましよりも早く目覚める若女性 つよし

添 妻いつも目覚ましよりも早く起き

原 子育てに早く早くといふ度言ひ 萌

添 子育てに早くくしなさい繰り返す

原 もどかしい早い話と言ひながら 孔一

添 回りくどい早い話と言ひながら

原 約束の時間早めに来てる友 イセ

添 約束よりいつも早めに来てる友

原 宇宙旅早くしたいと小銭貯め こずえ

添 早く行きたい宇宙旅行へ小銭貯め

原 いつからか目覚まし役を頼まれる 雅明

添 家族中の目覚まし役を頼まれる

原 開票を始めたたとたん当確者 亜希子

添 開票の途端当選確実者

原 エレベーター早すぎるのに身が縮み 藤朗

添 早すぎるエレベーターに身が縮む

原 月下美人一夜の命いさぎよし ミヨノ

添 月下美人一夜の命いさぎよし

原 砂時計時の早さに知るいのち 映子

添 砂時計にいのちの早さ思い知る

原 手早さが取り柄の人の感じころ 政子

原 早さより旅情味わうフルムーン 章司

原 世の中の早い流れに目がまわる 稔

原 早道を行けば蹟く石ばかり 起世子

添 こだわりは早く捨てろと影法師 (小) 和子

原 早過ぎる切り札風に飛ばされる 幸雀

添 早期発見出来て命が重くなる

原 もう給料日かと今月も言う社長 幸

添 歳とると地球回るの早すぎる 武

原 早朝の空気が好きな万歩計 益子

添 ゴキブリを素早く叩く妻という 千代子

原 早朝に元気をくれるものもんだ 寅次郎

添 早やばと賀状に添える彩を選る 早人

原 早いから心配になるーR 利子

添 早口のお喋りいずれ風となる 正和

原 早出しのゴミへカラスのお出迎え たによし

添 呑み込みが早く忘れるのも早い 百合子

原 冬將軍早く来るには及ばない 奥時雄

添 二句とも川柳眼の諷刺がよく効いている。 近藤秋星

原 早起きの夫と暮らす朝寝坊 坂部かずみ

添 対比の妙に川柳独特の微笑をさせられる。

原 【私の句】

もうボーイフレンド出来た幼稚園

ほかの課はどうなのですかすぐやる課

秀句鑑賞

同人吟 土橋 螢

—11月号から

逃げてゆく秋を追いかけながら、今年も川柳塔まつりに参加させていただきました。よ

き先輩や柳友に仲よくしていただき、川柳をやつていてよかった、と感謝しています。

柳歴は公務員(鹿野町役場)退職の時から、二十年になりますが、いつも初心にかえり、エンジンがかかるように心掛けています。書道も続けていますのでトレーニングの時々川柳の題を一つ半紙に書いて書の練習をしていると、無心の中からイメージが浮かんできます。そんな作句態度でよろしいものかともみんな仲間がいい人ばかりで県内の鳥取市・倉吉市まで例会句座に顔を出して教えてもらっています。

今回川柳塔の編集部から同人吟の秀句鑑賞をと命令が出ました。とてもいい句ばかりでどれが秀句に当たるのかよく解りませんが、私の好きな句ということで二十句列挙しました。じっくりと鑑賞してみてください。そして自分の句とくらべてみてください。

四コマの漫画の中に僕がいた

津川 紫晃

さすが今月の巻頭句「僕がいた」と気がついていたら漫画の中だった。夢まぼろしの人の世に生きていたよこびを感じた句、あしたも明後日も四コマの中にあるように。

お土産は豆腐ちくわと決めてある

石谷 美恵子

最近豆乳とか豆腐とかが、血液さらさら食品として見なおされているとか。特に豆腐竹輪とあご竹輪は鳥取うまれと聞いています。日本海の名産あご竹輪と鳥取の豆腐竹輪をお土産に観光宣伝とはおそれいました。

死んで下さいと福祉が削られる

軸丸 勝巳

郵政民営化、社会保障改革の鎧の下で、少子高齢化の「高齢者」の福祉が削られるのが見えてきた感じです。それでも人のため、世のため、この歳になるまで尽してきた日本の重鎮である。削られても貧乏を知っている平和愛好の老人力がある。頑張ろう。

本当の愛が別れてから解る

加藤 茶人

単純明解、結婚して離婚さびしくなって恋愛、再婚、いろんな道がある。他人同士が愛し合って、夫婦になっても別れがある。「本当の愛」とは何か。もつと大事にしておけばよかったと思う。

雲行きの怪しいときは動かない

松本 よしえ

「静中動」静かに自分を見つめて動かない。一片の雲ある故に天高し 下村非文
そして秋を惜しむ女がひとり何かをしようと待ち構えている。大いなる天空を指さして。

常識を連れて歩けば肩が凝る

森 茂美

普通の人になって歩いても肩が凝る。自然に任せる身の熟しができる人だから大丈夫。平生往生の人生だから時には常識を逸脱して遊ぶのも、長生きの方法かも知れぬと教えられました。

朝露に光る桔梗の息づかい

石原 淑子

「桔梗の息づかい」に余韻を残した感性がすばらしいと思う。客観写生に花を愛する女性の性が朝露に濡れて光っている一瞬。よろこびにあふれている。

考えるために時どき立ち止まる

井上勝 視

バスカルの「考える葦」の言葉を思い出す。「人間は自然の中で最も弱い葦の一茎にすぎない。それは考える葦である」として思考する人間の本質に例えた。人間として悩むために生まれてきたのだから、五七五でも考えよう。

苦勞する男を陰で支えたい

池内 かおり

当り前の事だと思いがその当り前の大事を忘れてる。男でない人が強くなったのに男は苦勞している。黙って陰で支えたい姿勢を忘れないようにしたいものです。女は女らしく。男は苦勞するのはあたり前ですよ。

合併はしてもやっぱり過疎は過疎

小川 てるみ

合併したらよくなるだろうと期待して過疎地域は編入合併とか吸収合併とか。合併条件や合併の約束があっても、過疎は過疎ですねえ。サービスが悪い市役所の支所を冷たい風が拭き抜けてゆきます。私も町民でなく市民になりました。時事吟として鑑賞。

津軽残照やがて墨絵の冬景色

福士 慕情

「津軽残照」なんとよく響く七音。それに

「日本海慕情」男の中の男が陰る墨絵の冬の景。頭がさがります。二〇〇五年もやがて終り二〇〇六年も佳い年でありませうように。

友達の数は大いに誇るべし

西出 楓 楽

川柳塔まつり、大変お世話さまでした。同人総会で同人と誌友の数を聞きました。その数は皆友達である。皆に支えられ仲よくしていただき、生きていてよかつたと思つて。鹿野みか月も四十二士、書研の友だち五十五士、トレーニングに精出しています。

結論を先に言うたら味が無い

岩崎 公 誠

結論を先に言うおはなしもあるが順々と解説して終りに拍手してもらうのが普通である。

ストライキするとやさしい夫になる

石堂 潤 子

あまり不貞ないでください。

もみじ葉はらり宇宙から来た手紙

山本 希久子

紅葉落葉枯葉も小宇宙の季節のたより。

目の前にまさかの人が立っている

大谷 篤 子

生存競争の人の世に生まれ、不老不死といえども夢まぼろし。まさかと驚くような人とのめぐり逢いは大切なさだめであると思つて。

幸運の使者か。

人さまに傷つけぬよう爪を切る

藤田 泰 子

「爪で拾つて箕で零す」と例えがあるように傷つけることも美しく飾ることもできる。爪を切ることを礼儀と心得ているらしい。

背の青い魚を嫌い抜いて秋

鴨谷 瑠美子

九月十月は青い魚の旬、秋鯖鱒鮭鱈食わず嫌いにならずに食べて心臓壁血管を強くしましょう。健康第一青い魚も旬も食べましょう。

中学生みたいにカットして貰う

森 茜

髪型の型もころも青春謳歌いいですねえ。肝心な時だ鉛筆とがらせる

長浜 美 籠

HですかBですか几帳面な人はいつも鉛筆を研いでいる。さびしがり屋と暇な女は洗濯好きでいつも鉛筆を削っている。そしていつでも五七五に挑戦できる。うらやましいことです。また教えてください川柳の手解きを。

ビッグニュース、鹿野小学校六年生の田中

拓広君（同じ集落）二〇〇五国民文化祭福

井で文部科学大臣奨励賞

恐竜もほくらと同じ地球の子 田中拓広
校長先生も担任の先生もお父さんお母さんも
川柳塔鹿野みか月もわたくしもバンザイだ。

—水煙抄

秀句鑑賞

—11月号から

島 ひかる

立山も紅葉真つ盛りの中、十一月号水煙抄
八三四句をじっくり鑑賞させていただきます、共
感を覚え川柳味のある句を選びました。
種を蒔く罪を帳消しするように

片山 忠

さすが巻頭句しみじみと作者の人生観が伝
わって来ます。他の五句にも川柳の三要素の
「うがち」「おかしみ」「軽み」が上手く表現
されている佳句揃い。

子のいない友へうっかり孫自慢

三浦 強 一

子供のいない友達には子の話をしないよう
にしても可愛い孫の話を、ついポロリと
出るのは私ばかりでないようですね。

住職が知らぬあの世の話する

中字地 秀 四

まるであの世を見て来たかのようにする法
話に戒められている善男善女が目につかぶ。

不便さに慣れて田舎も好きになる

山根 邦代

姉の汗混じって届く無農薬

二宮 栄子

住めば都、自然に親しみ無農薬の天地の恵
みを頂く最高の贅沢、最近田舎も見直され
ていきます。

移り行く時の流れが早過ぎる

高山 清子

特に川柳を楽しむようになってから何箇所
かへ投句、句会、句会報、大会と過ごすうち
に移りゆく四季に一年の早さを感じます。

留守電の赤子力チカとして無言

坂上 のり子

再生ボタンを押すと無言、「ア」か「ウ」
でも言っておけば良いのにと友にほやいた事
がある。すると、或る日「ア」で切れていた。
声の主と大笑いになった実感句。

浅漬けが出てご馳走を締めくくる

伏見 雅明

どんなに美味しいご馳走が出て最後は漬
物ですね、鮎屋でも必ず漬物で上がりの私。

ぬかるみの中でもがいている野心

佐甲 昭二

成就するかしないか、野心がぬかるみの中
でもがいているとは一興。

途中下車日本だんだん広くなる

伊藤 郁夫

普通車で駅弁つづく一人旅

池田 岩夫

青春キップや鉄道記念日にJ-Rは普通専用
のキップを発売している。上手に利用して途
中下車で見聞を広めると自分の世界が広が
ります。旅先での駅弁もまた楽しいものでは
ない。

戦争と平和歩んできた命

備後 三代子

平和な今だからこそ、成さねばならぬ事
があるのではないのか、と考えさせられました。

おめでたが続き懐寒くなる

友に逢う前にアルバム出して見る

石原 歳子

少々懐が寒くなっても、金は天下の回りも
の幸せを実感されていることと思えます。
作者の優しさと心使いに敬服。

激辛のジョークも愛だなと思う

加藤 権悟

暴力になってしまった愛の鞭

許し合う笑顔で愛を見つめ合い

金森 徳三

母の日にやさしくされる嫁の愛

渡邊 伊津志

あらためて

閉会のことば

仁部 四郎

山陽新幹線、福岡市地下鉄、JR筑肥線と乗り継いで四時間半あまり、唐津に着くまでの車中で、第11回川柳塔まつりのことをいろいろ考えた。帰宅して机の周囲を見わたしたら、「川柳塔」の906号が露出している。第8回川柳塔まつりの特集号である。

平成14年は、9月3日に大腸ガンが発見されて間髪を入れずともいうように手術を受けた年であった。川柳塔まつりは、いわばドタキャンで会計方にもずいぶん御迷惑をかけた。その年の5月の臨時同人総会では、継続審議になっていた人事問題に結論が出て、私も副主幹に選任されていた年であったから手術は、まことに「痛い」ことであった。

2002年の第37期川柳塔社同人総会には98名の出席があり、各賞表彰・記念句会には252名の参加が記録されている。2005年の数字はそれにくらべると落ちるのは残念である。

さて、記念句会の閉会の挨拶を担当したのだが、「長い」ものはダメだと思いつながら今年になってからのあれこれを考えているうちに、30秒ぐらいは長くなってしまった。そうしておいてこの稿を書くのは、同人総会と『川柳塔』の読者をつなぐ一助になればと思つてのことではある。

1月29日に、初めて各地川柳会代表者会が開かれている。同人・誌友の高齢化、特に誌友の減少が憂慮されることから、元気を盛り返す工夫も交換したいということで代表者会が開催されたことであった。

4月に、橋高薫風先生が亡くなられたことは、特に精神的に大きな痛手となった。7月の追悼会には他の柳社の人々を加えて220名の集まりがあった。

8月号から、表紙の絵の担当が直原玉青先生から前田尋先生にかわったことは、直原玉青先生が9月に天寿を全うされたことと思ひ合わせるとまことにいい形で交替であったと思う。直原玉青先生は全国紙にも計報が出たお方で、「川柳塔」の誌上で、しかるべき時期にしかるべく紹介してもらいたいものである。

「樺樓抄」は、橋高薫風先生に因んでの名付けで9月号から発足したが、初年度の選者

の一人に指名されて、毎月「お白洲」に曳き出されているような緊張感を覚えている。新機軸のために努力する所存である。

三宅保州さんのお力で「川柳しませんか」が発刊されたことはとても素晴らしいことで、川柳塔人口の拡大に大いに役立つにちがいない。ほんとうに御苦労さまでした。

同人総会で、規約改正が提案、承認されて主幹と理事長が選挙を経て選任されることになった。文芸の結社でも、そのようなかたちで組織の近代化が図られることは大いに結構なことだ、財政問題も厳しい情勢にあることだし、常任理事会や同人総会の役割がますます大きくなっていく。

川柳塔は、たしかに新しい段階に入ろうとしている。今年は、その一年めであろうと私は思う。閉会の挨拶で、そのことを申し述べたつもりであった。

川柳塔の同人になって20年ぐらになる。唐津のメンバーにも交替はあったが、西尾菜橋高薫風、高杉鬼遊、櫻谷寿馬、山本規不風、藤村メ女の諸先生の足跡が残っている。想い出をいかしながら、一人でも二人でも新しい仲間と唐津も活動していきたいと思うことしきりである。

時代をつかむ

井上桂作

川柳は人間の機微を詠う文学であり、諷刺詩でもあります。その中でも社会諷刺・時事批判という一面は、俗に時事川柳と呼ばれている分野です。ところが時事川柳は現在の川柳界では、傍流としての存在になりつつあります。川柳は人間諷刺だけでなく、広く社会諷刺を楽しまなければ、文芸としての価値はなくなりません。もちろん人間諷刺も時事批判もユーモア・諷刺という点では通底します。

川柳は俳句と異なり季語・切れ字などの約束事にこだわらず、森羅万象すべてを題材にします。主として口語を用い簡潔・滑稽・機知・諷刺などを特徴とする十七音字定型の短詩型文芸です。川柳は人情の世界・行住座臥日常生活の営みのなから俗世を見出そうとするところに真骨頂があります。いずれにしても時事的な問題をその作品活動の中で重要視しています。

時事川柳は、諷刺性を色濃く持っているの

で、変わっていく時代の流れを後世に書き留めておく文芸として貴重な存在になります。時間が変わっていくにしがたがって人間の思考も移っていくのは事実です。そのつまるところは権力の批判となって、時代の制約を受けることになります。封建社会の江戸時代では、ご政道批判は決して許されず、選者にしても後難を恐れて政治的禁句とおぼしきものは入選させませんでした。

時事という言葉は広辞苑によれば、「その時起こったことを社会事象として解釈する」としています。江戸時代は武士にしろ、町人にしろ自由な解釈の許される社会構造ではなかったのに古川柳（柳多留初編）にみえる次の句はよく引用されています。

役人の子にはぎにぎをよくおぼえ
役人の骨つばいは猪牙に乗せ

赤ん坊が手を握ったり開いたりする仕事を、役人の袖のした（取賄）にかけています。当時お役人は、役得で賄賂をつかまされることが多かったのです。その子も自然にぎにぎを覚えたのでしょう。あとの句は、硬骨な役人は猪牙船に乗せて吉原遊郭に送り込み供応で落とそうとする皮肉で、後にはこの種の川柳は許されませんでした。

時事川柳はその時代の代弁者です。時代の干渉を正面から浴びながらも、命と引き換え

の川柳となったのが鶴彬の次の句です。

手と足をもいだ丸太にしてかえし
出征の門標あつてがらんどうの小店

戦時中に堂々と反戦句を発表した鶴彬は、この作品によって官憲に検挙され、若くして獄死しています。もちろん雑誌「川柳人」も発売禁止におこまれ、暗い時代に入ります。

川柳が俳諧から派生した江戸中期には、時代の制約をうけてか時事川柳は陰を潜め、代りに愉快な詠史川柳が山ほど作られています。だが、ほとんど無記名だったそうです。江戸川柳興隆期の句は、掛詞・縁語・韻字などの修辭が豊かで文学的風趣に富んでいました。

明治新川柳の運動以後は、歴史上の事件や人物を詠んだ句はほとんど作られていません。その後日露戦争のころからしだいに時事川柳が盛んになり、それらは現在では詠史川柳として多くの作品が残されています。

消える川柳と言われる時事川柳は、その時の社会的な事象であって、時間の経過と共に過去のものとなっていきます。人間はもともと忘れっぽい動物で短期間で忘れれます。

『忘却とは忘れ去ることなり』の言葉とおりに忘れやすいので、たやすく生きられるという側面もあります。時事川柳の歴史性から考えると、その時代に生きた者は時代を証言する権利があり、記録する義務があります。



岡本吉太郎さんを偲ぶ

田中正坊

十一月本社句会から帰宅したら岡本家から電話。吉太郎さんが今朝、回生病院で死去という御長男からの知らせであった。行年八十六歳。激動の大正・昭和・平成の三代を生きた生命の火が、また一つ消えた。

吉太郎さんは、大阪市立郡島工業を卒業、池田で家業のミシン針製作の仕事に従事したが、戦争中、二度にわたって召集され、敗戦間際にフィリピンからの帰途、乗っていた輸送船が撃沈され、海に浮かんでいるところを救助されたという過酷な戦争体験の持ち主。

南方より命持ち帰り我変る

戦争を生き抜いてきて今を生く

戦後は、田辺ワイテック株式会社に入社、技術者として遠心分離機の製造にあたり、海外へもしばしば出張したという。家庭では、二男一女に恵まれ、六人の孫に囲まれるという平穏な生活であったが、退職後の昭和六十年ころから川柳を始めている。朝日カルチャ

ーセンターを受講するとともに、なにわ柳壇に投句し、豊中のもくせい川柳会、尼崎のいくしま川柳会に参加して作句を楽しんだ。

八十歳を過ぎた頃から次第に体調を崩し、闘病生活を余儀なくされることとなるが、たまたま平成十三年四月、夫人の付き添いで出席したもくせい定例会では、橘高薫風選の自由吟で次の句が秀句に選ばれ、相手を崩して喜んでいたことが記憶に新しい。

何もせず一日過ごし楽し老い

いたって温厚誠実な人柄で、読書・囲碁のほか趣味はなく、これといったエピソードも見当たらず、句集も刊行されなかったが、合同句集や日川協の柳人写真名鑑などには、律儀に参加されている。これらの句集から数句ずつを抜粋して、その句風と故人の生き様を偲びたい。

もくせい合同句集(第二集)

がんにて時代の波に置き去られ

どなたにもどうもですましく
おつとりとすきて歯車かみ合わず

同 (第二集)

スリッパを履く力いる老いとなる
生涯を理想描いて何もせず

五十年まだアメリカの手の中に

同 (第四集)

騙されてばかりどっこい生きている

八十路来て平平凡凡悔いはなし

世の事はおよそのとこで妥協する

全日本柳人写真名鑑(平成五年)

三流で蟻と言われてたかられて

水も人も強く流れて渦となる

同 (平成十年)

時間とはどうしようもない力です

何もかも水に流せるよ!お国

川柳塔八十周年記念合同句集

ドラマ見て泣いて笑って老い二人

無理承知言わねばならぬ時もある

ライバルとの差を長生きで取り返す

妻にだけ毒舌を吐く定年後

一呼吸おいて話せばあんな事

結びに、故人の死生観を詠んだ句。

鐘の音の余韻のように終わりたい

善人そのものだった吉太郎さん、どうか安

らかに眠りください。合掌

全日本川柳誌上大会のご案内

(平成柳多留第11集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(平成柳多留第11集)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(社)全日本川柳協会の権威ある三大大間行事ですので、こぞってご参加ください。

社団法人 全日本川柳協会
会長 今川乱魚

課題と共選者 (各題2句・連記)

「宇宙」 丸山 しげる — 田頭 良子 共選
「川」 横村 華乱 — 牛尾 緑良 共選
「反対」 あきた じゅん — 安永 理石 共選
「哲学」 中澤 恵生 — 小梶 忠雄 共選
「穴」 佐藤 正 — 天根 夢草 共選

第二次選者 板尾 岳人 近江あきら 斎藤 大雄
酒井 路也 塩見 草映

参加費 2000円 (投句料・『平成柳多留』第11集代金含む)
賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞
(社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞・秀作賞 (予定)

締切 平成18年1月31日(火)〈当日消印有効〉
発表・表彰 第30回全日本川柳岩手大会(平成18年6月)
参加方法 参加用紙(雑詠1句)と出句用紙(2通1組)に記入し、
参加費2000円(振替又は小為替)とともに下記へご
送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210

FAX (06) 6352-2433

振替口座 00970-9-3575

第20回 国民文化祭・ふくい2005 (10月29日)

本年度国民文化祭は福井県坂井中学校体育館で開催された。事前投句の高校・一般の部は2812名、小中学生の部は3353名、当日参加は550名。大会各賞は次のとおり。なお小中高校生部の部、野藤英治、国森茜、高田恵梨子さんは、中原諷人氏指導の鳥取市立鹿野中学校の生徒。

◎高校・一般の部

文部科学大臣奨励賞

温泉へ田を植えて行き刈つて行き 香川県 西部 郁代

国民文化祭実行委員会会長賞

汚れてゆくメガネと八月の記憶 兵庫県 尾上 八重

福井県知事賞

胎内で握手してからずつと母 三重県 大野たけお

第二十回国民文化祭福井県実行委員会会長賞

フクイリュウ君はオーロラ見ましたか 福井県 浅川 静子

福井県教育委員会賞

父越えて父を労る太い腕 神奈川県 花井ようこ

坂井町長賞

恐竜はカーブを曲り切れず逝く 奈良県 稲葉 長生

第二十回国民文化祭坂井町実行委員会会長賞

たくましいシャツを洗って恙無い 福井県 雁谷 陽子

坂井町教育委員会賞

原発が大地に問うている未来 石川県 端河 潔

(社)全日本川柳協会会長賞

見えずきて火種ばかりを追うメガネ 兵庫県 金谷 尚

福井県川柳作家連盟会長賞

温泉で羽目を外した影法師 栃木県 常見 一藏

◎小中学生の部

文部科学大臣奨励賞

恐竜もぼくらと同じちきゅうの子 鳥取県 田中 拓広(小6)

国民文化祭実行委員会会長賞

あくしゅはねともだち作るゆうきだよ 岩手県 中村 友香(小4)

福井県知事賞

メガネかけきのうの僕とさよならだ 鳥取県 野藤 英治(中1)

第二十回国民文化祭福井県実行委員会会長賞

メガネから力をもろう視野もろう 鳥取県 国森 茜(中1)

福井県教育委員会賞

握手して心がおる道できた 新潟県 齋藤 舞奈(中1)

坂井町長賞

恐竜は過去と未来の架け橋だ 群馬県 清水奈々美(中2)

第二十回国民文化祭坂井町実行委員会会長賞

いつまでもあくしゅしてておかあさん 群馬県 芝 恵里香(小4)

坂井町教育委員会賞

覗き込むメガネの先の未空間 福井県 宮北 詩織(中3)

(社)全日本川柳協会会長賞

恐竜は歴史をかざる生き物だ 群馬県 松井 翔一(中1)

福井県川柳作家連盟会長賞

恐竜が見ていた空が今はない 鳥取県 高田恵梨子(中2)

本社十一月句会

十一月七日(月)午後一時
アウイーナ大 阪

はや立冬とはとても思えない暖かい好天、快晴の七日、十一月句会は11名の参加により午後一時開場。

今月から暫く昼間の開催とあつて、参加の顔ぶれにも新鮮さ加わる。

はじめに、七月ご逝去の直原玉青画伯(101歳)のご冥福を祈り全員で黙祷を捧げる。この七月号まで実に40年間の長きに亘り『川柳拵』誌の表紙絵を揮毫いただいた直原画伯に対して、河内天笑主幹よりも入選句披露時に改めて謝意が表された。

お話は理事の北野哲男氏。

「趣味は養蜂?」と題して「ミツバチ」と「ハチミツ」について友人はだしの蘊蓄を傾けた。一般的に知られているハチミツとは、家畜のような西洋ミツバチのもので、日本ミツバチは野生。蜜は市販はされてない貴重品。気まぐれでしかも可愛い昆虫とのことで、氏の一年は川柳と共にこの野生の日本ミツバチが、欠くべからざる存在とお見受けした。かのクレオパトラも食用、美容に愛用していた

というハチミツは、日本でも大昔から重用されてきた長い歴史がある。健康ブームで現在大人気のハチミツも、大半は中国製の輸入品で天然ハチミツは非常に少ないが、このミネラル豊富な自然食品をしっかりと摂って、健康な生活をと北野氏の助言。日本ミツバチをこよなく愛してやまないお話にも、目からうろこの楽しく学べた30分であった。

(直樹記)
月間賞は八尾市の宮崎シマ子さんに輝く。
(司会—玄也)(記名—扶美代・恵子)
(受付—瑠美子・昭)(清記—義)

席題「袋」 矢倉 五月選

胃袋が満ちてすやすや寝る赤子
胃袋の中で葉がせめぎあう
笑うた数だけ胃袋空にする
営業用の笑顔ふくろに入れたる
お袋と初めて呼ばれうろたえる
何を入れてもびくともしないお袋さん
重い袋背負い少年塾通い
有難う お袋なら百万遍
ともすれば自分本位の知恵袋
不景気が袋小路でふて寝する
持ちなれた亡夫の写真のある袋
腹の立つ時は袋を大きくし
袋いくつ残す女の翔んだあと
気持ちより中身が欲しいのし袋
行ってきます父さんの出すごみ袋

朝子 千恵子 弥生 寿子 哲男 英子 萬的 直樹 柳弘 きよし たず子 菜月 雅文 美智子 朝子

はやくからポチ袋書き待っている
食べ盛り両手に提げたレジ袋
顔を見て慌てて入れるポチ袋
袋帯今日はおしゃれりやめておこ
袋つめにされた内緒がさわがしい
一食分詰めた袋と桶山へ
知恵袋に詰める話題の新刊書
袋とじの割に大したことはない
土掘つて命を返す種袋
主婦に戻る葱はみ出したレジ袋
袋小路遠くで母の声を聞く
袋とじしたい自分史書き上げる
尿袋下げて初恋語り合う
お宝がいつばい婆ちゃんの袋棚
おふくろとまだ呼ぶ人のいる安堵
世の中の裏も見て来たポチ袋

納豆のたれの袋に腹が立ち
役立たぬほうが良かった砂袋
百均の袋はみ出す新世帯
重すぎた持出し袋おいて逃げ
みかんの袋結婚までは剥いたはず
ばばちゃんも買おうか袋とじの本
パソコンという秘書役の知恵袋
子も孫もみんな我が家の福袋

耕治 萌 月子 能子 富子 いさお 美明 理恵 ダン吉 倫子 見清 天笑 美籠 美籠 瑠美子 五月 欣子 修 孝一 月子 直樹 たず子

恋の残骸つめた袋を抱く夜長

兼題「動く」

山岡富美子選

蟻一匹象を動かす時もある

みつ子

古書店の歴史の風が動き出す

昭

優勝バレードもう来年へ始動する

朝子

ゼンマイで動く時計は宝物

なぎさ

肩書きを脱げば更なる日の動き

弥生

動かすに家中仕切る母達者

集一

動くもの何でも掴むもみじの手

雅明

編棒が止まっていけない愛だろ

睦子

血糖値気にせず箸が動き秋

富保子

ストローを出して動きが鈍くなり

月子

元の場所動き回ってわからない

ルイ子

古時計きつかけあればまだ動く

ひさ乃

掃除機が迫るテコでも動かない

志千代

矢印通り動いて自分見失う

希久子

直導大慈悲のあふれてる動き

茜

かあちゃんか動くとはこりたつ我が家

ばつは

心の動き盗まれそうで目をそらす

洋

考えもせず動きだすくせがある

見清

一人きり家の空気が動かない

萌

目玉だけ動かしている井戸蛙

朋月

ゼンマイで動く私の思考力

アキ

鉛筆を転がし頭動かない

奥五月

壁面の美女禁断の部屋移動する

孝一

妻が叩くと動き出す洗濯機

保州

動かなくなつてから読む説明書

玄也

正義感肩肘張って動かれず

俣子

氷山が動く地球の顔変わる

淳修

背伸びなどするから軸足がぶれる

淳司

雑念を持つと標的揺れ動く

楓楽

金持が貧乏揺すりして御座る

淳司

牛井が袋小路でゆれ動く

直樹

札束にぐらり動いた大巨玉

公誠

動いてる間に知恵がわいてくる

恵子

動かない餌には雑魚も食い付かぬ

光久

どの指に止まるかヤジロベエ揺れる

潤子

じいさんが一日動くだけの酒

耕治

適量の酒で大正まだ動く

はじめ

とりあえず動き出すのは僕の主義

たもつ

棄てないでポンと叩けばまだ動く

いさお

責任をとらない口がよく動く

幸雀

ネット社会キーで暮しが動いてる

天

兼題「芯」

軸

愛情の芯には恋というなさけ

倫子選

核心に触れるとさつと逃げる人

板東

皆無口芯から冷える冬の海

蜚

いいわよと笑った妻の強い芯

雅明

自己主張曲げぬ男の錆びた芯

睦子

行き過ぎて芯の疲れるお節介

鐘造

身こもつて雌しべの芯が強くなり

更紗

政治木枯し芯の芯まで冷えてきた

美代子

母になる自覚を芯に岩田帯

朝子

肩書が取れて芯だけ残つてる

東吉

息子より芯ある嫁がいて安心

富美子

はんなりと芯は見せない京訛

茜

癒し旅芯まで温い露天風呂

柳右子

初対面芯ある人と知る礼儀

正雄

花芯なお渦巻く恋の甘い罠

直樹

芯のない男が昼の酒を呑む

岳人

ふにやふにやの母がどっこい譲らない

一歩

父ちゃんが炊いたご飯に芯がある

玄也

すぐ芯に触れてくるので避けてます

天笑

芯のないお方で意見裏返る

准一

崖つぶち男の芯が燃えてくる

鐘造

太陽と約束がある梨の芯

雅文

妻の乱ご飯にすし芯がある

重人

団欒の芯からずれるお父さん

幸雀

あんたにまかすしんじいことは皆逃げる

蕉子

おだてても芯はゆるさぬ美人ママ

五月

子を家を支え続けた母の芯

春蘭

中年の男の芯を抜く熟女

俣子

ときたまに自分の芯で頭打つ

楓楽

鉛筆の芯とがらせて来た手紙

美明

鉛筆を2日に替え老いてゆく

昭

母さんを芯に円卓花ざかり

更紗

九条を平和の芯にして守る

一歩

兼題「芯」

軸

愛情の芯には恋というなさけ

倫子選

核心に触れるとさつと逃げる人

板東

皆無口芯から冷える冬の海

蜚

いいわよと笑った妻の強い芯

雅明

自己主張曲げぬ男の錆びた芯

睦子

行き過ぎて芯の疲れるお節介

鐘造

身こもつて雌しべの芯が強くなり

更紗

毒のあるコメントだけど芯がある
片意地を張ると鉛筆まで折れる
横波が遠心力へ押し寄せると

ばっは
萬的
寿子

鉛筆の芯で好きな娘を突く

森子

女偏の一字一字に芯がある

保州

可否同数私の芯が問われている

ダン吉

自転する地球の芯がぶれている

天

兼題「絹」

米田 恭昌選

絹石蝨磨いた肌に自負がある

千津子

絹を裂く稽古に励むオペラ歌手

雅明

戦車より駱駝が似合う絹の道

和夫

知覧から絹のマフラー消えた日々

章久

絹まとい冷えた心を温める

篤子

しつとりと絹が女を落ち着かす

いわゑ

絹こしのような男は丸呑みに

シマ子

絹豆腐だけで足りてるコップ酒

アキ

司馬遼の往古を語る絹の道

潤子

シルクロード遼遠の旅ラクダ行く

正雄

まほろばへ夢を運んだ絹の道

則彦

絹の手触りし母をしのんでいるシヨール

理恵

絹ものは知らずに母は野良仕事

五月

絹と木綿何となくまよくやっています

扶美代

シルクとは無縁木綿の似合う妻

朝子

裂帛の絹裂く筈寒稽古

愛論

絹を裂く悲鳴男のチャンスかも
絹を織る蚕のいのち織っている
柔肌へ絹の下着が心地よい
絹張りの傘で雨の日待つている
よく寝ます絹のパジャマのせいかしら
絹着ると私もちよつと粹になる
私に絹もつたつもりという育ち
正絹の袷紗が仕切る野点の美
しまい風呂絹石けんで満ち足りる
繭紡ぐ乙女哀しき野麦坂

扶美代
章子
鐘造
求芽
見清
とし子
朋月
希久子
柳弘
柳伸
いさお

絹豆腐キミにはやはり大吟醸

直樹

ひたすらに蚕は絹の夢を見る

雅文

アルバムにシルクハットの似合う祖父

玄也

すこし乱れて絹の雨降る夜の別れ

弥生

秘め事が指先にある紅絹の裏

愛論

行き倒れシルクのパンツはいていた

千代

何時かいつかは絹で張りたいくもの糸

美代子

恋人の絹の手触りから狂う

富子

新聞僚絹のドレスのチルドレン

天笑

ふしくれた指へシルクは意に背く

柳伸

写楽から抜けた女の絹の肌

柳弘

人間の奢り蚕のいのち着る

楓楽

絹を着て女の性を守り抜く

集一

ひとり寝のわびしさ絹の肌さわり

深雪

経験が浅いねと梅干しの飯

螢

金ささえあれば何とかの浅い知恵

寿美

甘くみた浅瀬に足を掬われる

庸佑

浅知恵と甘く見ていたのが誤算

ダン吉

傷は浅い気楽に言わんといはし

能萌

何気ない言葉の傷も浅からず

房子

足の立つ川でうまうま泳げない

能子

なめていた浅瀬に足も手も取られ

玄也

核心を掴めなかった浅い読み

かりん

浅知恵を出し合いながら共白髪

朱夏

浅学の私に妻の助け舟

鐘造

傷はまだ浅いと庇いあう絆

富美子

人間の浅知恵狼に笑われる

富美子

浅瀬ばかり探る男に覇気がない

理恵

浅瀬には思慮分別の波がしら

森子

浅知恵で渡る世間に壁ばかり

求芽

広く浅く関わり薄いの流行り

千恵子

遮断機を降ろして浅いお付き合い

保州

肩肘を張って浅瀬で溺れる

楓楽

せせらぎへ流してこれは忘れよう

かりん

考えの浅さで梯子ふみはずす

シマ子

友だちも長く浅くのおつき合い

たもつ

浅知恵で妻は難なく切りぬける

扶美代

老いらくの恋だが傷は浅くない

弘風

好きになり浅瀬がいつか深くなり
 浅はかともみられたくないから無口
 浅知恵も口も私が勝つてゐる
 すぐ逃げる構えて浅く座る椅子
 願望の浅いところで浮きあがる
 フォーリング浅いところで分かり合ふ
 浅からぬ縁となつて共白髪

住
 浅瀬でもおほれることがあるのです
 浅くとも胸に無数のかすり傷
 席浅くかけて待つてるガン検査
 浅知恵も時々役に立つてゐる
 浅学の僕を支える電子辞書

人
 浅からぬ縁で破れ傘の中
 地
 浅くとも不使してます指の傷
 天
 覗いたら記憶の壺は浅かった
 軸
 浅そうに見てたがかなり深い恋

兼題「焼く」 河内 天笑選

そないに焼かんかて持てへん持てへん
 嫉妬はほっこり焼いて仲直り
 幕の内決まった位置に玉子焼
 温暖化地球じわじわ焼けてくる
 木枯らしが焼手屋さん連れてくる
 焼けるまで何度も突つかれるお芋

菜月 直樹 幸雀 能子 淳司
 蕉子 寿子 能子 淳司
 いわゑ 扶美代 美明 萌 玄也
 森子 柳右子 見清

さんま焼く九十八円のを二ひき
 タコ焼きをほおける丸い口二つ
 振り向いただけで焼餅焼く彼女
 あのえくぼ煮ても焼いても手に負えぬ
 焼餅も目刺しもうまく焼く妻た
 焼く前に読み返してるラブレター
 風向きを考え芋を焼いている
 ハフと焼芋食べるおばあちゃん
 呆けぬうち燃やしてしまふ古手紙
 好きだとは言えずとこん世話を焼く
 秋は夕暮れナンバキビ焼くにおい
 煮ても焼いても食えぬ男を飼ひならす
 元カレの手紙を焼いてあす嫁ぐ
 手を焼いた息子の世話になる老後
 カードより現金好む焼鳥屋
 駅前で待ったをかけるヤキトリ屋
 火葬場の煙 見ている彼岸花
 善人の骨がきれいに焼け残り
 それぞれの思いを込めて大文字
 町内の世話焼き市議に立つらしい
 夫婦仲焼く氣失せればもうしまし
 煩惱を焼くと仏の顔になる
 パーベキュー傍でベツトが燥いでる
 焼ききたのメロンパンにはすぐ負ける
 するめ焼き任地の月と酌む夜長
 さんま焼く匂いしている青アント
 類焼へ保険が下りて焼け太り

住
 夕焼けを担いで帰る父の鍬

哲男 かりん 幸雀 修
 五月 和夫 岳人 美代子 いさお 尚士 れんげ 比ろ志 光久 千里 富美子 たもつ 鐘造
 朋月 耕治 美明 五月 和夫 岳人 美代子 いさお 尚士 れんげ 比ろ志 光久 千里 富美子 たもつ 鐘造
 朋月 耕治 美明 五月 和夫 岳人 美代子 いさお 尚士 れんげ 比ろ志 光久 千里 富美子 たもつ 鐘造

魂も焼いてくれたら迷わない
 焼き捨てるたびに心がかかる
 泣きながら手紙を焼いたことがある
 年輪の深いところに焼野原

人
 たこ焼きに大阪弁が詰つてる
 地の色少し残してサンマ焼く
 海の色少し残してサンマ焼く
 松茸を焼く路地裏の罪つくり
 夕焼けて別の力が湧いてくる

天
 11月までの本社句会皆出席者は次の通りで
 す。間違ひがありましたら、事務所まで申し
 出て下さい。(順不同)

穴吹尚士 阿萬萬的 石堂潤子 安達はじめ
 石森利昭 稲葉冬葉 岩崎公誠 太田とし子
 榎本舞夢 大内朝子 太田 昭 太田扶美代
 柿花和夫 笠井欣子 鍛原千里 奥田みつ子
 河内天笑 河内月子 河井庸佑 鴨谷瑠美子
 川端一步 吉川寿美 木本朱夏 小泉ひさ乃
 黒田能子 志田千代 玉置重人 古今堂蕉子
 中井アキ 長浜美籠 西内朋月 滝本きよし
 西出楓楽 板東倫子 坊農柳弘 飛水ふりこ
 前たもつ 松原寿子 村上玄也 富山ルイ子
 森 茜 森下愛論 山田耕治 中村れんげ
 宮本かりん 宮本三喜夫 山岡富美子
 吉村一風 米澤俊子 平嶋美智子 (50名)

修 朱夏 泰子 扶美代 潤子 代

老也油壘

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔わかやま吟社（前月分）牛尾 緑良報

子の去った軒の古果がまだぬくい
飾らないことが私のおしゃれです
ほろ酔いで子の条件を呑んでいる
働いた汗ならほんまもんである
ひまわりがおいでよと呼ぶ道の駅
冷や汗はいつもかいてる私です
頃はよし男出番の汗をかき
心にもおしゃれ鏡に諭される
心にもお洒落をしたい辞書を繰る
ご主人のおしゃれ奥さん待たされる
身嗜みほどのおしゃれはつづけます
うつの日におしゃれが気持ひきたてる
出る時はお化けもおしゃれしてほしい
イヤリングを埋めて孫笑ひ
あの世への旅は心におしゃれして
調子に乗り弓をひかれた日の不覚
乱調子の私を包む波の音
彼岸花父の調子知らせてね
二人して調子とつてるヤジロペー

あきこ 夕胡 富美子 保州 よりこ 三喜夫 准一 伶 智三 三男 英子 和 大輪 佐一 ゆたか 寿子 和香 小雪 和子

気を抜けば調子はすぐに狂いだす
老母の声調子良いのか弾んでる
豪邸の軒に孤独の風が吹く
雲掴む話に軒が騒がしい
軒並に誘うて来たのは選挙だけ
軒下の風鈴窓の予感して
止んだのネ軒のしずくを追いな
幹ならば私を枝にしてほしい
時代遅れだらうかおしゃれには見えぬ

川柳藤井寺 高田美代子報

浴びるほど飲んで終電乗りおくれ
熱心な質問浴びて浮かぶ案
一風呂を浴びてビールに癒される
泥浴びる覚悟が出来て言う意見
同じ陽を浴びて名もなき花である
陽を浴びた顔が並んだ新学期
裸一貫一風呂浴びて吾が天下
天秤樺平均とればよい調子
家も屋敷も天秤に乗る遺産分け
残高が足らぬ秤がうるたえる
天秤の左人情右に義理
天秤が計った軽い方の嘘
主婦の目が天秤になる市場カゴ
進学かニートに揺れる天秤樺
八月の波は平和を訴える
幾たびも波乗り越えた母のしわ
戦後六十日本海流波高し
民営化大波小波打ち寄せる

千代子 よしこ さち子 輝子 正博 泰女 克子 順子 緑良 志洋 耕策 史郎 鐘造 扶美代 昭子 龍一 春蘭 雅枝 重人 いさお 一筒 絹子 かつみ 悦子 武義 淳司 アヤ子

夕暮れの波と内緒の話する
流行の波に乗ってるヒロシです
知らん事ないが喋れば波が立つ
ウエーブが起こる阪神勝っている
サーファーにほどよい波が寄せている
政界が波立つ昨日今日あした
チャックした口が波風立てたがる
石と石ひとつ波紋はハワイイまでどく
母と子の波長は合わぬ夏休み
あれ以来ツナミは世界共通語
乗り切つて見ればさざ波ほどの丈
人工の渚で波と戯れる

川柳エスポ（前月分） 山本 三郎報

思いっきり二階の窓を開けて寝る
雑草も窓明り映え艶を増し
新築の窓にわくわくして灯り
里帰りの窓の明りにほっとする
寒い朝窓にいたずら指のあと
瀬戸内の波静かにて窓うらら
快い雀の地鳴き窓際に
窓越しに祖父ウルルン初対面
窓を打つ雨に想い出蘇える
窓を開け目覚めよい朝風を読む
返事はノービシヤリと窓を閉められる
窓という窓明り放ち風を入れ
怒りの目心のまどに映つてる
窓灯りつけて息子の帰る待つ
夜道行く窓の明りにほっとする

みつこ 喜代子 栄一 六點 静子 瑠美子 恵勇 三馬子 絹歌 井竿 婦美枝 誠良 三郎 昭一朗 とし子 ゆき子 よねぞう はつよ 一歩 一幸 みさと れい子 さとし ルイ子 任宥 とよ子 恵美子

小さな手窓からのぞく保育園
窓枠を額縁にした風景画
若い日に窓から見てた夢の跡
錆ついた心の窓の扉開け
窓開けて今日の空気が入れ替える
覗き窓哀しく閉めて極出す
追う妻に逃げる夫は美女が好き
嫁ぐ娘に米炊くコツを母教え
瑞穂の国誇った昔米輸入
靴持つてジイジ追う児が愛らしい
改革の美名老人追い討ちに

サークル檸檬

吉田あずき報

採め事の種は残さぬのが情け
女にも度胸と申すものが要る
残高を知って余命が過ぎ笑う
太陽が好きでみんなが生きている
自分史の余白に抱いている炎
喜びはみな創り出すのですよ
国政も選挙もショーにするテレビ
ご飯だけは残してならぬ戦中派
温かい余韻残して友帰る
父さんの二オイあちこちマーキング
売れ残り見越し定価をつけてます
結論に触れると空気が淀みだす
のこされた命へしがみ付いている
カツとなることも大切だと思っ
お前らにビター一文も残さない
悟られぬようにゆつくり箸を置く

文好 たたよし
純甲 星花
博泉 三枝
晚翔 団地
高栄 さとう子
一炊 義子
光久 あずき
いわざ 希久子
正坊 棲世
千代 たもつ
哲夫 遠野
楓楽 房子
扶美代 昌紀
美籠

季が移る心も移る秋の彩

ローズ川柳会

山崎

君子報

みつ子

食べ馴れた食事やっぱり吾が家よし
月見酒いのち太らす話聞く
正夢になったらこわい宝くじ
ままならぬ命へ今日は今日の夢
無器用に生きた人生悔い少し
こおろぎに背を押されて夏仕舞う
朝食がおいしい今日も生きている
産声が緊張ほぐす朝ほらけ
えんぴつと夢のかなたで遊んでる
美しい答を期待苗植える
そこいらに母のことは零れている
夢だつていいのです人恋し
だんじりの命しらすの子は星に
川柳塔おっぱひ吟社 木村あきら報
真つ直ぐに歩いて過去は振り向かぬ
楯山の道に明るい月も照る
旧式の風が優しい扇風機
二度とない人生命の灯を燃やす
古希過ぎて人という字が解け始め
大切な夫だと思ふ老いてなお
同居する庭に鈴虫くつわ虫
玄関に枝付の栗活けて観る
虫付いて喜んで居る親を見る
口上手傍で聞いているムズがゆい
喜ばすコツを覚えた孫の芸

みつ子 哲子
藍 貴代子
孝一 美籠
いわざ 武庫坊
年 義子
君子 八重子
かおり 八重子
あきら いさむ
賢 よしみ
放任 文仙
輝夫 初恵

佳句地十選 (11月号から)

小川 てるみ

ふるさとを歌えば浮かぶ幾山河
語り継ぐ九条母の心かも
嘘のない夫婦茶碗の笑い声
仏にも鬼にもなれず老いてゆく
カーナビとそこまで煙草買いに行く
海峡をふらりと渡るまつり笛
突風を千切つて遊ぶかさざるま
親馬鹿を描くと私の顔になる
たつぷりと汗の臭いする命
何もかも赦し真つ赤な陽が落ちる

早起きも手持無沙汰の雨の日は
上弦の月に家族の無事祈る
芸のない夫宴席で聞き上手
東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

地下鉄が延びて私鉄と握手する
地下鉄を上がれば潮の匂う街
地下鉄が働き蜂をつめている
無事帰る兵とイラクに向かう兵
拉致家族無事の祈りが届かない
検診も無事に済ませた母子手帳
迷宮入り未だ手掛かりひとつなし
幸せのヒント拾った散歩道
てのひらの上でヒントがよく笑う
朝礼へ天声人語からヒント

治延 寿々女
貞月 秀夫
三重子 秀夫
太郎 三子
ダン吉 敏子
雅文 良子
和子 初太郎
克己

仲直りのヒント笑顔からもらう
その内に猿も携帯首に吊る

魔女ある日目をすり上げて策を練る
思い出をみんな吊るして土用干し

休刊日戸惑う朝のリズム感
母さんのかなきり声がする朝だ
病院前が少しざわさわわ午前五時
お地蔵へ今朝も止まった下駄の音

川柳塔おとり

鈴木 一弘報

停電に昔の暮らし振り返る
ひとり居て電機機の故障困りはて
夫召され一人暮らしも板につき
灼熱の太陽負かす膚となる
運動会たくましく孫一等等だ

たくましく炎天を翔ぶ球児たち
改革の政治総理がたくましい
たくましい前頭葉で乗りこえる
大海にたくましくする波がある

たくましいペンが汚濁の世を照らす
寡婦の身にたくましい手が欲しくなる
たくましさないが気力と意地で生き
たくましく育つてほしい名は猛

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

子育てに失敗したか迷い道
失敗は誰にも言わず胸に秘め
匙加減失敗してもオリジナル
失敗の次のステップ糧にする

シマ子 章久

萬的 あや子

湖風 高尚

和子 愛論

知恵 ヒロ子

道子 一弘

真一 以和方津

艶子 風花

智恵子 信雄

公美枝 久子

失敗へ冷や汗かいて悔いはかり
勝算があり失敗は考えぬ
失敗も勉強になり上を見る
要領が悪く失敗くり返す
生きていく力失敗からもらう
失敗で済まぬ踏切事故起こす

高柳川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

親分が抜けて句会にすぎ間風
天才と言われ育てて普通以下
親不孝墓に詫びて遅すぎる
豊かすぎ孤独な親が多すぎる
親という辛い寂しい文字を抱く
子に見せる背中は何に置いてある
降車時に診察券はあきまへん
勘違い託びて済むこと済まぬこと
勘違い有つてこの世は面白い
ねえあなた肩叩いたらよその人
勘違いだらう美人が会釈する
出無精と云うても酒は買いに行く
出無精もリハビリだけは欠かせない
飲み屋より家でゆつくり差し向かい
出無精もジャンボ籤だけ買っていく
おつとりが好きで妻つたはずなのに
おつとりしてると貰が尻叩く
雨男たまの旅行を雨にする
違う道通つて帰る負けいくさ
ジंकクスも聞き直ればただの運
汗拭けば満足感を風が撫で

和子 鈴枝

弘子 静江

正光 雄々

義一 治三郎

武史 活恵

孝一 石舟

信醉 庸佑

美義 美義

きよし 尚士

かおり 高栄

ブランドのパシヤマであなたの夢を見る
蟬が止み鶯鳴き出す選挙戦
どんじりを歩くと世間よく見える
残照へ落ちる夕日に音がある
逢いたい人を探してまわる赤とんぼ
週三日愚痴も入れているゴミ袋
たこ焼きを食べて浪花の顔になる
シャボン玉の一つがわたくし色でとぶ

翠 洋会(前月分) 谷口 義報

満天の星が笑っているいい日
星空に感謝元気に生きてます
一番星見つけて急ぐ秋彼岸
流れ星友と話が出来ぬまま
一期一会国宝という門くくり
議事堂の門はればれと新議員
果てしなく続く風紋大地の絵
大皿に妻の文句が盛つてある
アホちやうかと言われて笑い合う仲間
同病を相憐れんで四人部屋
一人逝きまた一人逝き減る仲間
ぬるま湯につかり仲間の顔してる
あの仲間この仲間とて友多し
水遊び蝶も仲間を連れてくる
ネクタイをやめて仲間にしてもらう
助け合う同じ釜飯食った仲間
見上げればまだ明月に兔住む
小刀で鉛筆けずる心地よさ
握手した手で農業とすぐわかる

典子 祐作

砂輝守 節子

晴美 美籠

求芽 昭

舞夢 絹子

日の出 千梢

志華子 照子

富子 桃花

尚士 恭昌

蕉子 水昇

曲がり角その時々忍一字
 気が済むまで閑白宣言させてやる
 美人コンクール並の選挙の阿呆らしき
 何不足問われて困る昼の風呂
 晩年の女友達和み合う
 美しい人汗もかかずに美しい
 船場言葉はんなりと聞く細雪

川柳塔唐津

仁部

四郎報

時を得て絢爛豪華彼屋花
 腹八分残りの二分はオヤツです
 庭の木々自生のものも大事にし
 迷い込んだ道で綺麗な野火に遭う
 中華鍋汁も飛び込むかくし味
 身勝手に色即是空読み替える
 曳山の太鼓が供日待つている
 主役の座昨日はそこに見えたはず
 主役にはなれぬ運命のかすみ草
 卒業の後で差がつく出来不出来

川柳ふうもん吟社

夏目

一粋報

嘘を消す嘘にリリーフ欲しくなり
 どんげつを競った友と飲み回る
 自分史へ過去の余罪は伏せておく
 保証人ですねとドスの効いた声
 人の世や忘れることも葉なり
 勇退のカバンに余罪詰めて去り
 人間の顔した鬼が銃向ける
 どんげつで良いバカを演じきる

孝一 石舟 久峰 すみ子 穀子 義 みつ子

晴翠 勝視 正剣 蜂朗 水笑 虹汀 四郎 輝夫 高明

洋々 圭一郎 雅女 無限 一京 志げ緒 昌鼓 美恵子

おお恐いたった七歳大学生
 鉄格子中で余罪がボケて来る
 振りむけば曲った道を歩いてる
 知らぬ間に個人情報盗まれる
 小太鼓にリリーフされる大太鼓
 厚化粧余罪が匂う妻の服
 正令場代打満塁ホームラン
 大物の逮捕余罪にある興味
 おお恐いたかが紐です凶器なり
 ベットまで使い始めた紙オムツ
 アスベスト余罪で会わず顔がない
 お金ほど魔力と魅力おお恐い
 気が付けばリリーフに椅子狙われる
 眉刺つて女余罪をひた隠す
 余罪あることを知ってる証拠品
 名月と時止まらせて語り合う
 ポーナスは何にも勝るリリーフよ
 いもづるのように浮気の余罪出る
 おお恐い静かな声で人を刺す
 這い上がれどんげつきと風に乗る
 コン泥がイモズル式に吐く余罪
 金銭のリリーフ愛を越えてゆく

竹原川柳会

一路報

ころろざしやがて大きな波になる
 ころろざし君も語れよ陽が登る
 富士山に登り高めたころろざし
 ころろざし亡母のとおった道辿る
 ころろざし亀の足でも進んでる

稔 信子 春名 裕子 はるお 秀夫 秀四 喜子 寿子 節子 金祥 千代 一瑤 毅

美雪 房江 孝男 宗明 茂登子 益子 義徳 一粋

蘭幸 敬子 正宏 栄恵 笹舟

無位無冠拙出しにしまった大志
 叩く手が口より早い戦中派
 ご免ねといつも詫びてる蠅叩き
 寅さんが天国でする叩き売り
 刺客なら叩く論戦恐れない
 キーボード叩いて平和訴える
 叩きつけられた言葉にある重さ
 叩かれて一人前になった鉄
 美しい朝焼けなんの前兆か
 お月さま生きたヒントをありがどう
 キラキラと輝く明日が見えてくる
 ふるさとにまだ赤トンボとんでる
 6Bのすべりまあるい詩ころ
 心から書く気になれる墨をする
 時ときは古い漢字も書いている
 婚姻届署名の震え忘れたい
 晩節を汚すエッセイなど書かぬ
 写経する白い心にツクが鳴く
 杖ついてまだ続編を書く元氣

川柳大阪

高木

信酔報

この暑さ美味しくたんとお食べてこそ
 カビ生えた恋文妻に責められる
 へちまの子も花嫁姿は美しい
 守るのが嫌いな夫を支えます
 退け時の美学本気で探す年
 指定席攻めて来たって渡さない
 日本ほど良い国はない平和ボケ
 本気だな拳が固くなっている

力 規代 青居 輝恵 節生 節夫 民恵 半覚 房子 比呂子 千枝 史子 幸子 笑子 慶子 淑子 静風 厚子 一路

タカ子 五月 ひろゑ 修 宏 芳香 章久 ダン吉

本気がよ好きと言つてる目に涙
 まなざしの本気白い矢突き刺さる
 ぶつ壊す今度は本気総理殿
 禁煙した背な颯爽とお父さん
 禁酒したと言つた男を信じよう
 試供品だけで間に合う妻の顔
 九条を本気の本気で守ります
 禁煙は誰のためでもありません
 攻めたけどあの人格に歯がたたず
 おへちやでも丈夫な妻が一番や
 クールビズ男のへそは見たくない
 老いらくの恋は本気に子が慌て
 悪政を見抜かぬ国民良いお国
 禁煙をすすめる医師が愛煙家
 人はかり攻めて淋しい帰り道
 さようなら煙草ライター捨ててくる
 本気で胸の鼓動を聞いてくれ
 へちやなんて分かんぬメールに誘われる
 帰省してホテルの舞いにいやされる
 二本目のビールに浮かぶ肝数值
 チャウチャウが言うにはチンの方がヘチャ
 味のある顔に心が温い人

川柳ささやま

遠山 可住報

根付くまでそつと見守ることにする
 温もりを知らず育つたはぐれ雛
 アルバムの島田振袖いま八十路
 何時の間に抜きさしならぬ仲間入り
 ほつれてはならぬ親子だ深く縫う

純子
 文章子
 美紗子
 靖子

いつわ
 朝子
 東吉
 一風
 利昭
 柳弘
 美花
 かよこ
 柳昌
 司

曾孫のぬくい握手の置きみやげ
 マラソンの抜きつ抜かれつビリ競う
 アルバムの整理が出来て夫逝く
 夕ごはん堅い話は抜きにする
 針仕事うちでは死語になっている
 アルバムを繰れば軍歌が鳴りひびく
 初孫を抱いた温もり祖母になり

多美子
 開子
 かほる
 つや子
 哲男
 可住
 照代

青春の思い出を読む文庫本
 豊かさ慣れて味覚が変り出す
 かなかなに夕げ支度の腰あげる
 定型の煮ても焼いても茄子の帯
 いきいきとケットボールの旗ゆらぐ
 思い切り叩いてみたい寝顔に蚊
 安定剤飲んで結果を聞きに行く

紀乃
 武庫坊
 しづ子
 芳子
 寛之
 宏一
 守弘

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

健康な目覚めに乾杯露を踏む
 言い訳をポツケにしまいい出し忘れ
 いい訳をだまて聞いての煙草盆
 思い出が疼く別れた雨の夜
 言い訳もせず卵はゆでられて
 おおげさな希望いだかぬ蝸牛
 言い訳はよそう門灯の灯が赤い
 百までの希望を捨てた膝小僧

聖子
 惠美子
 好栄
 伸子
 はるみ
 かつ子
 博利
 清泉

ハイチズ子らスナツプに踊り出る
 雨が降るスナツプ写真見て過ぐす
 スナツプで止めゼツケンもシャンとする
 借りきたスナツプ写真一目惚れ
 スナツプに嫌われた指の先
 スナツプの下に小悪魔住みたがる
 中座したスナツプ元に戻らない
 誠実な貌スナツプに華燭の日
 スナツプに生きた証を積みあげる
 寝転んでひとり聴いてる虫の声
 曼珠沙華日日咲き乱れ夢のよう
 思い切り走つてみた膝小僧
 指差しの確認声も歩を合わす
 ちぎり絵を嗜む指を誉めている
 髪を染め化粧たしなみ蝶になる
 嗜みのつもりの芸が身を助け
 ご近所に貰つた木の実たちの念珠
 胡桃割る身知らぬ部屋に入りこむ
 ネットレス木の実の化石かも知れぬ
 森は今木の実たちの旅立ちだ

純子
 幸子
 千恵
 久子
 勝巳
 正子
 昭三
 東園
 年代
 薫

永子
 保子
 宝子
 かつ乃
 実満
 茶子
 孔美子
 諷人
 彩子
 睦子
 武子
 和子
 弘子
 八重
 菊乃
 幸枝
 八重子
 小鹿
 はるお
 みさ子

今日もまた感謝をこめておーいお茶
感謝すりゃ丸くいくのに意地を張り
好きにして感謝しながら生きている
感謝して年金もらう花の月
まだせねばならぬ子供に感謝する
感謝する妻に言の葉選つている
失つてやつと感謝の域に入る
感謝する角度を保つほんのくぼ
おだやかな海に感謝をして眠る
報恩感謝万両の実も赤くなり

尼崎尾浜川柳会

山田 耕治報

控え目に浅い眠りの女郎花
気をもます十七歳がうちにいる
元気かと電話をくれた姉米寿
切り口は浅いが芯までうずく傷
浅学が広辞苑とはお友達
青春の浅瀬に迷う道標
茶もぬるい朝から犬を鳴かして
軽妙なガイドに旅のバスが揺れ
浄土からこの世の乱れ観る阿弥陀
当選で下げる頭も浅くなる
一杯の酒から貰う空元気
人生の浅瀬探しの旅続く
元気だから汗までキラリ光ってる
言い切つて浅はかだった悔い残る
浅いけど深い絆の友と居る
ノーマイクいつも元気をバラ撒いて
同居する貧乏神がまだ元気

節子 房枝 久枝 きみ子 汲香 宣子 公子 盛桜 ひろこ 螢
晴美 よし子 昭三 里江 美代子 亀与子 耕治 正治 きよし 五月 朋月 孝一 比ろ志 江美 桃花 全彦 鹿太

浅からぬ縁を慕う曼珠沙華

美籠

はたる川柳同好会

水野 黒兎報

若者の意を汲みとれぬわが世代
老いた今無料の苦勞買うてます
秋の日を惜しみ紅葉と山に舞う
大洪水ベツトを持って給水車
ハンサムな昔は話せぬ人でした
がんばります昔人間通す人
若造りしてもつい出るドッコイショ
汲みおきの水を金魚に分けてやる
若つくりうなじのしわが歳語る
鏡みて昔を偲ぶ長化粧
原爆は昔でないよ今のこと
昔ならできたと思うあれやこれ
しみじみと友の心情汲む屋台
水汲みの苦勞を知らぬ蛇口です
一日をいとおしむよう生きている
子の心汲んで言わないことにする
出世後は耐えた昔が美化される
埒もない不満昔を恋しがり

川柳茶柱

板山まみ子報

珍しい野菜に困る調理法
ここまでよ手を打って待つ兎の歩み
よく歩く足でこの山知り尽し
足裏が恐ろしく知つて下り坂
足りないといとコースを延ばす万歩計
モンローの背をイメージしハイヒール

百合子 秀水 盛夫 かつ子 百合 百合 まみ子

花道を歩く子役になかなわない
テレビから故郷のテレビを見るビール
二世帯の調査表だす一つ屋根
幸子 美千代 文男

西宮北口川柳会

黒田 能子報

わたくしを替えても影がうなずかぬ
もう君は愛の賛歌を忘れたか
天は二物を与えてくれぬ歌も下手
陽炎に紛れたような恋だった
団体に紛れ儲けた拝観料
気紛れな愛にビリオド打つて秋
紛れもなく指紋の中にある主張
気紛れに輪ゴムを飛ばす雨の午後
多数派に紛れて生きる風見鶏
ネクタイを赤に替えると勝てますか
真夜中に着物を替えるお人形
私はわたし仮面付けても替えられぬ
入れ替えて長い暑さを仕舞い込む
御転婆を優しく替える母子手帳
切り替えるの早さ一足先を行く
風邪を引きますよとマフラー掛けてくれ
亡夫の香のマフラー未だ捨て切れず
子のくれたマフラーせずして逝った夫
亡母の手になったマフラー離せない
愛の尺度まだ保つてるペアマフラー
一針の愛も通じぬマフラー編む
粋なマフラーさりと隠す頸の皺
いらいらを静めてくれる丸い月
今日と違うあしたに向かう靴揃え

いわゑ 昭三 忠 美代子 房枝 比ろ志 美籠 折杭 鹿太 朋月 哲子 富喜子 五月 能子 曙蝶 江美 光子 孝一 開子 いたる 光久 和子

マフラーの編み目とんでる物思い
散る落葉数え男の肚決まる
天職を続けておればある夷り
泣く人がたんと居る間に逝くつもり
アカベラの合唱若い顔になる
夏物を片付け部屋に萩の花

川柳塔なら

坊農 柳弘報

月を愛で悠々と抱く三笠山
琴の音にのせて呼吸を緩うする
琴線に触れる白さよみすゞの詩
悠々と寝ている顔に安堵する
エンジンをはらせながら老いの坂
イチローの巧打好走喰る守備
刈り入れに雀が運ぶササニシキ
歯車が狂い男が米洗う
くず米で育つ丈夫な米屋の子
もう二度と会わない人と夢で会い
寄り添えば水琴窟の澄んだ音
琴爪を隠し忘れた半世紀
米のめし文句は言わん冷や奴
悠々と国道渡るカモの列
産直米農家が汗のメッセージ
悠々の人生だろう白い髭
古都悠々鹿が渡つてゆく芝生
一合の米が命であった時
一人来て風の唸りを聞く岬
琴の調べは嫁ぐ娘のありがとう
尺八と琴が溶けあう父と母

たず子 春蘭 千代 哲男 奮水 歳子
カズ子 蘭香 芳香 弘風 太一 春雄 孝子 茂雄 春蘭 富子 冬葉 千梢 まつお 旦那吉 惠美子 洋子 博一 真理子 一風 章久

減反と知らずレンゲが咲き誇る
神さまにもうら命へ米を研ぐ
赤米を食べて明日香の風になる
百態の風の唸りをきく選挙
旧邸の奥琴の音は幻聴か
日々悠々神にまかせているいのち
銀しやりにフライド捨てた過去がある
琴が流れて白い空気が動かない
米洗うたびにしあわせだと思ふ

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

角とれた石にいつかは背かれる
蹴飛ばした石が今ごろ敵討ち
今日生きる力をもらう朝のパン
石礫石には何の罪も無い
修羅越えてやつと夫婦の歩が揃い
マンネリへ小石をポンと投げ入れる
残された時間をコインランドリー
計画を変え泳ぎ出す向こう岸
燕飛ぶ悩みなき身の軽やかに
独り旅どこか似ている里の秋
寶石に女逃げ道ふさがれる
目の前にないから好きいても好き
石の上何年たつて今のとし
心澄む今九条を読み返す
石積み石が軽い日重たい日
石橋を叩いて渡る男坂
ヘルシーにだけで売れてる通販品
またぎ切れない石につかまり恥をしる

良一 朝子 秋雄 道子 美千子 和夫 隆盛 國治 理恵
直子 浩三 ますみ 幸生 一風 加津子 秋雄 耀一 春蘭 宏至 あかり レイ子 ゲン吉 欣之 柳伸 頂留子 定男

便利さにつられケイタイ持つ不便
受けた矢をやりわり沈める日の闘志
川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報
本当の鍵を握っている寡黙
本当のこのを見ていたダルマの目
条件へ蜜をたつぶり盛っておく
日々ハード生まれるものと死すものと
目と鼻の間に入るにみんな忘れよう
目と鼻の先に住んでも疎遠です
条件を守り通した先祖の灯
条件がひとつ欠けても咲かぬ花
ロボットが生きる条件指図する
無条件妻仕合わせにする覚悟
条件を守らないから採めてます
あなたならついて行きます無条件
いい条件持つて仲人やつてくる
鍵穴の向こうに描いた絵が温い
鍵握る人と出会つてからドラマ
村から街へ鍵ある暮しに慣れました
鍵唾え鳩がどこかへ行きそうだ
引出しの鍵のひとつはまだ温い
介護する身もされる身もハードなり
ハードでも越えねば明日が見えてこぬ
女ひとりハードな風に立ち向かう
青春の試金石だと登る崖
お受験へハードな日課待つ園児
タンチョウにハードな冬をプレゼント
スケジュール過密で嬉しい悲鳴あげ

はじむ 弥生 克子 緑良 夕胡 輝子 大輪 准一 和子 精子 和香 裕美 三喜夫 正博 美子 富美子 伶 和 ゆたか あきこ 保州 英子 寿子 泰女 三男 小雪 千代子

京都塔の会

都倉 求芽報

ブライドがまた有るうちに遺書を書く

鹿 太

遠い日の指切り疼く詩仙堂

ふりこ

露ほどの命をせめて光らそう

欣之

朝露を踏んで夫婦の万歩計

庸 佑

手術室露の命をふと思う

正 坊

露ほどの貯え余命数えてる

満 子

不揃いの露地野菜にもある誇り

宏 子

一粒の露ころがして好きと書く

知 栄

露草に元気をもらう遍路笠

益 子

朝露に濡れてみたい鬼瓦

百合子

定年ではじめて知った朝の露

則 彦

親指に体力つけてきた子供

美 義

パワーまだあると自負して蹴蹴く

きよし

ナンジャモンジャ筆を飲んで風になる

輝 美

よおく寝てここという時出すパワー

啓 子

鉛筆を削れば小学生の匂い

高 栄

鉛筆をころがしたとて出ぬ答

福 子

鉛筆を尖らせて書く抗議文

典 子

鉛筆を削り二の矢を考える

郁 郎

ゆきづまってまた鉛筆を尖らせる

求 芽

鉛筆が言いたいことを言うてくれ

葉 子

鉛筆を削ると生きてみたくなる

和 友

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

赤とんぼ乗せて来たのは童歌

ますみ

乗り切れぬ波に気付いた日のシヨック

能 子

老いたとて乗りはしませんその手口

加津子

九十歳の姉が陣どる専用車

シマ子

胃袋の様子うかがう老いの夏

香 住

絆縫う男の糸は木綿糸

弘 直

いい月夜もつれた糸をときほぐす

慶 子

切れそうな絆断とうか整こうか

あずき

赤い糸わたしが選ぶ着地点

欣史子

トンネルを抜けると風の糸が切れ

喜美子

かわはら川柳会

上田

俊路報

コスモスが顔をそむける今朝の霜

雅 子

霜ふりのステーキ食べる夢を見る

静 子

初霜を頭に入れて農仕事

登 生

おそ霜にじゃがいの芽が怯えてる

余史子

霜来れば大役かかし納屋住まい

悦 子

何となく旨味引き出す霜の精

寿 子

霜降りの二人の髪に乾杯だ

好 道

霜子報野菜畑が眠らせぬ

泰 良

転作にも負けぬ地下足袋霜を踏み

俊 路

むらくも川柳会

毛利

幸 報

大らかでよくよしない傘にいる

幸 子

収穫の陰に親父の汗光る

克 子

おっとり味がしみでるお人柄

美 保

長老の口調はおっとりかみしめる

定 子

くよくよと別れて元氣取り戻す

彰 子

月見酒おっとり酔いし虫の声

安 男

誰に似たおっとり孫をせかす声

信 夫

早とちりせぬが私のボケ防止

蘭 水

煩惱を一つずつ消し蓮ひらく

恵美子

うち水にひぐらしが来て夏暮れる

ます美

一日一日笑い忘れている世相

明 朗

古代蓮荒神谷に咲き誇り

寿

目も耳も歳相応と診察医

昭 子

老々介護後姿が泣いている

ふさえ

何度でも吠いて見せませ再生紙

喜 美

大声で青い山脈歌う午後

瑞 枝

肌合いの違う蝮を引き入れる

秀 夫

さらさらと此の世の花のど真ん中

かずこ

長 柳 会

坂上

淳司報

明日もまた登る坂あり米を研ぐ

一 慧

押し売りも引つ込む妻の大胆さ

幸 雄

定年日姿くらしそいな妻

芳 野

大胆不敵夫が妻に愚痴を言う

和 代

豪邸の友を訪ねてからの鬱

けい子

妻の顔大胆すぎる厚化粧

孝 彦

大胆と天衣無縫を兼ね備え

たけし

火たるまと恫喝している北朝鮮

靖 博

目もくらむ大金動くIT化

史

山坂を幾度越えたちぎれ雲

マ サ

目がくらむほどの辛など望まない

敬 二

登り坂耐えて未来が見えてくる

武 男

老いの坂躊躇する間も過ぎて行く

佐 久 治

スポンサー何時も怒って金くれず

不 一 雄

くらむほど金品持つ男性会わず来て

美 代 子

秋の宵肌を泣かせすみれん坂

明 子

大胆にお臍を見せるギャルミコシ

ひろし

ホリエモン宇宙事業に着手する

輝 子

秋雨にぬれて二人の石だたみ

大胆に木々を染め行く秋模様

大胆に男の料理挑む日日

大胆に虎を狙っている刺客

おばあさんと呼び止められて立ちくらみ

大胆な一筆書きに嫉妬する

人間の奢りへ神も立ちくらみ

靖国へ紆余曲折の九段坂

城北川柳会

吉岡

修報

可能性いっぱい持っている未滿

波瀾万丈そんな運なら楽しそう

台風が目が我が家にもやってきた

人間のエゴを笑っている風

若返り議員の風これからや

草の根はどんな風もまかせん

だんまりを決めて嵐を遣り過す

奥歯だけ僕の嵐を知っている

金持ちになればなるほど洪くなり

おおらかに歳を重ねて洪くなる

腹八分小言八分で水を呑む

ひとつ違いで得なこと損なこと

満願を一つ残して遍路みち

がやがやと来てがやがや帰る見舞客

がやがやと囁さんたちの冬仕度

がやがやと仏の声や鬼の声

こつこつと二人で作る城である

あなたとは往復切符買いません

マンシヨンの窓の一つの灯が消えぬ

もこ

三和子

正一

富美子

正美

正子

和子

淳司

典子

たたよし

昭子

高栄

タカ子

一步

和夫

昭

桂作

千里

とし子

ひさ乃

れい子

たもつ

朝子

修

はじめ

利昭

淑子

打止めの太鼓は神が持っている

會計が洪く追加は自己負担

悪役に嵌ってからの洪さだな

毎日が日曜なのに洪い顔

賛成が半数以下で絵が書けぬ

十八歳未滿この本売りません

及第点未滿でも良い好きは好き

未成年の罪モザイクかけられて

未滿ばかりくすぶり続く恋心

政界の波に乗るにはまだ未滿

未滿ですまだ植山は早すぎる

川柳ねがわ

森

冴える月見せぬ裏側血がたぎり

酒一合僕の五感が冴えてくる

秋風に五感もやつと冴えはじめ

爆笑のスピーチあつと目を覚ます

スピーチの前に油をなめておく

長すぎるスピーチ手頃な子守歌

もう止めると鯛がスピーチ聞いている

長々としゃべり簡単ですがとは

スピーチを頼む主賓が未だこない

お腹の子にも媒酌人の祝辞あり

スピーチの途中で謝礼予想する

スピーチを待ってましたと引き受ける

スピーチも十七音に詰めてくれ

九回裏の逆転信じているファン

大逆転子の逆立ちを父も真似

子に頼る思いもかけぬ紙おむつ

じゅん子

順三

恵子

倫子

求芽

ルイ子

正

萬的

美智子

志華子

重人

茜報

森

たたよし

弘風

洋

典子

朝子

勲

度

一炊

三郎

れい子

弘一

ルイ子

修

頂留子

日出子

九好

逆転のきかぬ地球が喘いでる

逆転の自信で二位を走ってる

逆転を狙ってなんかいない亀

逆転へ裏技一つ持っている

恨まれるほどの出世がしてみたい

恨むのはやめる運命だと思っ

恨まれていいのか毎夜夢に出る

天仰ぎ恨み忘れることにする

恨みごとひとつ言わずに亡母は近き

留守電がたつぷり聞いた恨みごと

恨むなれ私を恨め蛙の子

席ぐわ前に立たれるきこちなさ

長丁場トップに出ない読みがある

仏壇を開けて明月共にする

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

気懸りは母の便りの字の乱れ

母となる日を確と抱く太鼓腹

安産のお守り買って母まぢか

人前は優しい声で叱る母

母になる自覚生まれた母子手帳

名曲に僕もワインも円くなる

モナリザも母も謎たつぷりの笑み

傑作もたまにはあつたわが画歴

傑作は自然の水が造る酒

落書きには見事な筆の跡

傑作も妻の背押しがあつてこそ

一輪のカーネーションに母は泣く

かすみ

忠央

恵子

博泉

集一

さち子

利昭

たもつ

一風

茜

仁清

高栄

庸佑

郁夫

庸佑

吐来

真一

志洋

六點

耕策

みつこ

昭平

アヤ子

かつみ

たけし

一壺

猿杓

泣くもんか再起を期している拳
オギャーから泣いて大きくなる子供
泣き笑いあるから人生面白い
泣き愚子あつて上手に生きている
夜の街女の涙武器にして

女には泣きの一手の武器がある
泣くという切り札持っている強み
腹の虫一夜寝かすも年の功
いつの間に虫鳴く庭となつており
カブト虫高値で買うという時代
本の虫いつしか僕にとりついた
菜園で蝶は憎つくきものと知る
ふらふらの蚊に献血をせがまれる
虫の目に厭な人間多すぎる
運咲きに元気をくれたもつれ蝶

岬川柳会

八十田洞庵報

逃げ腰で父の顔色見つめてる
人生に悲喜こもももの曲がり角
まだ曲がる手足ゆつくり螺子を巻く
おばさんが駐車違反に吠えている
キャンセルし事故まぬがれて今元氣
愛情の深さ信じて無茶を言う
場数踏む自信満々持つマイク
老いてなお恋の火種を抱いている
庭掃除腰痛呼んで老いを知る
老いてなお人恋しさの旅に出る
雑字書うろこ落とした目の笑い
絵手紙の嬉しさ響く里の秋

ダン吉 フジ 悦子 喜久子 久仁子 章司 いさお 一知 美喜 静子 泰子 恵勇 重人 りつえ

さよならをどこで言おうか彼岸花
欲しかった服タイムミングよくセール
はすかいに曲がった奥に悪女居る

川柳塔みちのく

小寺

花菱報

行列のほどでなかつたラーメン屋
肩ポンと叩かれてから策を練る
肩パットはずしてプライベートへと
玉乗りの熊の涙を見てしまふ
肩書きがとれた背中も好きな人
久しぶりまあまあ元氣でグッドバイ
総会でまあまあみんな拍手する
何売ろうとも魂だけは売りますせぬ
魂は売らぬ撫子しゃんと生き
隈とつて歌舞伎の役者らしくなり
まあまあで心の振り動いてる
隈取りの役者見事な見得を切る
肩の荷を下ろしてからの長い道
まあまあの自分史のペン喋り出す
肩を抱いてやる満月のふりをして
売られゆく牛の瞳がぬれている
耳鳴りを聞いた時から重い肩
可も不可もない人生で見る夕日
平成のクマは演歌もジャズも好き
人間に逢いたくなくて出たクマだ
どんぐりの森で親無し熊になる

和美 和子 洞庵 まさ子 千鶴子 真実 朴人 洋子 隼人 ヒサ子 愁女 順風 雅城 花匠 ふさゑ 銀波 黙人 岳水 花峯 慕情 一花 五葉庵

富柳会

池

森子報

決断が微妙に揺れる猫ジャラシ
時々沈黙雄弁を満たす
飯の世に生きて影絵の中にいる
夢いっぱい花一杯か黄泉の国
嫁した娘へ母のセンスのあれやこれ
センス良く決めたらわたし消えました
美しい人の火の粉を浴びている
欠点の一つを武器にするセンス
追えば逃げ逃げれば追ってドラマ済む
老いてなお遊び心にあるセンス
初盆の母に捧げる半殺し
浄土まで見える期待の眼の手術
無口だがこぼれるほどにある情け
ゆるぎないセンス地球の青い彩
折れそうで折れないコスモスのセンス
鶴を折る紙図書館に置いてある
センスよくあなたの彩に染まる秋
かわい子ママのセンスが光つてる
去つてゆく夏を騒いで見送ろう
追憶の彼方に母の森がある
くちづけに恋の確かめ算をする
鬼灯が夕陽と競う赤い夏
団塊の世代世論に左右され
私の意情を追つてくる時計
秋風にワインカラーのハイヒール
がんばれと言わず元氣を出せと言う
私も時計も秋へ傾斜する
先頭の背なを視野から離さない
秋からの招待状が二三枚

浩子 アキラ 鐘造 淳司 和代 冬虹 和子 欣之 彦次 隆彦 高鷲 春蘭 初太郎 赤かり アキ 信雄 紅紫朗 よりこ 扶美代 巳代一 奏子 奈保美 英子 一慧 深雪 宏至 信子 ひろこ 森子

倉吉川柳会

竹信

照彦報

秋の虫さみしがりのやの連れになる

友が逝き明日は我が身が吾亦紅

鈴成りの柿の木腰が低くなる

ひんやりと焼芋恋し秋の風

月芽えて秋の七草虫の声

ルンルンとブラウス秋の色になる

四畳半そこには青い海がある

すぐそこには妻がレビの探してる

そこまでもやるかテレビのリポーター

すみません其処はわたしの指定席

センプリの可憐な花がそこかしこ

そこからの一歩が勇み足になる

消しゴムで消えぬ台風すぐそこに

そこまでと出かけた母が帰らない

トップの足元夥しい死体

露払いの役は受けないことにする

逆立ちをしてもトップにや程速い

トップから受けたバトンにある重み

成績はトップ遅刻の数トップ

トップから一周遅れのトップです

卒業はトップだったが今ニート

平凡が一番好きと言うトップ

あの山に背負って行くが殺さない

さかな釣りさかな何匹ころしたか

殺してすつきり油虫三匹

ゴキブリを足ではなくて手で殺し

首吊ると殺し文句を書いて出た

康子

京子

和子

日出子

喜美子

克枝

賀寿恵

萩江

よしえ

重忠

玲坊

小生

石花菜

螢

幸子

秋草

和枝

次男

泰輔

醉芙蓉

鬼一

完司

龍枝

瑞子

季芳

どの部屋も殺虫剤をおいている
昆虫の墓を作って新学期
アスベスト無言のままで人殺す

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

法師蟬ひときわ森を深くする

目に見えぬ鎖ついでる酒の樽

朝顔が垣根を跨ぎこいといさつ

手術室出たが麻酔がきいてる

跨いで通れぬ広い水溜り

跨いで身になってひときわ目立つ服

跨いだつもり足がひつかかる歳になる

麻酔から覚めたら只のひとだった

リストラに大きな樽も温泉地

正論を吐くとひときわ強い風

幸せの麻酔に弱い缶ビール

酒樽に嵌った蟻が出られない

みそ樽にたつぷり母の味がある

米俵跨ぐな父のどなり声

秋を行く恋の麻酔が解けぬまま

九度盃の麻酔がいまも効いている

ゆつくりとい味になる樽の中

片恋が泡立っている樽の底

いずも川柳会

佐藤 治代報

先頭はグーチョキパーで決められる

袋の中の話題がだんだん減ってくる

知恵袋使いはたして病んでいる

よろこびを袋に詰めて小出しする

勝彦

悠彦

照彦

美ツ千

黙光

くにお

常正

かつみ

天人

天雀

よしえ

龍枝

芳江

陸子

節子

あづま

重忠

螢

ひろこ

修

宣子

治代

佳子

桂子

治代

祐次

じゃんけんばん今朝はあなたがバンを焼く
よろこびを分かち合つてる野の小菊
雑音も少しはしないと座が沸かぬ

雑音を抱え込んでる日本海

満月を入れる袋を編んでいる

大切な母の袋を借りてくる

入れ過ぎた袋の隅が笑い出す

こつそりと笑い袋を覗いて

思い出を詰めた袋がふくれ出す

神さまとじゃんけんしたか一人消え

注がれて飲んで飲んで白状してしまふ

盃を交わし鎖につながれる

嬉しさを袋に入れて温める

喜びが知らず知らず顔に出る

少しづつ袋に風を溜めている

じゃんけんが好きで男を信じない

よろこびがまた一つ増えしわを消す

大盃に月を揺らして一気飲み

箸までがよろこんでいるいい話

じゃんけんで青札出した訳じゃない

雑音が入ると無駄な花が咲く

ふしくれた手に乾杯の音頭とる

笑い袋いっぱいにして今日暮れる

じゃんけんて明日の命は決められぬ

雑音が船のまわりを放れない

盃に映す男の策一つ

川柳塔きやらぼく

生きている証波間に顔を出す

寿美

満江

まこと

佐余

喜子

敬子

歌子

テル子

多喜

玲子

昌枝

久子

幸

多輝子

彬

すみこ

蘭水

沁丘

叮紅

茂美

多賀子

房子

きみえ

文子

章峰

ちかし

福代

天雀報

やえ

突然に無情の風が吹いてくる

伝承館むかしの知事の寄贈部屋

赤とんぼの先から夏が来る

夕映えに蟬が残り夏が行く

スイッチヨのせなにも白い秋の風

天界の情けに迷う花手桶

夏はてというこゝにして義理を欠く

風鈴の音届けたい窓がある

我慢する涙はきれいな色で落ち

生前葬のつもりで臨むお葬式

孫集い束の間の喜び孟蘭盆会

次々と台風だけはうまれくる

ワンタツチの傘でさつさと雨に出る

神さまの仕返しだろ超津波

ユーモアを食べて増やした笑い皺

台風の目玉親父が会いに来る

恩に着ることはかりだな長い道

五分粥のなんと人間らしい味

妖怪の下駄の足音忍び寄る

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

待ち人がとうとう来ない花時計

本物の日本語でつせ大阪弁

妥協せぬ川の流れが変わり出す

六十年前の自由近ごろの不自由

守り継ぐ棚田稲刈りポランテア

波かぶる覚悟もなく丸丸舟

豊作へ立てた案山子も歌いだす

お台所とうとう嫁の匙加減

亜弥

春枝

雪江

ゆき

瑞枝

天雀

蘭

晶子

千代

初枝

那珂子

てい子

なみ

すみえ

玲々子

珍子

日枝子

恵子

おばさんとうとう席を譲られる

本物の恋だとわかる涙あと

本物の男の匂いする背中

師と弟子見分けがつかぬ出来栄えた

朝露に末路は見せぬ彼岸花

その話泡立つビール飲んでから

変換の誤字は機械の知らぬこと

歳重ねとうとう傘寿目の前に

あの人もこの人も立て丸くなる

逆境に立つと大きく見える母

悲しいね弱者強食人世界

秋灯下親しむ老いと広辞苑

ほどほどに根がはってきた嫁ぎ先

茶柱の立つてる湯呑夫に出す

本物が欠伸をしるる貸金庫

人間不信世間を狭く狭く生き

大洗滌怒りの湯気が立つ車列

虎の子をマネーゲームがおびやかす

ほかほかの妻の香りの栗ごはん

三分じゃ嘘を仕立てる暇もなし

百歳がとうとう来たと言うつもり

南大阪川柳会

吉川 寿美報

悟らない方が実入りは良いらしい

悟ったのかあきらめたのかおとなしい

座禅組み悟るにしては腹が空く

群れを出て一人になってから悟る

死期悟りお寿司は時価に決めている

診察料ポクより高い猫と住む

則彦

郁子

尚士

タミ

求芽

啓生

庸佑

慶子

和子

石舟

久太郎

比ろ志

玲子

勇治

早人

萬的

寅次郎

巴子

幸雀

美義

見清

なんぼやと浪速女は値札無視

払うてますシルクロードを見てるから

亡き友の万年筆が元気で

ナイトクルーズ神戸のタワーにあるロマン

シンボルが走りつづけているグリコ

富士の山見えて美感する帰国

美谷液たつぷりつけても消せぬしわ

明日へ夢繫いで今日の灯り消す

日の丸の染み消す道はまだ遠し

嘘消すと僕には何も残らない

消去法イエスマンだけ生き残る

胸の傷時効になるがまだ消えず

我を消せばまわり優しい風になる

欠席するとほかの名前が消えている

持てなしもそのままの座が温い

そのまま自分を晒す夕茜

朝帰りそのまま茶碗伏せてある

そのまますまうつす肌の色

一線を越えそのままのぞかせる

し残しをまだそのままで生きている

本音言えと言われそのまま言っただけ

そのままと優しく口を塞がれる

そのままで嫁いでこいと言われても

ゼロ一つ足すとダイヤが売れました

川柳さんだ

北野 哲男報

伝統の業に磨きかけた壺

低金利壺の諭吉があくびする

騙された壺を大事に持っている

遠野

直子

アキラ

なぎさ

朝子

柳伸

弘子

ひさ乃

楓楽

利昭

柳弘

千梢

志華子

たもつ

タカ子

千里

更紗

弘紗

重人

章久

寿美

シマ子

三男

度

婦美子

五月

朋月

壇の世で骨董市に並ぶ壺
蛸壺のバリアフリーの住心地
出土した壺から転げ出たむかし
立杭焼愛でて丹波の秋日和

丹波路をネットで調べ紅葉狩り
ボタン鍋丹波の冬を暖める
丹波路の風に命の丸洗い

篠山の栄枯盛衰知るお城
お土産は丹波の栗と決めている
女関に友の好きな花そつと活け

いい声ね一曲どうぞお客様
客帰りの虫の声聞く老夫婦
地球からの客に戸惑う月火星

へそくりを猫に見られて所変え
言い分はあります人である限り
捨てられずでも捨てられぬ世代です

脇甘いそこは遺伝とあきらめる
一応は欲無い顔をしています
この指止まれ止まって欲しい人が来ぬ

三幸川柳教室

古久保和子報

通帳紛失騒いだ親を笑えない
生まれても死んでも空騒がしい
泣くわ喚くわ豆台風の夏休み
血が騒ぐ気持ち抑えている拳
理不尽へ旧い男の血が騒ぐ
空騒ぎしては傷つく青りんご
飛び火して大きくなっていく騒ぎ
一万歩に挑むと血糖値が騒ぐ

哲男 昭三 鹿太 茂山 雅司 正和 章子 美代子 里江 開子 一之 歳子 比ろ志 順子 忠 藤朗 二英 義子 みつ子

浮世とや仮面の下の空騒ぎ
振り出しに戻りひとりの炊飯器
原点に戻ると決めてUターン
原点に戻れば父の肩車
産まれ落ちたときは裸であったのに
漂白をすると原点逃げそう
まつり下駄カラコロ私の原点
時かぬ種生えて原点掘り返す
靖国祈りは世界通じない
千羽目の指に祈りを深くする
たまゆらの命へ祈ること多し
累卵の危うき平和への祈り
来客の足許直す子に育ち
昼飯は一山去った客の椅子
ちちははがお客の顔で帰る盆
娘の家へ母はお客になり切れず
泡銭掴んだらしい客が来る
ままごとのようにもてなす孟蘭盆会
掛軸は客に合わせる夏座敷
百均の客はおんなじ匂いする
我もまた歴史の過客ひとり旅

碧 かずみ 武 幸 保州 紀世子 孝義 和子 千秀 信子 イセ 公子 朱夏 昇 一泰 登美代 嘉平 准一 幹子 宏夫 章子 徑子

飢餓の国犬にロースの国もあり
お隣の犬は大事にされている
寄せ鍋の湯気に幸せ立ち上る
あの人達寄るとさわると人の事
近寄るとあなたに吸われそう
橋の上には夜のドラマあり
大雨にゴルフギャラリーあきませず
花帽子年齢不詳が闊歩する
コーヒーが二人の訳を聞いている
泣き笑いほどよく混じり生きている
さりとの道行きつもどおりつ神の道
窓口が猫撫で声の大阪市
改憲で戦する国御免です
棚はたとこれも言えそう千葉ロッテ
マンネリ化してぬるま湯の大阪市
ちよんまげが浮かぶ刺客はどう動く
近所との関わりうすれさそり飼う
世の移り蛇もさそりもベットとは
赤紙がさらっていった老父の青春

蕉子 義 すみ子 舞夢 石舟 千梢 理恵 叡子 孝一 美籠 尚士 正坊 桃花 満作 照子 さと美 みつ子 恭昌 孝惠報

翠洋会

谷口

義報

六十年大死のままの父の墓
不機嫌な女房に犬も距離をおき
こま犬となつて神社を守らされ
戌の日にくたつを出して冬支度
マスコミの鼻は犬ほど嗅ぎつける

富子 昭 日の出 会美 志華子

小糠雨傘と遊んでいる下校
駅伝競走なぜか雨降る意地悪い
雨漏りに鍋もやか人も総動員
秋の雨相合傘にときめいて
雨の雫切つて女はもう泣かぬ
事の無き明日を願えば雨もよし
言い勝つて心の奥に雨が降る
九条が変らぬ進軍ラッパの音

川柳塔打吹

大森

孝惠報

京子 善江 幸子 龍枝 節子 三津子 三ツ千 和枝

進化して宇宙で暮らすときが来る
 這い這いは前へ進まず後すさり
 親抜きで進める拳式出番なし
 ダイエットどころか秋だ食進む
 老眼が進み孫にも頭下け
 難聴が進むと石の地蔵様
 行進曲でも歌って行くか天国に
 ナイアガラ崖は刻々あとすざり
 たらの芽も百合も険しい崖が好き
 崖の上動けぬ高所恐怖症
 崖に立ち上昇気流捕えたい
 終戦を待たず崖から散った花
 崖のふち死ぬかやめるかくじを引く
 人妻と見る崖鼻の彼岸花
 本心は貴女のハート抱いている
 本心を聞いてあの日の謎が解け
 本心を告白したら楽になり
 本心は毒か薬かひがん花
 台風と火事待ってる建材屋
 本心はもう一枚の舌にある
 本心は血の塊で腥い
 本心は秘めて笑顔のおつき合

高知川柳社

川竹

松風報

貴 恵
 久芽代
 義 人
 芙美子
 紀美恵
 重 忠
 克 枝
 玲 坊
 照 彦
 公 恵
 清
 和 子
 友 楽
 螢
 楨 元
 子
 滋
 よしえ
 完 司
 芳 光
 石花菜
 孝 恵

休むこと知らない母の手の輪ゴム
 井戸水で冷やす西瓜が待ち切れず
 肝冷やすお化け屋敷が縁結び
 正論へ冷たい視線飛んできて
 温暖化地球を冷やす水を撒く
 本心は秘めて相槌打っている
 見合写真少し斜めにポーズとる
 斜め読みされて女にある主張
 斜に構え辛口で売る評論家
 袈裟懸けに斬られた傷が疼き出す
 斜めから著つぎつぎと子沢山
 ヘボ将棋角の睨みに気がつかず
 新聞を斜め読みして来た話

岩美川柳社

石谷美恵子報

美 々
 てるみ
 成 美
 則 子
 京 子
 幸
 功
 愛 宏
 圭 二
 孝 雄
 千 鳥
 圭 風
 快 風
 蟹 郎
 完 司
 季 芳
 一 郎
 圭 一
 一 粹
 忠 良
 きみ子
 茶 子
 公 乃
 裕 子
 かつみ
 石花菜
 はるお
 和 枝

命綱巻いて夫婦の息も合う
 巻き戻し利かぬ地点にある人生
 アルバムを繰って青春巻き戻す
 主婦業が手首に輪ゴム離さない
 相槌を打って噂に巻き込まれ
 ハリケーン地球財産巻き込んで
 オリジナル記念に植えた月桂樹
 正直な雀はいつも朗らかだ
 政治家は正直ばかりでは勝てぬ
 酒少しのめば正直者になり
 正直に教えて茸の城とられ
 選挙戦正直言わぬ人が勝つ
 正直に生きたい松が曲げられる
 テレバシーちつとも受けぬ野暮な人

川柳エスポ

山本 三郎報

睦 子
 公 子
 雅 女
 和 子
 節 子
 菖 子
 螢
 よしえ
 孝 男
 一 京
 重 忠
 稔
 たぬ
 美恵子
 三 郎
 三 郎
 博 泉
 みさと
 はつよ
 晩 翔
 一 幸
 とし子
 一 炊
 たたよし
 鈍 甲
 高 栄
 恵美子
 一 幸

親と子の深い絆も会話から
田舎道季節忘れぬ虫の声
謝るのが下手で無口になっていく
健康ランド露天に滝と昼の幸
六十年今も忘れぬ茸雲
腰痛に犬が合わせる散歩道
ひとりごと年がゆくほど多くなり
生きてなお夫の介護に専念し
小樽にて近所の人とすれ違ふ
孫が聞く夢追いかけてどうなるの
ゴッホ展糸すぎの前立ちつくす
この橋は一休和尚だけ渡る
生き様を刻み込んだる靴の裏

川柳塔まつえ吟社 三島 浜丘報

文好 ゆき子 ルイ子 三枝 昭一郎 れい子 よねぞう とよ子 さち子 団地 星花 任有 さとし

矢印へ思い思いの花が咲く
矢印は確認してる助走距離
矢印の果てまで続く向かい風
パソコンの矢印を追う脳のひだ
日本酒がいいよほつぽつ秋の風
閻魔からほつぽつ来いと言うメール
ほつぽつと歩む背中を風が押す
誤魔化しもほつぽつ剥けたクレパス画
アリバイをほつぽつ風に問いつめる
終章のドラマほつぽつ裏返す
大吉のみくじ信じることにする
大吉のくじに救われ立ち直る
嬉しげに大吉だよと祭りの夜
大吉で鼻歌まじり宮の森
大吉と出たおみくじを握りしめ
大吉のようだ出足が弾んでる

岸和田川柳会

原 さよ子報

ちえこ 多賀子 桂子 蘭 たけし 昌枝 幸 芳山 紫見 浜丘 静恵 政子 幸子 知恵子 幸代 叮紅

藁葺きの屋根が積雪耐えて春
大屋根に登って探す天の川
屋根にまで花が咲きます武家屋敷
しゃぼん玉屋根まで飛ばし子の笑顔
茅葺きの屋根の美とどむ白川郷
パンドラの箱は屋根裏部屋に置く
鼻折れた天狗が屋根で泣いている
大屋根で男演じる大工方
涙貯め落選候補最敬礼
惨めです歳がこの恋邪魔をする
過ぎた日の惨さいつかバネにする

惨めさにめげず発奮金字塔
同窓会出世の友がまぶし過ぎ
両陛下行く先々で小旗ゆれ
群がった蟻で真つ黒砂糖入れ
たんぼほの綿毛の群に夢がある
野薔薇群れ一枝だけが横を向き
彼の地でも群がり咲けよ彼岸花
群がると味が落ち出すラーメン屋
デバ地下の値引き待つ群れる主婦
献金に群がる党をじつと見る
嫁ぐ日の荷物に入れて来た免許
変節は免許皆伝風見鶏
免許ある腕を信じて河豚の鍋
飯免の後ろを走る日の不運
持ち主の顔で見栄はるレンタカー
竹島を巡り持ち主鬨き合う
ハリケーン屋根だけ浮かぶジャズの街

ゆい 甚一 淳子 浅子 力子 ふみよ 洋 東吉 珠子 ダン吉 ゆり子 穰一 基 蛙城 守 呂万

「川柳宮城野」七〇〇号記念

第16回 誌上川柳大会

課題『続』選考・斎藤大雄・岩崎眞理子

渡辺松風・いしがみ鉄・新家完司・

田口麦彦・雲石隆子(未発表2句詠)

参加料 千円(発表誌4月号呈)

投稿用紙 自由 干・住所・氏名・TEL明記

投句締切 18年1月20日必着 20位まで呈賞

投句先 〒987 川柳宮城野田郡浪合町蔵人沖名296-1
小笠原功苑 電話0229-4312231

主催 川柳宮城野社

柳界展望



☆第11回名張市民文化祭は10月15日、名張市総合福祉センターで開催された。当日の受賞句は次のとおり。
 〈市議会議長賞〉

人生の裏目を語る深い皺
 大田 昭
 日は昇る砂漠に動くもの
 はない
 乙倉 武史
 年間旬報の中からの受賞句
 〈市長賞〉

〈伊丹市教育長賞〉
 ときめきを生きる火種に
 しています
 山本 義子
 〈伊丹市長賞〉
 ざりざりのところに本音
 おちている
 西口いわゑ

☆第6回文学ルート川柳は、5097名の参加を得て3月31日締め切られた。本社関係受賞者は次のとおり。

〈奨励賞〉

どの道も神話の匂いする町だ
 城 多喜
 父さんはクレイン母さんは大地
 高瀬 霜石
 〈佳作賞〉
 小川てるみ・伊藤玲子・川本畔

人生の地図書きかえる八十路坂
 江原 秀夫
 〈教育委員会賞〉
 門限を過ぎるとパパが落着かぬ
 丹後屋 肇

▽訂正とお詫び△
 11月号P86中段2行目、いさかい、いやさか 表3
 右上ワク5行目、北野哲夫
 ↓北野哲男

☆第55回富田林市民文化祭は、10月15日富田林市公会堂で開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

☆第55回富田林市民文化祭は、10月16日岸和田市立福祉総合センターで開催された。当日の同人の秀句は次のとおり。

異常なしそれが一番いい記録
 川端 一步
 誉め言葉叱る仕上げに入れておく
 土橋 房枝
 卵割る卵に詫びた事はない
 川上 大輪
 盗み見をしてもカルテは読めません
 福本 英子
 流行を追うと私が消えて行く
 山本 柳昌

▽ご芳志御礼△
 ○美研アート社より第11回川柳塔まつり用句箋を拝受
 ○高野宵草氏(熊本県)より「川柳しませんか」発刊祝として金一封拝受。
 △同人動向△
 ○天笑主幹は10月29日、第20回国民文化祭・ふくい2005に出席のため福井行。
 ○10月30日、第29回鳥取県川柳大会出席のため、天笑主幹、みつ子副主幹、たもつ副理事長他5名米子市行。

☆第55回富田林市民文化祭は、10月15日富田林市公会堂で開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

☆いたみ市民川柳大会は11月3日、101名でラスタホールで開催された。当日の本社受賞句は次のとおり。

人生の地図書きかえる八十路坂
 江原 秀夫
 〈教育委員会賞〉
 門限を過ぎるとパパが落着かぬ
 丹後屋 肇

▽訂正とお詫び△
 11月号P86中段2行目、いさかい、いやさか 表3
 右上ワク5行目、北野哲夫
 ↓北野哲男

☆第55回富田林市民文化祭は、10月15日富田林市公会堂で開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

☆いたみ市民川柳大会は11月3日、101名でラスタホールで開催された。当日の本社受賞句は次のとおり。

人生の地図書きかえる八十路坂
 江原 秀夫
 〈教育委員会賞〉
 門限を過ぎるとパパが落着かぬ
 丹後屋 肇

▽訂正とお詫び△
 11月号P86中段2行目、いさかい、いやさか 表3
 右上ワク5行目、北野哲夫
 ↓北野哲男

☆第55回富田林市民文化祭は、10月15日富田林市公会堂で開催された。当日の本社関係者秀句は次のとおり。

☆いたみ市民川柳大会は11月3日、101名でラスタホールで開催された。当日の本社受賞句は次のとおり。

人生の地図書きかえる八十路坂
 江原 秀夫
 〈教育委員会賞〉
 門限を過ぎるとパパが落着かぬ
 丹後屋 肇

▽訂正とお詫び△
 11月号P86中段2行目、いさかい、いやさか 表3
 右上ワク5行目、北野哲夫
 ↓北野哲男

| 句会名 | 日時と題 | 会場と投句先 |
|---------------------|--------------------------------------|---|
| 尼崎 尾浜 川柳会 | 13日(火)午後1時から 椿・極楽・自由吟 | 尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太 |
| ほたる 川柳 同好会 | 13日(火)午後1時から 歳月・分ける・なかなか | 豊中市立池田公民館 阪急・モノレール 池田駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎 |
| 高槻川柳 サークル 卯の花 | 15日(木)正午から 憧れ・遮断機・ついで ボーナス・自由吟 | 高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし |
| 岸和田 川柳会 | 17日(土)午後1時半から 見切る・結ぶ・面識・物置 | 市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅徒歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万 |
| 川柳 藤井寺 | 18日(日)午後1時から 鍵・ほんとう | 藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子 |
| 川柳 ねやがわ | 18日(日)午後1時半締め切り 守る・荷物・ゴール・自由吟 | 寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 |
| 岬川柳会 | 18日(日)午後1時半から 異状・北風・なりゆき | 岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵 |
| もくせい 川柳会 | 19日(月)午後1時から 時効・シナリオ・ゆっくり 自由吟 | 豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清 |
| 川柳塔 みぞくち | 19日(月)午後7時半から 準備・年末・雑詠 | 溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々 |
| 南大阪 川柳会 | 20日(火)午後6時から 地図・悪い・囲む・椅子 | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ |
| 川柳クラブ わたの花 | 23日(金)午前9時半から 謎・度胸・勘違い・びったり | 八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風 |
| 東大阪市 川柳 同好会 | 24日(土)午後6時から ゲスト・回る・捨てる・像 | 東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-1-21 片岡湖風 |
| はびきの 市民 川柳会 | 25日(日)午後1時から 四季・年末・闇・「オープン」 | 羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩岡 敏 |
| 京都 塔の会 | 26日(月)午後1時から 灰・くじ・大事 | ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽 |

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

12月各地句会案内

(開催日順)

| 句会名 | 日時と題 | 会場と投句先 |
|----------------------|--|---|
| 川柳塔 な　　ら | 1日(木)午後1時から 越す・弁・反省 | 奈良市立中央公民館4F(近鉄奈良④出口徒歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子 |
| 尼　　崎 いくしま | 2日(金)午後1時から 納める・未来・雑詠(A・B) | サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 |
| 城　北 川柳会 | 3日(土)午後1時締め切り 笑う・余る・レジ・自由吟 | 旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子 |
| 富柳会 | 3日(土)午後1時から 尾・諦め・自由吟 | 富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 |
| 倉　吉 川柳会 | 3日(土)午後1時から データ・ところで・本当に | 倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男 |
| 川柳塔 唐　　津 | 5日(月)午後1時半から 呼吸・夜寒・じれる | 唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑 |
| 堺川柳会 | 9日(金)午後1時から 遊ぶ(共選)・凄 い レ・タ・ス(折り句) | 堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑 |
| 川柳塔 打　　吹 | 10日(土)午後1時から 湯気・徳・許す | 倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 |
| 川柳塔 ま　　つえ | 10日(土)午後1時から 財布・シナリオ・転ぶ つくづく | 松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘 |
| 川柳塔 みちのく | 10日(土)午後4時から 煩惱・飲む・スキー | 弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯 |
| 川　　柳 ふうもん 吟　　社 | 11日(日)午前9時から 没句供養川柳大会 | 全労災ビル(11月号P.110参照) 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京 |
| 八尾市民 川柳会 | 11日(日)午後1時から チェック・飯・叶う・雑詠 | 山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子 |
| 川柳塔 わかやま | 11日(日)午後1時から 鐘・屋台・あくせく 二人称(君・お前など) | 近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良 |
| 西宮北口 川柳会 | 12日(月)午後1時から やりがい・眩む・淡い・自由吟 | 西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ |

編集後記

☆10月31日「直原玉青画伯お別れの会」に参列した。画伯は11月号でお知らせした通り、9月30日に逝去され親族だけの密葬は終えておられる。

☆画伯は守口市の名譽市民だったので、会は守口市・日本南画院・守口市総合美術協会が合同で、守口文化センターで執り行われた。

☆定刻の2時に着くと、470人収容の会場は満席で、あふれた人がロビーで立錐の余地もない有様。改めて画伯の存在の大きさを認識した次第である。「川柳塔」は、格調高い表紙絵を揮毫していただいたお陰で、どれだけプラスになったか計り知れない、と今さらに思った。

☆そもそも画伯と本誌との

縁は、初代の中島生々庵主幹が師事して居られたことからできたと思う。ずつと昔、生々庵・小石ご夫妻の絵の展覧会に、義母のお伴をして行ったことがある。

ご夫妻合作で毎年新春に描かれる干支の軸も、静物や風景画も玄人はだして見事だったのを憶えている。きつと玉青画伯の指導のたまものだったに違いない。

☆「お別れの会」は無宗教で実にさわやかであった。

一面に花を飾った中、宗匠頭巾ではは笑んでおられる写真に、参列者一人一人が菊を手向ける。10歳まで現役で、家族に大切にされ、亡くなる前日も晩酌を楽しまれたと聞く。文字通り幸せを絵に描いたような生涯を終えられた画伯に、現世より以上の来世の幸せを祈り、これまでのお礼の手を合わせた。

戦前の川柳漫画が見たい

トリビアリズムという言葉があります。瓊末主義と訳します。本質の探究を離れ、末梢的な事柄にこだわることです。小説や短歌の世界で、こう批判されるのはたいへん侮蔑的なことです。

ところが川柳では事情が異なります。軽味の句は日常通俗的な人間の中に、普遍的で淡々とした人間模様を描き出し、人生の真味を捉

えようとします。川柳はトリビアを文芸に高め得るのです。

突然、私事になります。戦前の家庭雑誌などに、軽妙な句へ洒落な漫画を付した川柳欄がありました。可笑味の句が多かったのですが、軽味の句もかなりありました。それが見たいのです。大阪近辺の各図書館へ電話しましたが、どこも雑誌など保存していません。雑誌の所在をご存じの方おられますか。

早川 樓世

ひとつこと

○四十年間にわたり、川柳塔の表紙を飾っていた。

直原玉青先生が亡くなった。最後の二年あまり、直接絵を戴きにお宅へお邪魔することになり、若い頃のお話を聞く機会に恵まれた。

○明治三七年岡山県に生まれ、三歳の時淡路島に移り、十六歳で両親と離別、姉も嫁ぎ、以来大阪へ出て一人で生きる決意をされたそう

額の塾費がなくてすこすこ

と大阪へ帰った翌日、関東大震災があり、東京に留まらなくて幸いであった。

○程なく大阪の画家、矢野橋村に才能を認められ師事することになる。好きな道

ではあったが、その努力、精進ぶりは決して人並みではなかったはずである。

○享年百一歳絵筆一筋の生涯であった。

合 掌

(希)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(2月号)

地名

都道府
市

姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「油断」 (12月15日締切)

2月号発表

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

B A

| | |
|--|--|
| | |
|--|--|

B A

| | |
|--|--|
| | |
|--|--|

地名

市都
道府

姓
雅号

地名

市都
道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい





医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護 2 A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>